



Annual Report
of
NICMC
Osaka Medical College

2014



目次

巻頭言

発刊にあたって.....大槻 勝紀(学長)

Foreword.....Yoshinori Otsuki (President)

NICMC の国際交流戦略.....花房 俊昭(NICMC センター長)

1. 運営委員会委員..... 02

2. 各診療科協力教員..... 02

3. 国際交流協定締結校の概要..... 03

4. 参加学生の声..... 04

(2014 年度国際交流締結校との交流実績・受入・派遣)

■【医学部】

①. ハワイ大学

②. マヒドン大学

③. 台北医学大学

④. 韓国カソリック大学

⑤. アムール医科アカデミー

■【看護学部】

①. 台北医学大学

5. 第 14 回国際シンポジウム..... 61

6. 社会貢献(地域との交流)..... 62

7. 交流協定締結校以外との交流..... 62

8. センター長の医学英語勉強塾..... 62

9. 留学奨学金..... 63

10. 資料(Data of the CIER)..... 63

11. 2015 年度年間交流計画..... 63

12. その他..... 64

※. NICMC の各種統計実績(2005~2014)..... 64

巻頭言

□発刊にあたって



大槻 勝紀 学長

昨年6月1日に学長に就任しましたので一言ご挨拶いたします。本学は日本からアジアや南米への移民のための医師派遣が目的で昭和2年、5年制高等医学専門学校として設立され、その精神は「建学の精神」や「学歌」にも謳われています。今風に言えば医療を通しての国際交流といえるかもしれません。

アムール医科アカデミーで始まった学生交流はハワイ、タイ、韓国、中国、台北に広がりを見せ、また大学院生や研究者による研究や医療の交流、国際シンポジウムの開催等、NICMCの活動が年々盛んになっています。これもNICMC職員を始め、基礎系、社会系および臨床系教室のスタッフの皆様、また関連病院の方々の温かいおもてなしのおかげと感謝いたします。

社会からは高大接続、国際認証、機関別認証評価等により大学における教育と研究の質の保証と独自性が問われています。NICMCが本学の独自性の中心的な役割を担っていただくよう期待しています。

また文部科学省GP事業のうち、「大学の世界展開力強化事業、特に学生交流のうちアジア・太平洋諸国との交流」が本年度新規事業として募集が予定されています。NICMCでの学生、研究者、医師交流の成果をもとに応募していただければと思います。

今後とも本学医学部、看護学部の学生、教員、研究者によるグローバル展開力のある国際交流をNICMCに期待しています。

Foreword

Yoshinori Otsuki (President)

Osaka Medical College was established in 1927 and started as a five-year medical vocational school. It was founded in order to dispatch doctors to other Asian nations and to the South American continent so that Japanese immigrants who moved to those countries would be well

looked after. Such an original school motto appears in our school anthem, too, and its spirits could be expressed as “global communication” through medicine.

We began student exchange programs with the Amur State Medical Academy in Russia, and they expanded year by year, to Hawaii, Thailand, Korea and Taiwan. The International Symposium has been held every year, as many as 15 times. We thank the staff very much at clinical departments, research departments and NICMC as well as outside medical institutions who kindly give their helping hand to our exchange program operation.

We cannot ignore the influence of international recognition and Institutional Certified Evaluation and Accreditation, where we are explicitly expected high quality and originality in our education and research. I am hoping NICMC will act the central role in terms of originality in our international exchange activities.

Among the GP projects of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, there is a new one this year called “Enhancing the global power of universities and colleges, especially student exchanges with Asian Pacific Higher Educational Institutions”. Applications are going to be invited. We would like to challenge this based on the achievements NICMC made in student and teacher exchange.

I expect NICMC to extend our international exchange programs even further for the benefit of medical and nursing students, faculty members, and researchers.

□NICMCの国際交流戦略



花房 俊昭 センター長

この度、2回目の当センターAnnual Reportを発刊するにあたり、当センターの最近の活動内容と、今後の戦略について紹介したいと思います。

当センターは、医学教育、研究、医療技術の国際交流を目的として、1998年1月に設立されました。海外の大学、研究機関、病院などと、医学部および看護学部学生の学生交流、大学院生や教職員による手術技術交流、研究室交流をはじめとする学術交流、また国際シンポジウムの開催や国際協力機構(JICA)への協力など、多岐にわたって交流を深めています。

海外との交流においては、一般的に教員同士のみの交流に留

まる大学が多いのですが、本学では学生時代に培った交流こそが、大学院、医師へと道を進めた際に、さらにパワーアップできる大切な機会だと考え、学生交流にも注力しています。

学生交流においては、米国・ハワイ大学、ロシア・アムール医科アカデミー、タイ・マヒドン大学、中国医科大学、韓国カソリック大学、台北医学大学、シンガポール国立大学、ソウル大学と、国際交流協定のもとで、カウンターパート方式で交互に学生の留学を実施しています。また、これらの交流がいかに相互の学生にとって素晴らしい機会となっているかは、本 Annual Report に掲載されている学生のレポートをお読みいただければ一目瞭然です。

また、海外の医学教育システムや学生生活を知る目的で、毎年国際シンポジウムを開催しています。2014年7月11日には第14回国際シンポジウムを開催し、米国、タイ、韓国、中国、台湾に短期留学に行った本学の学生はそれぞれの体験を、そして、交流提携校から来日した学生は母校の大学紹介を、それぞれ英語でプレゼンテーションし、活発な討論が行なわれました。

一方、当センターでは、本学研究者の海外留学や、外国人研究者の本学への受入をサポートする目的で留学支援制度を設けており、これまで多くの若手研究者がこの制度による渡航費用の一部支援を受けて留学しました。

さらに、当センターに設置しているテレビ会議システムについても、各部署による諸外国の医療機関とのカンファレンスや、手術指導への利用が期待されています。

これら今までの成果を基盤に、当センターの今後の戦略として、以下のような項目を掲げたいと思います。

- 1) トップレベルの海外提携校との連携拡大
- 2) 医学英語教育の充実(英語教室と連携)
- 3) 低学年からの海外派遣の実現
- 4) センターの充実(人・予算)
- 5) 看護学部学生の国際交流の拡大
- 6) 看護師の国際交流支援
- 7) 大学院生・研究者の留学サポートの充実

これらの項目に重点を置き、当センターの発展を目指したいと考えておりますので、引き続き皆様のご指導ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

1. 運営委員会委員

	氏名	所属・職位
委員長	花房 俊昭	中山国際医学医療交流センター センター長、内科学 I 教授
委員	黒岩 敏彦	附属病院 病院長
委員	河田 了	医学部教育センター長 耳鼻咽喉科教授

委員	泊 祐子	看護学部教育センター長 小児看護学教授
委員	大槻 勝紀	解剖学教授
委員	朝日 道雄	薬理学教授
委員	米田 博	神経精神医学教授
委員	石坂 信和	内科学Ⅲ教授
委員	池田 恒彦	眼科学教授
委員	植野 高章	口腔外科学教授
委員	佐々木 綾子	母性看護学・助産学教授

2. 各教室・部署協力教員(窓口担当者)

教室名	職位	氏名
内科学 I	専門教授	木村 文治
〃	講師	寺前 純吾
内科学 II	診療准教授	津田 泰宏
内科学 III	講師	伊藤 隆英
神経精神医学	助教	金沢 徹文
一般・消化器外科学	准教授	田中 慶太郎
胸部外科学	専門教授	根本 慎太郎
脳神経外科学	教授	黒岩 敏彦
整形外科	講師(准)	藤原 憲太
小児科学	講師(准)	瀧谷 公隆
産婦人科学	助教	佐々木 浩
眼科学	教授	池田 恒彦
耳鼻咽喉科学	准教授	萩森 伸一
皮膚科学	助教	穀内 康人
泌尿器科学	准教授	木山 賢
放射線医学	教授	鳴海 善文
麻酔科学	講師	宮崎 信一郎
リハビリテーション医学	助教	仲野 春樹
口腔外科学	助教	木村 吉宏
救急医学	教授	高須 朗
解剖学	専門教授	前村 憲太郎
生理学	教授	小野 富三人
薬理学	教授	朝日 通雄
病理学	教授	廣瀬 善信
微生物学	専門教授	中野 隆史
集中治療部	准教授	梅垣 修
輸血室	准教授	河野 武弘

3. 国際交流協定締結校の概要

1) ハワイ大学

ハワイ大学はオアフ島のマノア(ホノルル市内)の他、ハワイ島のヒロなどにキャンパスを持つ州立の総合大学である。医学部は School of Nursing, School of Public Health, School of Social Work と共に College of Health Sciences and Social Welfare を構成している。医学部の歴史は新しく、1967年に2年制の基礎医学のみを履修する医学部として創立され(卒業生は米国本土の医学部3年に編入された)、1973年に臨床の2年を加え4年制の医学部となった。

ハワイ大学とは平成15年より、カウンターパート方式で相互交流を実施している。約6日間のPBL方式によるワークショップ(Clinical Reasoning等)への参加、約4週間のハワイ大学連携病院であるクアキニ病院での病院研修が中心である。

2) 中国医科大学

中国医科大学は遼寧省(中国東北部:旧満州)瀋陽市に本部を置く中華人民共和国の国立大学である。1940年に新生中国に最初に設置された国立大学である。古い歴史がある有名な大学として、中国の現代医学教育に重要な地位を占めている。7974名のスタッフ、20426名の学生がいる。1976年から、中国医科大学は中国教育部が指定した留学生を受け入れられる最初の医科大学の一つとして、50あまりの国からの数百名の留学生を受け入れて、現在は24の国から400名以上の留学生が学んでいる。

3) マヒドン大学

1888年チュロンコーン大王(ラマ5世)によって創立したマヒドン大学はタイ国で最も古い教育機関の一つである。大学は、全学生1万9千人以上の学生と400以上の大学のプログラムをサポートしている。2,600以上の教授陣とともにその学生と先生の比率は1対8である。その比率はタイの高等教育研究機関の中では、最高の数値である。

119年以上、マヒドンは、多くの変化と進歩を経てきた。現在、16の学部、8つの研究所、3つの病院、そして6つの単科大学を持っている。

4) 台北医学大学

台北医学大学は1960年に私立台北医学院として創立され、2000年に台北医学大学と改称した。首都台北近郊に医学・歯学・薬学・看護学など7つの単科大学、13の学部(学生数は6000名以上)を有する台湾有数の医療系総合私立大学である。2011年のQSアジア・トップ100医科大学にもランクされており、特に医学部は3つの附属病院(合計3000床)を有し学生数は医学部・大学院を合わせて1700名が学んでいる。

5) 韓国カソリック大学

韓国カソリック大学医学部(聖医キャンパス)は1954年の開校以

来、生命を尊重する韓国医学界の先駆者としての役割を果たしてきた、ソウル市に本部を置く大韓民国の私立大学である。医学部は学生1人当りの専任教員の比率が1.2人と実習面において韓国国内最高水準であり、最高の教育環境を誇っている。また、1200床の韓国最大規模のソウル聖母病院(Seoul St Mary Hospital)をはじめとする8つの附属病院での実習を行っており、医学部学生のためにSTART医学シミュレーションセンター開設、ICM(Introduction to Clinical Medicine)等の新しい教育プログラムなどを提供している。

6) アムール国立医科アカデミー

アムール国立医科アカデミーは、南は中国黒竜江省と国境を接し、ロシア連邦極東管区に含まれるアムール州の州都ブラゴベシチェンスクに位置し、ロシア高等教育省の発表では、ロシア国内約50の医科大学中、第2位の教育、研究評価を受けている大学である。本学との交流は、平成12年以来、学生を対象とした1年ごとに交互に留学するカウンターパート方式で夏季短期研修を実施している。主に、第4・5学年が交流し、外科・内科・産科の臨床実習を行っている。

また、毎年ロシアのアムール国立医科アカデミーで行われている学生科学カンファレンスに、本学学生がDVD録画もしくはSkypeで参加している。

7) シンガポール国立大学

シンガポール国立大学は1905年に設立されたシンガポールの総合大学であり、シンガポールの南西部、ケントリッジ(Kent Ridge)と呼ばれる丘の一角にある。

世界の大学ランキングで有名な英教育専門誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーションによると、東大は世界で43位。一方でシンガポール国立大学(National University of Singapore、通称NUS)は26位。タイムズと同じく大学ランキングの指標として有名な英国クアクアレリ・シモンズ(QS)でも東大は39位、NUSは12位だ。

国内では西の南洋理工大学とともにシンガポールの双璧をなす大学である。また、東南アジア諸国、中国、欧米やアフリカなどを含め100ヶ国以上からの留学生を迎え、非常に国際色豊かな大学である。

8) ソウル国立大学

ソウル国立大学は1946年に設立された国立のトップ大学で、医学部は附属病院とともに鍾路区蓮建洞の蓮建キャンパスにあります。知識の教育のみならず慈愛や尊敬といった精神の大切さを目標に謳い、医学界の真のリーダーを育てる事、また医療を通じて健全な社会作りにも貢献する事を目指しています。世界でも有数の医学系大学に成長すべく、才能と独創性を活かした研究、人材育成にも力を入れています。

4. 参加学生の声(2014年度国際交流協定締結校との
交流実績:受入・派遣)

■【医学部】

①. ハワイ大学

(ハワイ大学学生短期研修受入 学生4名)

2014年6月30日から7月11日まで米国ハワイ大学医学部2年生 Diane Chenさん、Elysse Tomさん、Diana Luさん、Hisami obaさんの4名が、海外選択臨床実習の一環として本学附属病院、三島救命救急センター、国立循環器病研究センターで研修を受けました。以下に研修報告を掲載します。[学生研修レポート(抄訳)]

My days in Osaka Medical College
Diane Chen
1st year student
John A. Burns School of Medicine, University of
Hawaii

Upon arriving at the Ibaraki station after an 8-hour plane ride and an hour and a half bus ride, we were greeted by a sweet Japanese lady, not taller than I, wearing tan, with prompt responses and a down-to-business sort of manner but courteous and mother-like. We followed her swiftly like ducklings in a row, almost unable to keep up with her. When we finally reached the apartments, she situated us with the surroundings and waited for us in the lobby to show us to the nearest supermarket. I rode the tiny elevator to the sixth floor to my small but quaint room. There I found a beautiful greeting card waiting for me on the desk. A watercolor figure of a poised young Japanese lady in a beautifully decorated kimono enjoying the view on the veranda at Kiyomizu-dera graced the cover. Though I did not want to keep her waiting in the lobby, I quickly skimmed the contents. Amongst the many kind words there was a quote even more beautiful than the cover: "Life is not measured by the number of breaths you take, but by the moments that take our breath away." And indeed, I would come to discover many memories that would take my breath away in Osaka with the professors, students, and staff at OMC and cooperating hospitals.

Perhaps the most heartwarming medical event that I witnessed was a surgery on an infant just a little under a year in age. Her curly cues were enough to warm the heart. As her parents walked her into the operation room, both faces littered with tears, the doctor tried to reassure them. The physician was kind enough to explain the surgery in detail in order to surgically repair the tetralogy of fallot to us. Many hours later, after a long and laboring surgery, the parents came to visit their child, both afraid to touch their delicate-looking daughter. Both parents were still searching for a confirmation from the surgeon that their child was safe from future harm. Finally, they reached over to touch her forehead and cried tears of joy and relief instead.

Other events in the hospital, though not as heartwarming to observe were equally intriguing. Perhaps the most interesting was our rotation in neuropsychiatry, during which we saw a patient with a catatonic form of schizophrenia. Though the mechanism of this form of mental illness was unclear, the doctors and nurses did what they could to give the patient as best a quality of life as they could. It was perturbing to know that a patient that once had been able to perform daily activities could progress to a stage so severe that coherent speech and movements were impossible. Even so, it seemed that the physicians in Japan continue to persevere to conduct research that could give them so glimmer of hope in better diagnostic and treatment methods for these types of patients. I was fortunate enough to try on the infrared diagnostic equipment that seemingly measured the brain activity of patients by accounting for oxygenated hemoglobin in the brain. As the physician explained how the equipment worked, I began to doubt the accuracy of such a diagnostic method, especially due to the inconsistencies of the readings. But the scientist in me also wanted to believe that some solution must be available to help in the diagnoses of such common place mental illnesses. At the same time, I felt that Japanese health care was so much more receptive to new ideas and developments.

Though I may never truly know whether socialized health care is better than the current system in the United States, I have a small idea of what developments it has brought to society in Japan. Perhaps there are also many cultural aspects that contribute to the way people perceive physicians that allow them to practice medicine more liberally than we do in the United States. And though I hope that some part of that might be incorporated in to health care here, the outlook does seem rather dim.

Finally, because I had so much fun seeing the ebb and flow of Japanese culture, I am compelled to share a little of my insights into Osaka and Kyoto. First and foremost, the people were all incredibly polite and friendly, which I think was what made the trip so enjoyable both inside and outside of the hospital. I must admit, though it is no longer a secret by any means, that the tea ceremony with our fellow OMC friends was my favorite cultural activity along with our trips to Kyoto. I was truly able to appreciate the beauty and subtlety of Japanese culture, but not without the help and explanation of our newfound friends at OMC. I hope to be back to visit someday!

<抄訳>

大阪医科大学で過ごした日々

Diane Chen

長いフライトの後にとっても温かいお出迎えをして頂いて、私の大

阪医科大学での2週間は始まりました。

研修中での一番心温まる Medical Event は胸部外科での一歳に満たない髪の毛がくるくるした可愛い女の子の手術でした。手術室に子供に付き添ってきたご両親の顔は涙でぐしゃぐしゃで、先生は安心させるために言葉をかけていました。そんな中でも先生はファロー四徴症の手術について詳しく私達に説明をしてくださり、それから長時間の大変な手術が始まりました。術後の子供はとても弱々しく、お見舞いに来たご両親は恐がって子供に触れることもできずに「先生、この子はもう大丈夫なんですよ？」と不安げに医師に訊いていました。やっと手を伸ばして子供のおでこにそっと触ることができた時、ご両親は安心と喜びの涙を流していました。

心が温まる話ではありませんが、興味をひいたのは神経精神科で見た緊張病型統合失調症の患者さんでした。日常を普通にすごせていた患者さんがまともに話もできず動作すらできないこんな状態にまで症状が悪化するなど実際に見ると驚きます。この病気のメカニズムはよくわかっていませんが、看護師や医師の方々が出来る限りいい状態で患者さんが生活できるように努力されていました。日本では研究も辛抱強く行われていて患者さんに希望を少しでも与えるべく診断や治療の改善に取り組まれているようでした。運良く赤外線診断機器を使わせてもらう事ができて、これは脳内の酸素化されたヘモグロビンを測定することによって患者さんの脳の働きを測定するものようでしたが、先生に説明をして頂いているうちに診断結果の正確性に疑問を持ちました。データの解釈が一定ではないからです。とはいえ科学者でもある自分は、よくある精神病なのでその診断に確固たるものがあると信じたいです。同時に日本の健康管理システムは新しい考えに柔軟に対応しているんだなと思いました。

国の補助を受けて成り立っている医療システムが現在のアメリカのシステムと比べて良いのかは私には本当のところわかりませんが、それが日本の社会にどんな進歩をもたらしたかについてちょっと私なりに考えたことがあります。おそらく一般の人が医師をどういう存在として見ているかには多くの文化的側面が影響していて、そしてそれが医師がアメリカよりも自由度の高い医療を行使することができる背景となっているのだと思うのです。そしてその医師に



対するそうした信頼がここ米国でも医療にいいように働いてくれるといいとは思いますが、余り期待できそうにないです。

最後に、この研修、そして研修以外の時間が楽しく過ごせたのは親切な人々のお陰です。とくに大阪医科大学の学生さんとお茶席イベントは京都観光と合わせてとても楽しかったです。日本文化の奥ゆかしさ、美しさを堪能できたのも皆さんが説明し、理解を助けてくれたからこそです。いつかまた皆さんとお会いできることを願っています。

<抄訳>

大阪医科大学での研修

Elyse Tom

研修の初日、潰瘍性大腸炎の患者さんの腹部に手術器具が入り解剖学の時間に習ったような血管が切られる様子を見学して、腹腔鏡下大腸切除術の複雑さがやっと自分の中で視覚化されました。先生が7時間に及ぶ手術で見せた技術の正確さ、集中力、そして忍耐力は本当に素晴らしいと思いました。

三島救急医療センターでは様々な医師、看護師、職員の方々のチームワークを見ることができました。人口臓器の装置を見せてもらったり、心肺停止やくも膜下出血についても教えてもらいました。

国立循環器センターではファロー四徴症のメカニズムと治療についてディスカッションをし、胎児を超音波で見ました。

脳外科では先生が脳腫瘍を素晴らしい技術で取り除くところを見学しましたが、今まで見た中でも特に感動的な手術の一つでした。執刀の先生方と助手を務める先生方が疾患についての説明と手術の手順について丁寧に説明してくださいました。

大阪医科大学の優秀な先生方に大変感謝しています。先生方は難しい概念を分かりやすい言葉や絵を使って説明してくださいました。自分はまだどの専門の医師になるか決めてはいないのですが、今回の研修で手技と臨床診察との組み合わせが実習していて楽しいと気付きました。幅の広い専門分野を実習で回らせていただき本当に感謝しています。日米の医療は似た面ももちろん多いですが、相違点も多く、日本の健康管理システムはとても効率的で画期的、共働的に作用する部分があります。

アメリカではまだ使われていない診断ツールや治療などハワイ大学の授業にでているだけでは知ることの出来ないことをたくさん学ぶことができました。大阪医科大学で得た知識をこれからもずっと活用していきたいです。

医学の勉強も一生懸命でしたが、研修の後、大阪医科大学の学生さんと過ごした時間も忘れられません。クラブ見学では空手部で実際に突き、蹴り、護身術の練習をしたり、茶道部で作法に従ってお抹茶を頂いたりしました。シミュレーションセンターでは実際の現場で使われている器具や糸を用いて血管縫合をする練習を指導してもらい、お腹がすけば地元の美味しいレストランにさりげなく連

れて行ってくれました。京都や大阪も一緒に観光しました。

新しい友だちができ、日本の医療を学び、日本という国の文化を堪能するまたとない経験ができました。本当にありがとうございました

My Experience at Osaka Medical College

Diana Lu
1st year student
John A. Burns School of Medicine
University of Hawaii
M.D. Candidate, Class of 2017

I am extremely grateful to have had the amazing opportunity to spend 2 weeks at Osaka Medical College (OMC) for a summer exchange program this year. With the aspiration to practice medicine in Hawaii, a place with a large Japanese population, I hoped to gain insight and a better understanding of the Japanese culture, especially in the medical setting. Because culture plays an important role in patient care, having a deeper understanding and appreciation of other cultures can help me better serve and cater my approaches to optimize care to patients. Thus, I believe that experiencing different cultures broadens a person's adaptability and effectiveness in new settings, which is one of the many things I gained from my experience at OMC.

During our 2 weeks at OMC, 3 of my JABSOM classmates and I rotated through different departments each day. Our schedule was very well organized and diverse. While most of the shadowing took place at OMC, we also had the opportunity visit other hospitals, such as the Mishima Critical Care Center and the National Cerebral and Cardiovascular Center. We observed numerous procedures in the operating room, physician-patient interactions, and patient rounds, and engaged in many intriguing conversations with the physicians. Although the doctors were very busy, they always made time to explain concepts and procedures, and answer any questions we had. One of the most memorable experiences for me was observing surgery on a patient with Tetralogy of Fallot. We were able to watch the entire surgery and saw the patient's actual heart pumping, which was just amazing. I was especially moved and impressed by the compassion the surgeon expressed toward the child's parents as they wheeled their daughter into the operating room before the surgery and when they returned after the surgery.

In addition to what we observed in the hospital, I also learned more about the medical education system and training in Japan, which differs from that in the United States. I found it interesting that the Japanese students attend a 6-year medical education program after graduation from high school, while students in America complete 4 years of undergraduate education before 4 years of medical school. Because of these differences, I noticed that the medical school students in Japan

participate in a lot more clubs and activities than medical students in America, since most students participate in those clubs during their undergraduate years. Despite these differences, I felt that medical students in both Japan and America are equally driven and motivated to learn.

Beyond the medical knowledge we gained from our rotations in the hospital, we also made lasting friendships with the OMC students, whose hospitality and generosity really made our stay in Osaka fun and memorable. The Kyoto trip the OMC students planned was one of the highlights of my trip. So many OMC students took the time to come with us and show us around the beautiful city. I really appreciated them sharing and teaching us their culture. During our time in Osaka, we also ate many delicious foods, such as okonomiyaki, takoyaki, kushikatsu, Japanese pizza, soba, sashimi, sushi, and so much more. While Hawaii has a lot of Japanese foods, nothing can compare to the freshness, flavor, and presentation of the foods we had in Japan. I was also touched by the thoughtfulness of the students, who made each one of us a personalized photo album with pictures from the trip and messages from all the students we met. I was very happy to be able to see some of the OMC students again at the JABSOM workshop this summer.

I would like to thank the Nakayama Center, students, physicians, patients, and staff for all their hospitality and for an unforgettable experience in Osaka. I will always cherish the experiences I've had and friendships I've made in Japan. This was truly an once-in-a-lifetime experience that will help shape me into a better physician and person. I hope to come back again to OMC some day!

<抄訳>

大阪医科大学で体験したこと

Diana Lu

ハワイで医療に従事したいと思っている私は、ハワイは日本人の人口が多い土地柄なので日本文化を、できれば医療環境下でもっと知りたいと思っていました。文化は患者さんのケアにおいて重要な役割を担うので異文化をより深く理解することは患者さんにあった適正化されたケアをする助けになると思います。それゆえ違う文化を経験することは新しい環境での順応性を高め、より力を発揮できる能力を養うと信じていますし、今回の研修で学んだ多くのことの一つです。

研修の間はハワイ大学から一緒に来た他の3人と時には違うスケジュールで各科を回りました。多様性に富み、よく考えられた内容でした。指導教官とともに回診や実習を行ったのは主に大阪医科大学附属の病院でしたが、外部の三島救急医療センターや国立循環器病研究センターなどの医療機関にも見学に行きました。手

術の様々な手技や医師と患者さんのやりとりを見学し、回診も一緒に回り、先生方と有意義なお話もたくさんできました。先生方は非常に忙しいにもかかわらず、概念や手技を丁寧に説明して下さり、私達のどんな質問にも答えてくださいました。手術の初めから終わりまで全部を見ることができたファロー四徴症の手術は一番印象に残っている素晴らしい手術の一つで、心臓が動いているのを見た時はただすごいと思いました。そしてご両親が娘さんを搬送用ベッドで手術室に連れてきた時や手術後に先生がご両親に言葉をかけていた様子に感動しました。

病院内で学んだことに加えて日米における医学教育や訓練のシステムの違いについても学ぶことが出来ました。日本の医学生は高校を卒業後、すぐに6年制の医学教育機関に入るという点は興味深く、だから日本の医学生はクラブ活動が出来るんだなと思いました。私達はまず普通の大学生として4年間過ごした後、4年制の医学教育機関に入り、最初に入る大学でクラブ活動をします。とはいえ、日米双方の学生が向学意欲に満ちている点では同じだと思います。

大阪医科大学の学生さんの歓迎も私達の大阪での研修を本当に楽しく思い出深いものにしてくれました。京都観光には何人も目の学生さんが一緒に来てくれて美しい街を案内してもらったり、日本の文化について教えてくれました。私達一人一人にメッセージ付きの思い出アルバムを作って研修の終わりにプレゼントしてくれました。心遣いが大変嬉しかったです。

国際交流センターの皆さん、先生方、大阪医科大学の学友の皆さん、そして患者さんも含めて、この一生に一度の大切な思い出をありがとうございました。良き医師となり、良き人として生きるための経験をさせていただきました。是非またいつか大阪医科大学を訪れたいです。

Summer Exchange Program at Osaka Medical College

Hisami Oba

1st year student

John A. Burns School of Medicine, University of Hawaii

Throughout my journey of pursuing a medical career, it has always been my hope to break down language barriers and help put Japanese patients at ease through the use of my bilingual abilities. However, despite my Japanese citizenship, growing up in Hawaii from the age of one made it difficult to become well acquainted with the medical practice in Japan. Thus, I felt eager to take part in this exchange program to experience Japan's healthcare system first-hand so that I could better understand the patients I hope to see in the future. With high hopes and excited anticipation, I hopped on a plane and sat through an eight-hour flight towards my motherland. However, what I didn't know at that time was that I would be leaving Japan with not only an insight into Japanese

medicine, but with an unforgettable experience that included memorable new experiences, a newfound appreciation of my culture and heritage, and the meeting of lifelong friends.

Beginning the first day of our two-week program, we dove straight into the rotation of gastroenterologic surgery. This was very exciting for me because I haven't had the opportunity to observe a surgery before. Wearing protective gear of a mask, hair cap, and shoe covers, I nervously walked into the OR expecting to see a similar scene as those seen in the American movies and shows. However, to my surprise, the surgical rooms were aligned adjacently along a long hallway with people freely walking in and out of the rooms. This was completely different from what I had expected, for in America, only those who "scrub in" with sterilization techniques can enter a surgical room. However, I learned that in Japan, only the equipment and those working closely on the patient are required to be sterilized. This difference was absolutely fascinating to me and left me wondering of the reasoning behind the inconsistency. Although sterilization was a worrisome aspect, I thought the ability to go in and out of rooms allowed for more freedom and the opportunity for various people (including students and other surgeons) to observe different procedures. For example, during my stay, I had the privilege of standing in on a 3D laparoscopic procedure. Because this had been a newer technology, many others also gathered in the room to take a peek at the exciting advance in medicine. In such a way, I feel that the freedom for others to walk into another operating room allows the staff and students to gain additional knowledge and provides a platform for a new teaching technique.

One of the most fascinating and unforgettable moments also occurred during a rotation in the OR. A one-year-old baby was scheduled for a surgery for her fairly rare condition of TOF (Tetralogy of Fallot) and I had the privilege to scrub in and observe the operation. Learning a little bit about the condition in school, I never imagined that I would be given a once in a lifetime opportunity to see it up close. Therefore, along with the surgery being my first operation to ever scrub into, my heart was beating with restless excitement and disbelief as I prepared to enter the surgical room. Inside the operation room, the surgeon provided me with a VIP seat—next to him on a stool looking over his shoulder. I was incredibly appreciative to be given such an opportunity and I feel that the surgeon's thoughtful gesture was the basis of my tremendous experience. Moreover, the surgeon was very kind and attentive throughout the procedure, stopping to explain to me what he was attempting to do and answering any questions I had. To my surprise, he even allowed me to touch the baby's heart as it thumped energetically in the open chest. It was a fascinating experience, seeing the human body in its most vulnerable form, uncovered for everyone to see and working hard to

fight against the misfortune it was given. Concurrently, I was also in complete awe of the advancements in medicine and medical technology that allowed me to be standing there in that moment, witnessing the entire procedure. Although observing the surgical repair of the heart was remarkable, I feel though that the highlight of the experience was when I had the chance to see the parents reunited with their child after the successful operation. Seeing their daughter who appeared peaceful, yet so fragile in her sedated state, the mother, holding back her tears, softly asked the surgeon if she would be able to touch her daughter. The surgeon easily replied, "Of course you can touch her, she's your daughter!" This moment was very memorable for me and I was moved to tears as I sensed something very warm and reassuring in his response. Seeing the mother gently touch her baby was a very emotional and heartwarming moment, in which I felt very fortunate to be a part of.

Besides my wonderful new medical experiences, I never would have anticipated all that I would gain through the student cultural activities. The Nakayama Center was incredibly thorough with planning our schedule during our two weeks, allowing us the opportunity to closely interact with the OMC students. We were invited to many student club activities such as the traditional tea ceremony, karate practice, and suturing practice. Furthermore, the students even organized for us a sightseeing trip to Kyoto and Osaka. Of the activities, I feel that the tea ceremony and the Kyoto sightseeing were my favorite, as they allowed me to experience my culture and heritage the most. I loved the elegance and poise of the tea ceremony and the beauty and maintenance of culture that Kyoto had to offer. The magnificence of it all made me appreciate even more my heritage and the deep-rooted beliefs and values that we, the Japanese, have.

Beyond all the planned activities and the countless meals they treated us to, I feel that the warm hearts of the OMC students were what I appreciated and treasured the most. Not only were they attentive and generous, but also very genuine, friendly, and most of all caring. I will never forget the moment that they surprised me with a cake and a present on my birthday during our sightseeing trip to Kyoto. It was one of the sweetest things anyone has ever done for me, and I couldn't hold back my tears because I was so touched. The cake they prepared was even more moving, for it was topped with my favorite fruit, the Japanese peach. Apparently they had remembered a casual conversation in the market where I had mentioned that it was my favorite. The fact that they had remembered this and made an effort to get me a peach cake was absolutely touching and it truly showed their sincerity and kind hearts.

Words cannot describe how amazing and splendid my two weeks at OMC were. The kindness and hospitality of the staff, physicians, and students truly enhanced the entire

experience and I am incredibly appreciative for all that they have done for us. It makes me very happy to know that I am walking away with not only great memories, but also with new friends I hold dear to my heart. This was truly an experience I will never forget and will forever treasure.

<抄訳>

Summer Exchange Program at Osaka Medical College

Hisami Oba

私はバイリンガルなのでその日本語能力を生かしてハワイの日本人の患者さんとの言葉の壁を崩し、楽な気持ちで診察を受けてもらいたいというのが医学の道を目指すにあたっての願いでした。しかし国籍は日本人であるにもかかわらず1歳からハワイで育った私には日本での医療事情についてよく知る機会がありませんでした。日本の医療システムを直接体験できるとあってこの留学プログラムに参加するにあたって意欲は満々だったのですが、日本医学を学ぶ以外にも日本の文化を再発見して感動したり一生ものの友達ができたり、その他忘れられない思い出がまった留学になるだろうとは8時間のハワイからの機上ではまだ予想もしていませんでした。

初日からいきなり消化器外科での実習が待っていました。手術はそれまで見学したことがなかったのでとてもドキドキしました。防護マスク、帽子、靴カバーをつけて緊張しながら手術室に入ると、予想していたアメリカの映画やドラマに出てくるようなセッティングとは全く違い、人が自由に出入りできる長い廊下に沿って手術室が並んでいてびっくりしました。アメリカでは手術室には消毒滅菌が済んだ人しか入れないのです。後でわかったことですが日本では患者さんの近くで手術に携わっている人と手術用機器だけが滅菌対象になっているのだそうです。

この違いを私はとてもおもしろく思いました。この違いはどんな理由があって生まれてきたものなのだろうか？滅菌は手術において非常に気を使わないといけない点ではあるのですが、部屋に出入りできるということで学生や他の外科医の先生方などが様々な手術手順を見ることができるという利点があると思いました。

例えば研修中に3D 腹腔鏡手術を見学する機会があったのですが、このまだ新しい技術を見たくて多くの先生方が集まって覗いていました。このように直接手術に関係なくても他の手術室に入ることが出来ると医療スタッフ、学生共々知識を増やす事ができますし、医学教育の方法論において一つの土台を提供できるものだと思います。

忘れがたい出来事の一つに1歳の子供さんのファロー四徴症の稀なケースの手術で術野に入らせていただいたことがあります。病気については学校で少し勉強したことはありましたが、その手術

を間近に見る機会があるなんて思ってもみませんでした。ただでさえ術野に入る初めての手術。手術室に入る準備をしても実感もなく落ち着きません。手術室に入ると先生が特等席を用意してくださっていました。先生の横に丸椅子があって、そこに座ると先生の肩越しに手術が見えるのです。そんな機会を与えて頂いて信じがたい思いで感謝するとともに、先生のご言った気遣いがこの日を素晴らしいものにしたのだと思います。先生は手術の間も手術の進行状況やこれからの手順を時間をとって説明をしてくださるなどご配慮を下さり、質問にも全部答えてくださいました。人間の身体が最も弱い状態にあるのを見るのは初めてでした。心臓が皆に見えるようなむき出しの状態なのです。そんな中、心臓はひたすらこの与えられた試練と戦って動いて頑張っていました。同時にそうした医療技術の進歩をその瞬間そこに立って全てを見ていることなどを感じている自分も感じられ、私はその時の状況全てに圧倒されていました。しかし更に感動したのはご両親が手術が成功した後に赤ちゃんにと再会した時、麻酔がまだ効いていて意識のない子供は触ると壊れそうな弱々しい状態でしたが、まるで何事も無く平和に眠っているように見えました。それを見た涙をこらえたお母さんが「先生、子供に触ってもいいでしょうか？」と小さな声で訊いた時、「もちろん触ってもいいですよ、ご自分の娘さんですから！」と先生はあっさりとお答えしましたが、その口調に温かい、お母さんを安心させようとする響きを感じ取って私も涙ぐんでしまいました。お母さんがそっと赤ちゃんに触れる様子は心温まる瞬間で、自分もまたますますその出来事の一環に関わっていると思うととてもうれしい気持ちになりました。

さて、医療の勉強以外にも2週間の研修期間中には大阪医科大学の学生さんとの文化交流が組み込まれていて、クラブ訪問や大阪京都観光を通じて仲良くなることができました。日本文化に対する畏敬と自分の中にある日本人のルーツや信条や価値観を自己確認することが出来ましたが、特に優雅な茶道と浴衣を着た京都観光では日本文化をいっぱい堪能出来てとても楽しかったです。学生の皆さんの温かい気遣いや思いやりはとても嬉しかったです。京都に行った日が私の誕生日で、サプライズでケーキとプレゼントを用意してくれた時はまたまた涙ぐんでしまいました。ケーキそのものが感動的で、私の好きな日本の桃がトッピングのついでにありました。なんと市場で私が何気なしに日本の桃が好きだと言ったのを覚えていたらしく、わざわざそれが乗っているケーキを探して買ってきてくれたのです。

職員の皆さんや先生方、学生の皆さん、又大阪医科大学の皆さんの心遣いとおもてなしのおかげで留学という経験が又とない思い出になりました。一生忘れがたい記憶と新しい友をしっかりと胸にとどめてこれから進んでいけることがとても幸せです。

(ハワイ大学夏期ワークショップ派遣 学生8名)

毎年3月に加えて8月にもハワイ大学医学部では学生向けPBLワークショップが開催されています。平成26年度の夏は8月3日から8月8日まで本学とハワイ大学医学部の国際交流協定に基づいて、5年生の浅野彰之君、塚本美輝さん、乾百優さん、春名うららさん、4年生の中尾多佳子さん、3年生の仲野佐方里さん、上道恵さん、長尾龍太郎君の計8名がワークショップに参加しました。

ハワイ大学夏期ワークショップに参加して

浅野彰之（派遣時5年生）

私は8月3日から8日にかけて行われたハワイWSに参加してきました。私がこのWSに参加を希望した主な理由としては、以前、このWSに参加した同期がとても素晴らしい経験ができた、ぜひトライしてみた方がいいと言っていたのを聞き、それなら自分にとってもいい経験ができるのではないかと、いろいろな面で刺激を受ける事ができるのではないかと思ったからです。

具体的なWSの内容は、ウェルカムパーティーに始まり、施設内見学、PBL、医療面接、教授による講義などがあり、farewellパーティーに終わるといったものでした。

今回、私がハワイ大学で受けたプログラムでとても印象に残っている事は医療面接です。これはオスキーと同じような医療面接をハワイの模擬患者さんですることです。私は先輩から事前にレクチャーをしていただいていたので、それなりの自信をもって臨むことが出来ましたが、本番では緊張してしまい患者さんとうまくコミュニケーションを取ることが出来ず、かなり情けない思いをしました。その様子は全員ビデオに収められ、最後に最も優秀な学生のビデオを全員で鑑賞する機会がありましたが、その学生の語彙力の豊富さ、患者さんとのコミュニケーションの仕方、医師としての説明の仕方は素晴らしく、今でもとても心に残っています。今後臨床医を目指す私にとって、この経験はとても役立つものになりました。

又、今回のWSに参加していたハワイ大学の学生たちの医学的知識の豊さには驚かされました。彼らは全員2年生であったにもかかわらず、私たちの医学的な質問に対し、とても流暢に答えてくれました。私の持っている医学的知識の量との差に愕然とさせられました。医学的知識の量というものは今後医療現場に関わっていく者としてとても重要になってくると思います。私も少しでも多くの医療知識を身に付け、患者さんのお役に立てるよう頑張りたいと思いました。

また、今回参加した日本のメンバーにとっても感謝していることがあります。私は部活の関係で日程上、一日早く帰国せざるを得なかったのですが、最後の夜にホテルで日本の学生メンバーによるfarewellパーティーを開いてくれました。疲れもあり短いWSの中でそれぞれの予定もあったにもかかわらず、私の為に時間を捻出

し、素晴らしいパーティーを開催してくれました。とても嬉しく、心に残るよい思い出となりました。

最後に、このような貴重な体験をする機会を与えて下さった大阪医科大学の皆様に感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

ハワイ大学夏期ワークショップの参加して

塚本美輝(派遣時5年生)

私にとって、今回の留学は初めての海外留学でした。今回の大阪医科大学からの派遣メンバーの中にも、中高時代にホームステイや短期留学。大学入学後にも、アメリカなどの留学経験のあるメンバーが多く、ESSのメンバーでもなく、英会話にも自信のない身としては、不安ばかりでした。留学のチャンスに、とても躊躇していました。けれど、入学時から、留学には興味があり、このまま卒業してしまったら、やはり未練に思うだろうと思い、花房俊昭教授の面接を受け、今回の留学が決定しました。

留学が決まってから、去年の派遣メンバーの方々には本当によくして頂きました。何度も開いて下さった勉強会は、留学に不安を抱えていた私には大きな安心になりました。資料はハワイ大でもプログラム中みかえし、助けになりました。今回のプログラムでは、ハワイ大の学生さん達、日本の様々な大学からの学生さん達と知り、友人になることができました。高知大学、秋田大学、福島大学、佐賀大学、岡山大学、慈恵医科大学、聖マリアンナ医科大学、昭和薬科大学、慶応大学。それぞれの方々に、様々な参加動機。それぞれの思いがあり、皆それぞれに志を抱き、今回のプログラムに参加しておられました。それでも皆、医師として生きること、真っ直ぐ明かで、目が覚める思いでした。

たまたま私はプログラム中に誕生日が重なり、大学のカフェテリアでサプライズパーティをしてもらいました。Dianeの手作りのケーキは忘れられません。

持参してよかったなと思ったものは、和風のカード。ハンカチ。担当して下さったデーモン先生には、高いものではないですが作務衣を持参し、これもOMCの連名でお渡ししたところ喜んで頂けたように感じました。

そして何より、ハワイ大の学生さん達には、本当によくして頂きました。ピルボックス、ノースショア。ホノルルの自宅にも遊びに行かせてもらいました。最後の日には、空港までわざわざ車で送ってくれました。ハグをして、飛行機に乗って。帰国直後の彼女のラインにはこう書かれていました。

This is not goodbye, it is see you later ! !

いつかまた、ハワイでも、日本でも、またどこか別の地でも彼女たちと再会できる日が心から待ち遠しいです。

ハワイ大学でのワークショップを終えて

乾百優(派遣時5年生)

まず、ハワイワークショップ参加の機会を与えて下さった花房俊昭教授、松本さんをはじめ、大学の先生方、中山国際医学医療交流センターの職員の方々、ならびにPA会の方々、本当にありがとうございました。他にも今回のワークショップに向けて、ワークショップを通して、お世話になった人たちは数知れません。感謝の気持ちなしにはこの夏を語れないと思います。

参加が決定した春から夏にかけての時期は、私の学生生活において一番大きな変化でした。自主勉強の大切さを学んだからです。私たちがワークショップに参加する前に、ハワイ大学から医大生たちが大阪医科大学に交換留学で来たのですが、同世代とは思えないほど優秀で大人びている彼女たちに、最初はすごく気後れしてしまい、気持ちばかり先走って、自分の実力や英語力が伴っていないことに不安と焦りを感じていました。でもそんなときに、前年の方たちが毎週開いてくださる勉強会や、月曜日の朝早くから花房俊昭教授が開いてくださる抄読会のおかげで、自分に足りないものが見え、頑張ることができました。

ワークショップでは、全国の大学から集まったモチベーションが高く、優秀な学生たちとの出会いがありました。国家試験よりもずっと先を見据えて勉強をしていて、医学的知識はもちろん、コミュニケーション力や英語力にも長けている学生たちの中で自分を試す毎日は、すごく刺激的でした。今思い返すと、特にPBLが各自の実力を披露し合う場だったように思えます。本場のPBLというだけのことはあり、日本人学生とハワイ大学の学生が混じって、少人数グループで一つの症例に対してあらゆる方向からアプローチをし、お互いのプレゼンテーションに対して意見を交わしあうレベルは、大阪医科大学で2年間行ってきたものをはるかに超えていました。疾患や病態について、日本語なら説明できるのに英語では言葉に詰まってしまうもどかしさを感じることができたことも、これからも英語の勉強を続けていこうと思えるモチベーションにつながる貴重な経験でした。

ワークショップを終えた今、私には、海を越えた向こうに、同じように医師を志す友達がいます。日本中に、この5回生の夏という時期に同じ経験をし、お互いを刺激しあった友達がいます。全ての出



会いが宝物で、一生ものだと思っています。書き出したらきりがな
い程、このワークショップで学ばせていただいたものは多く、受け
た影響は大きいです。5年半の学生生活で充実した時間や、やり
がいを感じることや、素晴らしい瞬間は確かにたくさんありまし
たが、私にとってはこの夏が間違いなく最高でした。ありがとうございました。

ハワイ大学夏季ワークショップに参加して

春名うらら(派遣時5年生)

私がこのプログラムに応募しようと思ったきっかけは、学生のう
ちに留学を経験してみたかったこと、海外の医学生はどのような環
境で勉強しているのかを見てみたかったということ、去年ハワイ大
学のワークショップに参加した先輩の話聞いていて楽しそうだっ
たことです。

私は英語のリスニングもスピーキングも苦手意識があり最初は
とても不安だったのですが、

ハワイ大学からの留学生が7月に大阪医大に来た時に交流したこ
とがスピーキングとリスニングの良い練習となり、またワークショッ
プ中も日に日にリスニング力が上がっていていることを実感しま
した。帰国後はリスニングもスピーキングも元に戻っている気がし
ますが、やはり海外の人との交流が英語を上達させる一番の近道
なのだとということを改めて感じました。

ワークショップではPB、問診、身体診察、禁煙外来などを行いま
した。問診や身体診察などはOSCEの良い復習となり、知識を整理
することができました。

プログラムの中で一番印象に残ったのが注射の実習でした。2
人一組で筋肉注射や皮内注射を行ったのですが、実際に人に対し
て注射を打ったのは初めてだったので最初は緊張しましたが、上
手いったときは本当に嬉しかったです。また皮下注射は自分で自
分に打ったのですが、それによって注射を打つことに対する恐怖
心や苦手意識が消えた気がします。

また、日本人の他大学からの参加者と交流する時間もたくさん
設けられていました。皆意識の高い人ばかりで、とても良い刺激を
受けることができました。東北、関東、四国、九州などあまり会う機
会のない地域の医学生と交流することができるというのもこのワ
ークショップの強みだと思います。

プログラム中や放課後はハワイ大学の生徒がいろいろお世話を
してくれて、有名なレストランや遠方のノースショア、ピルボックス
などに連れて行ってくれました。いずれも車がないと行けないとこ
ろばかりなので本当に助かりました。最後にはメッセージカードと
写真立てももらいとても感動しました。このワークショップで出会
った人々とは今後も交流を続けていけたらいいなと思っています。

このワークショップではさまざまな素晴らしい経験をすることが
でき、参加して本当によかったです。この経験を今後の人生に活

かしていけたらいいなと思います。

最後にこのような貴重な経験をさせてくださった花房俊昭教授を
はじめとした先生方、中山国際医学医療交流センターの職員の方
々に感謝の意を申し上げます。

ハワイ大学ワークショップに参加して

中尾 多佳子 (派遣時4年生)

2014年夏のハワイ大学ワークショップに参加して、日本ではでき
ない多くの貴重な体験ができました。

このワークショップを思い返して、まず頭に浮かぶのはハワイ大
学の学生との楽しい時間です。大阪医科大学ではハワイ大学の学
生を交換留学で受け入れており、その受け入れ期間後、私たち大
阪医科大学の学生がハワイ大学のワークショップに参加します。
彼女らの留学期間中、日本のおもてなしとして、自分の英語の勉
強のためにも、ハワイの学生をいろんな場所へ案内させていた
だきました。このことを通じて、ハワイの学生たちと友達になるこ
とができました。ハワイで再会することで、より一層、絆が深まりま
した。驚くことに、ハワイの学生といることで、日本についてあまり知
らないことにも気づかされ、自国についてもっと学ぶ必要性を感じ
させられました。ハワイの学生たちと過ごした時間、たった一週間
でしたが、一生忘れられることのない時となりました。

他にも多くの留学がありますが、相互留学ができる、これほどす
ばらしい留学は他にはありません。

次に、ワークショップに参加することで学んだPBLについて。英
語でのPBLということで、普段授業で学ぶPBLより難しいものでし
たが、それよりもハワイの学生のPBLへの参加意欲と知識量の多
さに驚かされました。彼らは医学を学んで1年足らずにも関わらず、
日本の学生よりも多くのことを知っているように感じました。自分の
未熟さに気づかされ、勉強に対する考え方が変わりました。

他にも、模擬患者に対する英語での医療面接、臨床実習など医
師になったときに直結する多くのことを体験しました。

運悪くハリケーンによって、プログラムが1日なくなってしまいま
したが、その運の悪さを感じさせない程の多くのことを学ぶこと
でき、このワークショップに参加できたことに対し、大変感謝して
おります。

最後にこのような素晴らしい機会を与えてくださった、花房先生、
米田教授、中山国際交流センターの方々、PA会の方々、ハワイで
ご指導してくださった先生方、おもてなしをしてくださったハワイ大
学の学生に深く御礼を申し上げます。この素晴らしい経験を活かし、
医学生として、これからも勉学に励んでいきたいと思っております。

ハワイ大学のワークショップに参加して

仲野佐方里 (派遣時3年生)

2014年度のハワイ大学夏期ワークショップに参加させていただきました。3年生になり、始まったPBLという形式の授業はハワイ大学で行われたのが始まりだそうです。そのようなハワイ大学のPBLをはじめ、medical interview、injection practiceといった日本ではあまり体験しないような授業、ハワイ大学の学生、日本の他大学の学生との交流を通して自分の中の勉強に対するモチベーションが向上するよとの思いを胸に参加させていただきました。海外留学なんて、もちろん初めての経験で、医学知識も浅く、日常会話すら怪しいのに英語の授業なんてついていけるのかと心配でした。けれど、花房俊昭教授が開いてくださる抄読会、先輩方が開いて下さったこのワークショップへ向けた勉強会の内容を中心に予習していけば、3年生の私でも十分授業内容を理解することができました。むしろ、3年生の今参加してよかったと思います。これからの勉学の糧となるような、多くのことを得ることができたからです。

医学部に入学して1年しか経過していないとは思えないほど豊富な知識をもつハワイの学生に普段どのように勉強しているのかを聞きました。たとえば、PBLで用いられているシナリオには、学習すべき医学的内容の欠片があちこちに散りばめられています。それを学習項目として、各々調べ発表するのはPBLのプロセスの一つです。普通、自分で学習する項目は一つのシナリオにつき一つか二つで、残りは他の人の発表を聞くことで補完しています。私も、普段のPBLの授業をそのように受けていました。けれど、ハワイの学生はそうではなく、シナリオを読んで自分が知らないこと、興味をもったこと、学習すべきと思ったことはすべて自分で調べてまとめているそうです。疑問を疑問として放置しない、そのような勤勉な姿勢が、あれほどの知識の源となっているのです。このような、今すぐにも真似るべき勉強法、姿勢を教わりました。

今回のワークショップをいい契機として、英会話、医学知識、そして医学英語の勉強を継続していきたいと思います。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて下さった花房俊昭教授をはじめとする大阪医科大学の先生方、中山国際医学医療交流センターの方々、ハワイ大学の先生、学生の方々、PA会の方々に心から感謝します。本当にありがとうございました。

ハワイ大学夏季ワークショップに参加させていただいて

上道恵（派遣時3年生）

私は8月の5日間、ハワイ大学のワークショップに参加させていただきました。海外研修という、旅行とは異なる経験をしたみたいと思ったのがきっかけでした。

ワークショップでは、他大学の学生やハワイの学生と交流する機会がたくさんあり、さまざまな価値観にふれることができました。日本の学生はみな留学経験が豊富で、それぞれ目的をもってワークショップに参加していました。できるだけ多くを吸収して日本に帰ろうという積極的な姿勢、また将来について真剣に考え行動してい

る姿をみることは、とてもよい刺激となりました。とくに印象深かったのは、ハワイ大学の学生の勤勉さです。どの学生も医学的知識が豊富で、高い意識をもって自主的に勉強に取り組んでいました。彼らと話をすることで私自身の怠惰さが身にしみて感じられ、勉強に対するモチベーションが高まりました。彼らは、とても親切に毎日観光や食事に連れて行ってくれ、ワークショップ以外の時間もとても充実していて楽しかったです。

ハリケーンのため残念ながら、ワークショップは1日早く終わってしまいましたが、内容は医療面接や注射実習など、実際に自分でやってみるというものが多く、とても興味深かったです。なかでも注射実習は日本でする機会がなかったため、緊張しましたが、よい経験となりました。

ワークショップで学んだこと、また人とのつながりや勉強に対するモチベーションを今後も維持して役立てていこうと思います。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった先生方、中山国際医学医療交流センターならびにPA会の方々、ハワイ大学の方々、そしてワークショップ参加者に感謝申し上げます。

ハワイ大学ワークショップに参加させて頂いて

長屋龍太郎（派遣時3年生）

まずはじめに、このような素晴らしいワークショップに参加する機会を下さった、花房俊昭教授、米田博教授、河田了教授、松本さんをはじめとする中山センターの方々、PA会の方々に心から感謝申し上げます。

今回のワークショップで得ることのできた最大の収穫は、同じようなマインドを持った積極的な多くの学生と繋がりを持てたことと、いって間違いありません。全国津々浦々あらゆる大学から参加者が集まっており、何よりそのモチベーションの高さ、能力の高さには驚嘆しました。もちろんこれは一緒に参加したOMCの方々にも当てはまります。

さらに大事なことは日本人だけでなくハワイ大学の学生たちとも友人関係になれたことです。交換留学生との交流は日本でもできますが、彼らとどのくらいの時間を共有するか、という点ではこのワークショップとは比較にならないと思います。言語の壁はやはり自分の勉強不足のせいで課題ではありましたが、それを上回るハワイ大学の学生たちのフレンドリーさのおかげで、最終日にはお互いに冗談を言いつつ別れを惜むような関係になれました。学生生活全体から考えれば、ほんの一つまみの時間ではありますが、この一週間は一生もの財産です。

勿論得られたことは、人とのつながりだけではありません。勉強面でも大変ためになりました。PBL、Injection Practice、禁煙外来、医療面接を行いました。どれも exciting な内容でした。

PBLについては、臨床を少しかじった程度での参加であり非常に不安だったのですが、結果的には積極的に発言できました。基

本的な流れは日本と同じであります。発言もプレゼンも英語。このハードな状況のなかでも満足のいく PBL にできたのは、一から十まで先輩方が日本で行ってくださった勉強会のおかげです。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

Injection Practice、禁煙外来、医療面接は全く新しい体験でした。初めて Self Injection をする時の恐怖、現地の方と1対1で行う医療面接前の緊張は忘れられません。このような実践を通して、かなりの度胸が養われたと思います。

全体を通してですが、このような海外でのワークショップへは早い段階から参加することが望ましいと感じました。多種多様な経験、勉学に対する海外の学生のスタンス、目標とできるような先輩方との出会い、これら全てが今後の学生生活のモチベーションに繋がったのは言うまでもありません。

最後になりますが、このワークショップで印象に残った Professor Junji Machi の言葉を紹介いたします。

“If you don't know where you're going, you are unlikely to get there”
このワークショップでの体験をもとに、自分なりの目標に向かって励んでいこうと思います。

(ハワイ大学春季ワークショップ派遣 学生6名)

毎年3月にハワイ大学医学部では学生向け PBL ワークショップが開催されています。平成26年度の春は3月8日から3月13日まで本学とハワイ大学医学部の国際交流協定に基づいて、5年生の井上汐里さん、永井駿君、渡辺早紀さん、4年生の宮元荘子君、幡輝世さん、平野恵理子さんの計6名がワークショップに参加しました。

ハワイ大学春季ワークショップ 感想文

(派遣時5年生) 井上汐里

今回、ハワイ大学のワークショップに参加してきました。非常に充実した毎日で本当に楽しかったです。まず、日本では準備として花房俊昭教授の抄読会に参加し医学英語の勉強を始めました。その他に、前回このワークショップに参加した学生がどのような勉強をしたら良いかを教えてくれる機会もあり、前もって準備することができました。そのおかげで医学英語はまずまず対応できました。研修内容は OSCE のようであり、5年生の春ということで内容にはついていくことができました。ただ、授業がすべて英語で行われるため、日常英会話くらいの英語ができないと理解が難しく感じました。私は OSCE をしていたため、大筋の内容は分かったのですが、雑談などの日常会話が分からずもどかしい思いもしました。研修以外でも非常にモチベーションの高い他大学の学生とたくさん話す機会があり、それが刺激的でした。印象的だったのが、海外在住経験や留学経験のない人がほとんどでしたが、それでもしっかりと会話を楽しめるほどに英語を話せていたことでした。同じ日

本にいても自分次第で英語力は伸ばせることを痛感しました。私は今まで英語にあまり関わってこなかったのですが、今回の経験を生かして日本に帰ってからも積極的に英語力を身につけようと思いました。

春のワークショップのプログラムは時間に余裕があるため、他大学の学生と遊びに行く機会も多くありました。サーフィンをしたり、カイルアビーチに行ったり、買い物をしたり、みんなでご飯を食べたりしました。食事のときには勉強以外の話を楽しんだり、お互いの学校の授業や今後の進路についてなどの真剣な話もできました。みんなが自分の進路について真剣に考えていて、私もしっかり考えなければと思いました。その中でどんどん輪を広げて広い視野をもって物事を考えられるようになりたいと感じました。

最後にこのような機会を与えてくださった中山国際医学医療交流センターの方々に感謝します。ありがとうございました。

ハワイ大学春季ワークショップ

(派遣時5年生) 永井駿

身体診察の仕方や基本的な医学の知識をレクチャーしてもらった JABSON への短期留学のワークショップに参加してきました。将来海外で働きたいという前々からの思いもあり、英語の勉強も兼ねて参加を決意しました。

〈向こうでの生活〉

基本は7時半に起きて支度をしてバスに乗り学校へ。9時から授業で、終わる時間は日によってバラバラ。終わったら復習したり、皆とどこかへ出かけるといった毎日です。

学校の授業の医学のレベル自体はCBTレベルですので5年生からしたら少し物足りないかもしれませんが、しかしそれが全て英語となると話は変わってきます。何の疾患のことを言っているのかわからないし、そもそも何を先生が説明したのか、聞き取るのに必死でした。

主要な疾患や主要な臓器などは英語で覚えていくことがマストだと思いました。

またコミュニケーションについては積極的になれましたが、授業中の発言や立候補など、もっと恥ずかしくがらずにやればよかったと少し後悔しています。

〈授業について〉

胸痛や息切れなどの基礎疾患についての概要や鑑別診断、診察方法について教えてもらった後、実際の患者さんの問診をとるといったのが主な内容です。それ以外にも、気管支鏡シミュレーターや救急の授業など様々なことを教えて頂きました。

個人的に一番楽しみにしていたのは英語でのオスキーでしたが、意外と緊張せずに話せたことは自信になりました。

一番印象に残ったのは、シミュレーション室に連れて行かれ、アナフィラキシー様の症状で運ばれてきた患者さんを目の前に(とい

う設定で)

「今から10分与えるので、治療方針を立てて最後まで自分たちで治療しなさい」と言われたことでした。

日本では先生がやっているのを見るだけ。たまに聞かれたことを答えるだけと言ったやや消極的な実習を送ってきた身にとって、衝撃的で焦ってしまいました。アドレナリン筋注というのがセオリーですが、そもそもアナフィラキシーであっているのか？この状況でアドレナリンを打って禁忌な可能性はないか？様々な思いが逡巡しましたし、実は打っても改善せずに次の処置を考えろということだったのです。何個か選択肢を思いつきましたが、これとこれの組み合わせは大丈夫だったか、時間を空けずに打って大丈夫なのか、そもそも最初の診断が間違っていたのかなどという様々な思いがめぐる中、自分の思いをうまく英語でも伝えられず、これが実臨床なんだと思知らされました。実際の患者さんを診るつもりで日頃から勉強していかななくてはならないのだと痛感させられました。

〈友人たちとの交流〉

ウェルカムパーティで自己紹介があった時、ここまで彼らと仲良くなれるとは想像もしていませんでした。毎日学校が終わった後、海に行ったり、サーフィンしたり、ショッピングをしたり、ご飯を食べたり。夜は勉強のこと将来のことから始まり、部活、恋愛の話を語り合っ、大学に入ったばかりの頃の初々しい気持ちを思い出しましたし、お互い刺激し合えたと思います。

個人的にハワイは7度目。慣れていていると思っていたこの土地で、日々新しいことの発見で毎日が本当に充実しており、帰りの空港がこんなに寂しいなんてよもや思わなかったです。

〈帰ってきた今思うこと〉

学校で勉強する時間は正味5日の短期のプログラムです。正直、英語力、医学の知識が爆発的に伸びたかと言われたらそんなことはありません。

しかし普段英語を使わない私からしたら英語を臆せず話すいい練習になったし、ある程度は通じるという自信もつきました。そして矛盾するようですが、自分の思うことを伝えられないという忸怩たる思いのおかげでもっと勉強したいと思えるようになりました。英語だけでなく医学の知識もある程度自信が持てたと同時に、前述したとおりに足りないことだらけでもっと勉強しなくてはいけないと本当に痛感しました。

この気持ちを忘れることなく更なる飛躍を目指してこれから益々研鑽に励みたいと思います。

このような機会を与えて頂き本当にありがとうございました。

2015年春期 Hawaii 大学ワークショップ感想文

(派遣時 5年生) 渡辺早紀

3月8日から1週間、大阪医科大学中山国際医学医療交流セン

ター支援のもと、Hawaii 大学のワークショップに参加してきました。入学以来、部活に没頭する日々を過ごしていましたが、夏の引退を機に何か学生のうちにしかできないことをしてみたいと考えていたところ、事務担当の松本さんからメールを頂き、飛びつくように応募させて頂きました。

この1週間は、大学生活の中でも本当にかげがえのない友人、そして海外経験が沢山できた1週間でした。

Hawaii 大学でのワークショップでは、主に英語で医療面接・身体診察・PBL・シミュレーションを行い、日本全国の大学から22人、韓国から2人の計24人で過ごしました。せっかくの機会だし、少し恥をかいてでも積極的に発言し、海外の学生とも話して行こうと心に決めて参加したので、自分の未熟な部分を身をもって感じる事ができて本当に良かったです。特に医療面接では、学生の面接シーンを録画し、それを見ながらフィードバックする機会があり、先生方のコメントを始め、他の学生の雰囲気や自分と比較することができ、非常に勉強になりました。

また、大学での病棟実習ではあまり経験できない、マネキンを用いてのBSLも印象的でした。ERに急変患者が運ばれてきたというシナリオのもと、チーム医療でどのように対応をし、いかに治療を行うか、学生同士で話し合いながら実践形式のBSLを行うことができたことも貴重な経験です。

私は英語が得意なほうではないのですが、現地の方は比較的ゆっくり話してくれますし、大学の先生方や学生も心優しく対応してくれて、まだまだ未熟ではありますがコミュニケーションが取れたのも Hawaii に来ての収穫だと思います。

他大学からは、個人で申し込んで参加していたり、厳しい選考を通過してきている学生も多く、一緒に行動していると日々刺激的で、英語力も医学知識も周りからモチベーションをもらうことができました。

授業後は、毎日みんなで遊びに出て、海にいったサーフィンをしたり、花火をみたり、ダイヤモンドヘッドに行って朝日をみたり、ランチ&ディナーに行ったり、飲み会をしたり、本当に毎日が楽しくて、日本に戻りたいとは思えないほどでした。

私は今回の Hawaii が初めてのワークショップでしたが、こんなにも沢山の経験ができるのなら去年から参加していれば良かったと後悔しています。5年生の春という最後の機会に恵まれたこと、そして連絡を頂いた時から絶えず支援して下さった松本さん始め中山国際医学医療交流センターの方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。今回貴重な海外経験させていただいたことを活かし、今後は初期研修で海外研修を選べる病院に進もうと考えています。大学でのワークショップより一層厳しい基準になるので、さらに勉学に励んでいく所存です。

準備期間も含め、本当に長い間ありがとうございました。

ハワイ大学春期ワークショップ 感想文

(派遣時4年生) 宮元 創士

今回の春期ワークショップでは、夏期とは異なり PBL チュートリアルは実施されず(似たようなプログラムはありましたが)、通常の講義と身体診察、医療面接が行われました。

全体を通して言えることは、医学英語が非常に重要だということです。大阪医大での授業で習った医学英語などは知っていたり前で、これがわからないと話に全くついていけません。そして通常の英会話力も同じく重要だと感じました。クリクラが始まり、実際の医療現場に出るようになりましたが、日本でもある程度の医学英語は使用されています。今後医療に携わっていく者として、英語の重要性を改めて感じました。

様々なことを経験させて頂きましたが、個人的に最も勉強になったのは、英語での医療面接でした。英会話力が皆無だった自分にとって、模擬患者さんと話すだけでも大きなプレッシャーを感じたのですが、そこからさらに病歴を聴取したり、診察を行うというのは、本当にその場から逃げ出したくなるようなものでした。その中で意外だったのが、あくまで「医療面接」の場においては、医学英語よりも通常の英会話力が圧倒的に重要だということでした。言われてみれば当たり前で、日本でも医療面接時には専門用語は使いませんが、「英語での医療面接」と恐怖を感じていた私にとっては意外なものでした。そしてそれを通して思ったのが、医療面接において、コミュニケーションがいかに重要かということでした。ハワイでの医療面接の始まりには、自己紹介に加えて握手があり、このことから、海外の医療現場で、医師と患者との間に信頼関係を築くことを重要視していることがわかります。日本と海外とでは人々の根本的な性格、性質は違いますし、そういう国柄だと言ってしまうまでもありますが、私は、日本で医師としてやっていく上で、このような姿勢は非常に重要だと感じました。患者の権利、人権を尊重する現代の医療では、医師と患者がしっかりと対話し、信頼関係を築いていくことが何よりも重要です。

今回の留学を通して、対話、コミュニケーションの重要性に改めて気づけたことは、私にとって非常に大きなことだったと思います。このワークショップを通して学んだことは他にもありますが、このように模擬患者さんと話したりするカリキュラムは医学生にとって非常に重要であり、本学でももっと実施して欲しいと感じました。

最後になりましたが、今回このような貴重な機会を与えて下さった大阪医科大学、ハワイ大学の先生方、スタッフの方々、一緒に参加した本学、他大学の学生たちに感謝いたします。ありがとうございました。

ハワイ大学春期ワークショップに参加して

(派遣時4年生) 幡輝世

・学習成果について

まず基本的なリスニング力が一週間で上がったことを大きく感じました。パツと言われたことに対する瞬発力もついたように感じました。また、他大学の学生も含め、自主性に富んだ生徒が多く、臆することなく私も発言することができました。医学的な学習成果は、オスキーを再び思い出すことができたこと・実際の患者さんに問診する機会があったこと・グループワークで刺激を受けたこと・シミュレーションで最先端の技術に触れられたことなどが挙げられます。今後勉強するにあたり、大きな刺激を受けることができました。ありがとうございました。

・ハワイで経験したことについて

ハワイ大学の学生が、自分の目標にゆるぎない自信があるように感じました。また将来像も明確に考えていて、すごいなあと思いました。学校の授業内容は実践形式が多く、座学であっても自主性を大切にしており、日本とは全く異なる授業形態に驚きました。学校が終われば他大学の友達と遊びに行き毎日充実して過ごすことができました。また、他大学の友人とは今でも連絡を取り合い機会があればご飯を食べたりする関係となっていて嬉しく思っています。私の中で一番良かったと思うことは、韓国のプサン大学から来ていた2人の学生と仲良くなれたことです。韓国の医学部となると、すごいエリートで(実際本当に優秀でした)でも気さくで、色々な話をしました。韓国の同年代の人と触れ合う機会が初めてだったので、新鮮でした。

・プログラムの内容について

非常に良かったです。先生方もとても優しくフレンドリーで、初日から緊張がほぐれ楽しく授業を受けることができました。ありがとうございました。

・今後の進路への影響について

シミュレーションで外科系の手技を体験させていただき、外科に興味をもつことができました。また、留学でできた友人たちが病院見学の話をしてくれたので、私も悠々としていられないと感じ、将来を意識して行動できるようになりました。ハワイ大学でのワークショップに参加できて本当に感謝しています。ありがとうございました。

ハワイ大学春期ワークショップに参加して

(派遣時4年生) 平野恵里子

今回のワークショップに参加させて頂き、ありがとうございました。春期ワークショップではアメリカの医学教育を体験しました。

内容は

胸部の診察手技、医療面接、人形を用いた救急現場でのチーム医療実習、告知の仕方、PBLなどです。

胸部の診察手技は日本の OSCE と似ていましたが、アメリカの医療保険制度では日本の様に CT や MRI を撮ることができないた

め、日本ではあまり行わないような検査も教えて頂きました。また、聴診や打診で疾患を見つけ出そうという気持ちを持つことの大切さも感じました。

医療面接では、まず医師が自己紹介をし、患者と握手して関係を築くところから始め、患者がリラックスできるように笑顔で会話したり、日常会話を挟んだりしました。OSCE では医師の基本的な態度として患者に敬意を払うことが求められましたが、ハワイで感じたことは、医師と患者が対等であり、円滑な問診と治療を行うために必要なことは友好的な関係だということです。

次に、人形を用いての救急現場のチーム医療実習について述べたいと思います。ここでは、5、6人でチームを組み、リーダーを決めて、人形に救急医療を施しました。このような症状の患者がERに搬送された、まず行うことは？→バイタル測定、心電図。酸素投与など。では次にすべきことは？投与する薬と投与方法、投与量は？患者のバイタルは良くないが症状はおさまってきたようだが、それはなぜか？など、リーダーを中心にチーム全体で考え、医療を行うというシミュレーションをしました。

今まで実際の現場を想定した実習を体験したことが無かったので、投与すべき薬は知っているが投与方法が分からない、何をすべきか言葉では知っているが具体的にどうすれば良いのか分からない、といったことばかりでしたがリーダーが適切な指示を出してくれ、動くことができました。今回の経験をもとに、第五学年の臨床実習での注意深く見学するポイントなどが少し分かった気がします。常に自分が医療行為を行っているつもりで見学すると深く学ぶことができるのではないかと、思いました。また、担当教官が「バイタルではなく患者を見なさい、患者の症状が良くなればバイタルはついてくるのだから」とおっしゃっていたことが印象に残っています。

次に、告知の仕方について。

告知について今まであまり学んだことがありませんでしたが、今回のワークショップでは、患者にどこまで知らせるべきか、どのように伝えるべきか、について考えました。

また実際、教官に患者役をして頂き、告知のシミュレーションをさせて頂きました。教官に、告知が上手にできたよ、と言って頂けて嬉しかったです。患者の希望に即した、誠実な告知について、これからも考えたいと思います。

最後にPBLについてです。

今回のワークショップでは5、6人のグループに分かれてPBLを行う機会は少なかったですが、限られた時間の中で候補となる疾患を次々と挙げていきました。これからは疾患名を英語で覚えようと思いました。

今回のワークショップはとても貴重な経験になりました。今までは講義で教えて頂くことを知識として蓄えるという勉強法でしたが、これからの課題はそれを実際の医療現場で使える知識にすること

だと感じました。また、勉強会に参加するなどの自主学習や、英語力を鍛えるために普段から英語学習に取り組もうと思います。今回のワークショップで優秀だった方たちは皆5年生でしたが、目標に向かって行動している人ばかりでした。私も来年、彼らの様になりたいと思いました。

今回のワークショップを経て、将来の展望が定まったわけではありませんが、もっと海外の医療に触れたいと強く思いました。様々な国や地域の医療に触れることで医療に対する様々な価値観に触れたり、また、長所を取り込み、スキルアップできるはずだと思います。

今回のワークショップに参加させて頂けて、本当に嬉しく思います。ありがとうございました。

②. マヒドン大学

(タイ・マヒドン大学附属シリラート病院臨床実習派遣 学生4名)

国際交流推進の一環のタイ・マヒドン大学附属シリラート病院との交流協定に基づいて行われる臨床実習に平成26年3月31日から4月25日まで、新6年生の尾関奈津子さん、岩井俊介君、上



田恭彦君、西原悠君の4名が参加しました。国の抱えている社会問題を医学医療を通じて感じた実習でした、との感想も述べられています。

マヒドン大学 Siriraj hospital での病院実習を終えて

尾関奈津子 (派遣時6年生)

私は3月31日～4月26日までの4週間、タイのマヒドン大学シリラート病院にて臨床研修をさせて頂きました。実習期間中、色々なことを感じ、タイの文化に触れ、本当に多くの事を学ぶことができました。今回の実習では、前半2週間は一般小児科を、後半2週間では小児循環器にて研修させて頂きました。

前半の一般小児科では、本校での実習では診ることのできないような、珍しい疾患にも出会うことができました。そういった時、驚

いたのは、先生方、レジデントの先生方もが様々な専門に分かれていながらも、とても広い範囲の様々な疾患を診察できることです。シリラート病院は大きな病院であるので、医師の数も大変多いです。しかし少しバンコクから離れるとすぐに、医師不足に陥っていると聞きました。そのため、タイでは卒業後、日本のように自分たちで研修病院を選択することが出来ません。政府によって二年間は決められた病院で働かなければならないそうです。そのような医師の不足している状況では、患者が来て、診察、治療するのが自分だけといった状況にもなるそうです。そういった厳しい状況で、広い範囲の診察を必然的にできるようになるとおっしゃっていました。

また、一般小児科の外来、治療室だけではなく、developmental clinic と呼ばれる外来も見学することが出来ました。言語の発達遅れ、主に自閉症の子供たちとその親御さんが訪れる外来です。ここでは、もちろん発達遅滞の評価なども行いますが、医師を含めた病院スタッフが子供たちと向き合っていました。先生方は自閉症の子供たちにこちらの気持ちを伝えるためには時間をかけてコミュニケーションをとることが一番重要だとおっしゃっていました。その外来は私のイメージしていたものとはかなり異なり、とても明るく、先生も親御さんも常に笑顔で子供たちと遊んでいました。また、社会福祉士の方と一緒に患者さんの家を訪問するという体験もさせて頂きました。ちゃんと両親が子供たちの世話をしているかということや、子供たちにとって適した生活環境であるかを確認していききました。実際のタイの方達の生活を知ることの出来る貴重な体験でもありました。

後半の二週間では、小児循環器にて、多くの複雑な症例を知りました。入院、外来ともにほとんどすべての患者さんに対して積極的に聴診、診察をさせて頂くことができました。シリラート病院の小児の心臓疾患はかなり複雑なものも多く、理解するのに苦しみましたが、先生方は心臓の絵を書きながらとても丁寧に教えてくださりました。

今回の計4週間、ずっと小児科で実習させて頂きましたが、小児科の先生方、レジデントの先生方、看護師の方々、その他病院スタッフの方々には本当に優しく、毎日笑顔で私に話しかけてくださいました。私がタイに実習に来てとても不安だった時、学生たち、先生方に本当に助けられました。本当に本当に感謝しています。私も、海外の方が日本に来て、不安や困ったことがあったら、絶対に話しかけたり、力になりたい！と強く思いました。

実習以外では、タイの学生たちが、毎日のように色々な場所に連れて行ってくれました。近く海に小旅行にいったり、タイの美味しいレストランもたくさん教えてもらいました！最初は本校に来ていた学生しか知らなかったはずなのに、友達が友達を連れて、と行った具合に、本当にたくさんの友達が出来ました。日本からだけでなく、アメリカ、台湾などからも学生が来ていたので、毎日色々な学

生と出かけにいきました。5連休では友達とカンボジアにも行きました！こんなにも充実した一ヶ月は初めてなくらい、予定がぎっしりでした！

最後に、今回このような機会をくださった花房先生、米田先生をはじめとする中山センターの皆様、そして実習中お世話になった、小児科の先生方に深くお礼申し上げます。今回私が、実習中、温かく迎えてもらうことができたのも、留学生が本校に来た際に、快く受け入れてくださっている診療科の先生方のおかげです。本当にありがとうございました。

マヒドン大学シリラート病院での臨床実習を終えて

岩井俊介 派遣時 6年生

まず初めに、3月31日から4月25日までの4週間、タイのシリラート病院での臨床実習をさせて頂きました。この4週間は全てが自分にとって初めての経験でしたが、自信を持って参加して良かったと思える4週間でした。

実習の方は呼吸器内科を1ヶ月見学しました。毎朝8時からRCU(respiratory cure unit)での実習から始まります。呼吸器の患者で特に重篤な人が入院しています。ここでは1日2症例ずつ紹介してもらいました。特に複数の疾患を合併していることが多く、治療も複雑でしたが、とてもわかりやすく解説していただきました。

それが終わると次は9時から bronchoscopy や pleural biopsy、asthma clinic、COPD clinic などの見学です。曜日によって何を見学するか変わります。

Bronchoscopy では主にX線で見つかった異常陰影の生検が行われていました。やはり熱帯地方特有の病気である結核疑いの患者さんが多かったです。また、多くの先生方は、日本で気管支鏡の技術を学びに行くそうです。日本の気管支鏡の教育レベルの高さをとても褒めて下さいました。

Pleural biopsy ではエコーで胸水の位置を確認し、マーキングしてから胸水を排出します。悪性疾患や結核疑いの患者さんが多かったです。また、一部で縦隔腫瘍の症例、特に悪性リンパ腫やセミノーマといった症例もありました。悪性リンパ腫の方はかなり進行しており、上大静脈症候群も合併していました。教科書でしか見たことがなかった症例も、実際に見ることできとても印象的でした。

Asthma clinic、COPD clinic では主に患者さんのフォローアップの方法を学びました。実際に身体所見をとり、呼吸機能検査の値に基づき、投薬内容も変更します。実際に患者さんの身体診察をとらせて頂き、特徴的な所見を実際に感じ取ることができました。これらの外来は日本のものと近かった気がします。

午後は ward round という回診がメインでした。患者さんの数が多くほぼ毎日2時間から3時間かけて病棟を巡ります。ほぼ毎日目にした疾患は結核、気胸、無気肺、肺炎です。そしてあまり頻度は

多くなかったですが、MAC 症や気管支拡張症、原発性肺高血圧症など、日本ではなかなか経験できないような症例も経験しました。ありがたいことに、たくさんの先生方がわざわざ英語でプレゼンをして下さり、また教授までもがたくさん英語で質問したりして下さりました。

また外の病院で conference があり特別に参加させて頂くことができました。診断をつけるのに一苦労した症例の疾患名は伏せ、現病歴、身体所見、画像所見などから診断は何かをみんなで討論するといったものです。ここで経験した2例もとても興味深いものでした。

以上のように1ヶ月間呼吸器内科を見学させて頂いたのですが、とても多くの症例を経験しました。教授を含めどの先生方もとても熱心に話しかけて下さり、とても感謝しています。

次に世界各国から留学生が集まってきており、国際交流もさかんです。アメリカやハワイ、台湾や日本からは神戸大学と岐阜大学と様々な大学から学生が来ています。今回の留学の目的の1つとして、他国の学生と交流することを掲げていましたので、とても満足できました。積極的に他国の学生と交流することで、英語力を身につけられるだけでなく、新たな発見もあつたり、視野が広がったりもしました。

この1ヶ月の間には、大阪医科大学にきたタイの学生4人だけではなく、その他大勢のタイの学生にお世話になりました。彼らがいなければここまでタイの生活は充実しなかったと思います。最後に、留学という貴重な機会を与えて下さった花房教授、米田教授、ご支援くださった中山交流センターの方々、PA会の方々、どうもありがとうございました。この留学で得たものはこれから医療者として必ず役に立つと信じています。これからもこの留学プログラムが続くように、何かできることがあれば積極的にしていこうと思います。

タイ・マヒドン大学 Siriraj 病院での海外実習を終えて

上田恭彦(派遣時 6年生)

私は、3月31日から4月26日にかけての4週間、タイのマヒドン大学付属シリラート病院で実習させていただきました。初めの1週間は予防医学、次の2週間は消化器内科、最後の1週間は神経内科を見学させていただきました。

予防医学は主にエイズ患者さんに焦点を当てた分野で、日本での病院実習ではあまり経験することができないような内容をたくさん経験させていただきました。具体的には、HAART 療法を行っている患者さんを外来でフォローしたり、免疫の低下により発症してしまった様々な合併症に対して入院治療を行ったりしました。入院患者さんの多くは結核、クリプトコッカス脳髄膜炎、脳膿瘍、ニューモシスチス肺炎などの、教科書でよく目にするような合併症を起こしている方が多く、回診のときには多くの先生方が、それらの疾患

の画像所見、治療法などを中心に丁寧に説明してくださいました。また、エイズに対する薬物療法の講義では、薬の種類、組み合わせ方、薬を中断する際の注意、副作用などを教えてくださり、その講義のすぐ後に外来を見学させていただいたので、非常にためになるものでした。

消化器内科では、主に内視鏡を見学させていただきました。私は上部消化管に興味があつたのでそちらを中心に見ていたのですが、日本でも実習で一度はみたことがある胃潰瘍、GERD、食道静脈瘤等の疾患が多く、自分の印象としては、消化器系の疾患については日本とタイではあまり違いは感じませんでした。その他にも、一般の外来に加えて食道アカラシア外来という珍しい外来を見学させてもらったり、肝生検の見学、肝炎の講義だったり、非常にバラエティーに富んだ内容を経験させていただくことができ、とても楽しく2週間を過ごすことができました。

神経内科では、脳卒中チームに入れていただき、とても教育熱心な先生のもとで1週間を過ごしました。講義の中で先生は、基礎的な考え方をしっかり身につければどんな症状に対しても順序立てて病変部位を推測することができるということを強調しておっしゃっており、その基本となる解剖学的知識や効果的な質問の仕方などを教えていただきました。中には日本で学んだ内容と少し異なるものもありましたが、勉強になることが多かったです。また、外来では、薬でコントロールできていないパーキンソン病の患者さんなども接することができ、教科書的な知識を、実際に見たり触れたりさせていただくことで改めて自分なりに理解することができたと思います。

ためになることが多い一方で、日本とは異なりとまどってしまった点もいくつかありました。たとえば、外来や検査室に平気で食べ物や飲み物を持ち込む先生が多いですし、患者さんの前で携帯電話を触ったり、学生も患者さんの身体の一部を勉強の資料として無断で写真を撮ったりしていました。それがタイでは普通のことなのだと思うのですが、患者さんのプライバシーや医療従事者のマナーについて厳しく見られている日本で実習している私からすると、改善の余地のある点であると感じました。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった米田先生、花房先生をはじめとする先生方、自信を持って海外留学できるだけの英語能力があつたとはとても言えない自分を笑顔で送り出してください、人間的に成長させてくださった中山センターの皆様、シリラート病院で、最後の最後まで優しく熱心にご指導くださった先生の方々、そして、楽しい時間を共に過ごしてくれた医学生の間人たち、本当にありがとうございました。

マヒドン大学 Siriraj hospital での病院実習を終えて

西原悠 派遣時 6年生

この度、タイのマヒドン大学シリラート病院にて2014年3月31日

から4月25日まで実習させて頂きました。

シリラート病院はタイ国内で最も大きく、かつ最も歴史の長い病院で景観豊かなチャオプラヤ川の西岸に位置しています。病床数は2000を超え、一年に100万人以上の外来患者が訪れ、東南アジアでは最大規模の病院です。マヒドン大学の附属病院であり、学生は1学年に300人弱います。

私は日本であまり見学したことのない外傷について学びたいと考え、Trauma科を前半に選択しました。タイでのTraumaケアは日本との衛生環境の差を強く感じさせるものでした。外来患者さんでは犬猫咬傷の方が多く、狂犬病のワクチンを接種しているのか、現時点で接種すべきなのかをプロトコールに照らし合わせて症例ごとに検討していました。また、交通事故などによる裂創や挫創の患者には破傷風を念頭に置いたケアを行っていました。もちろん日本でも同じようにケアするのですが、タイは日本に比べて明らかに破傷風のリスクを懸念していました。同時期に共に日本から留学した友人の爪が剥がれた際、現地の学生に本気で救急外来に連れて行かれそうになっていました。

さらに自らが望めば、日本ではなかなかさせてもらえないような経験、たとえば患者さんの皮膚縫合や心肺蘇生、などをさせてもらえる環境でした。僕自身、人生で初めて患者さんに対してそれらのことを行い、非常に有意義な時間を過ごさせて頂いたと感じております。

後半はCVT(Cardio Vascular Thoracic surgery)科をローテーションさせて頂きました。スタッフは9名おり、その日のオペの件数はICUの空き状況に左右されます。大阪医科大学と比べオペ室の数が非常に多く、そのおかげで毎日オペが行われていました。日によりますが留学生は一日に1~2件のオペに清潔で入ることができます。沢山のオペに入らせて頂きより深く心臓の解剖および術式について理解することができました。扱っている疾患は日本とさほど変わりませんでした。件数が多いものは冠動脈疾患や大動脈弁狭窄症などで、それらの疾患が多い背景には、タイでは生活習慣病の市民教育が十分に行き届いていないことがあると現地の先生がおっしゃっていました。

実習はもちろん、現地の学生との交流を通じて様々な文化の違いを目の当たりにしました。医学教育について特に驚いたことに、彼らは多くのメディカルタームを英語で学んでいます。そのおかげで日常英会話に関してはさほど差を感じなくとも医学英単語に関しては明らかに英語で知っている数が違うと感じました。これだけ聞くと、日本の医学部もそうすればより世界に目が向き良いのではないかと考えも出てくるかもしれませんが、必ずしもいいことだけではないと僕は思います。なぜなら彼らが英語で学んでいる背景には、まだまだ多くの専門用語がタイ語に訳されていないという事実があります。そして現在マヒドン大学を中心にどンドンタイ語への翻訳が進んでいるとのことでした。僕らが日本で医学教育を受

ける際にはほぼすべてのメディカルタームが日本語です。これは内容を直観して理解しやすくすることに大きく貢献していると思います。おかげで国家試験に合格するだけであれば医学英語を全く知らなくとも問題ないという状況になっています。僕はタイやその他の国のようにすべてを医学英語で学ぶ必要はないと思います。しかし、先人たちが訳を作ってくれたことに感謝しながら医学の基礎を学び、その上でより最先端の情報にアクセスするため能動的に医学英語を学ばねばならないと、この留学を通じて痛感しました。

最後に、今回このような貴重な留学の機会をくださった花房教授、米田教授をはじめとする中山センターの皆様、そして実習中お世話になったシリラート病院のTrauma department、CVT departmentのスタッフ・レジデントの先生方そしてinternational departmentの方々に感謝します。また僕らに対して現地の先生方、学生達が非常に良くしてくれるのは、大阪医科大学の各科の先生方がマヒドン大学からの留学生を快くもてなしてくださったおかげであると思います。先生方にお力添えいただいたことに、心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

(タイ・マヒドン大学 シラート病院にて行われた国際微生物学・免疫学・寄生虫学 国際コンペティション(SIMPIC)に学生4名を派遣)

平成27年1月30日から2月2日までタイ・マヒドン大学で行われた国際微生物学・免疫学・寄生虫学コンペティション(SIMPIC)に、川崎春奈さん、岸本紘樹君、南川侑介君、荘子万能君の4名(いずれも派遣時2年生)が参加しました。以下に各参加者の感想文を掲載しています。

SIMPICに参加して

川崎春奈さん(派遣時2年生)

この度、タイのマヒドン大学にて開催された SIMPIC に参加させて頂きました。参加させて頂いた理由は、アジアの医学生との交流をさせて頂いただけに魅力を感じたことが大きいです。また昨年に、大阪医科大学に留学で来ていたマヒドン大学の学生さんとの交流がきっかけで、この大学に興味を持っていたというも理由の一つです。

全日程は4日間ありましたが、日本での試験や授業の関係により2日目、3日目のみの参加でした。

参加させて頂いた中で印象に残っていることは、どの大学の学生も英語に堪能だったということです。プログラムの中に大阪医科大学で言うPBLのようなディスカッションがありましたが、他の参加者はもちろんのこと、各グループの引率を受け持ってくれた私と同じ2回生のマヒドン大学の学生さんも積極的に議論に参加していて、会話を聞いているだけで精一杯だった私はとても打ちのめ

されました。聞けば彼らは、授業の半分が英語、台湾の学生に至っては全てが英語の授業だそうで、全授業を日本語で受けている私たちは恵まれているようにも見えますが、実際には殻にこもっているだけで出遅れているということをひしひしと感じさせられました。

また驚いたことに、ほとんどの学生が日本のことを詳しく知っていたことです。日本について楽しそうに話している彼らを見て嬉しく感じました。よく日本の文化が世界で注目されていることが話題にあがっていますが、それを間近に感じることができました。同時に、日本のことを知ってくれているのに、相手の国について知らないことを恥ずかしく思いました。

今回 SIMPIC に参加させていただいて、たくさんの経験をさせていただきました。一番大きな財産は、多くのアジアの医学生と知り合うことができたことです。少しの期間でしたが、国際交流が自分にとってとても刺激的であることを改めて感じることができました。次に彼らに会うときは、英語で医学について少しでも話せるように、これから努力していきたいと思えます。

最後に、SIMPIC で関わったすべての皆様にお礼を申し上げたいと思います。素敵な経験をさせていただきありがとうございました。



SIMPIC 感想文

岸本紘樹(派遣時2年生)

真冬の日本を立ち、常夏のタイ、バンコクに降り立ったのは2015年1月30日のことである。マヒドン大学で開催される SIMPIC(免疫微生物学国際コンペティション)に三人の仲間たちと出場するためであった。

空港からタクシーに乗って約 40 分、ホテルに到着したのは夜中の 10 時ごろであった。ホテルのロビーに入ると二人のマヒドン大学の学生が私たちを出迎えてくれた。本来ならこの日午後2時までには受付をすませなければならなかったのだが、日本での試験のために遅れてきた私たちをずっと待っていてくれたのである。ホテル

のチェックインや翌日のスケジュールなどに不安をもっていた私たちはその学生たちに助けられた。

翌日、モーニングコールとともに目覚めた私たちは朝食会場に向かった。そこにはすでに何十人もの SIMPIC に参加している学生と思われる人たちが朝食をとっていたが、そこで、たまたま隣になったマレーシアの引率の先生から SIMPIC に参加するのは何回目かと尋ねられ、SIMPIC に何度も挑戦して優勝を狙いこくる強者たちがいることをそのとき初めて知った。そして朝食後、大学に向かうバスに乗った私は更なる衝撃的な光景を目の当たりにした。どの学生もみな微生物学の教科書を座席で開いて勉強していたのである。もちろん私たち日本人は誰も持っていない英語の教科書だ。軽い気持ちで午前のプログラムである筆記試験に臨もうとしていた私はその場で何もせずただ座っている自分が恥ずかしくなった。

筆記試験は択一式の試験と本学の解剖学教室が行っている一分間試験と同じ形式の試験であった。私が解けた問題はほんのわずか。英語での出題のため、問題の意味すら分からないものも数多くあった。微生物学を日本語ですらほとんど勉強していかなかった私は、まわりの学生たちがすらすらと解いているのを横目に、何とも言えない劣等感に襲われた。

劣等感に苦しんだ午前の部が終わると、午後にはバンコク観光が待っていた。いくつかのグループに分かれてそれぞれ観光に連れて行ってもらったのだが、私たちが行ったのはタイ王国博物館。そこには数々のなんとみくらびやかな王様の宝物が並んでおり、展示物からタイ国民の方々の王様への敬愛が伝わって来た。その後、レストランで食事をすませ、ホテルに戻ってその日のプログラムは終了となった。

翌日、大学に行くと 6 人ずつの班に振り分けられた。この班のメンバーとその日一日を過ごすことになる。まずはじめのプログラムは病原菌特定ゲームである。SIMPIC City に突如流行し始めた病の病原菌を突き止めるという仮想ゲームだ。マヒドン大学の学生が精肉店、珈琲屋、警察署、病院などを段ボールなどで設置していて、そこで店員などの演技をしているマヒドンの学生に質問するなどの調査を行って病原菌を推定するというものだ。発熱や咳などが主な症状で、私たちの班は精肉店に肉の新鮮度を尋ねたり、病気が流行りだしたのはいつごろかなどの調査をした結果、見事その病原菌が *Burkholderia pseudomallei* であることを突き止めた。正解に行き着いたのは私たちの班だけであったが、この答えにさっさとたどり着いたメンバーの一人、インドネシアからの学生は他の学生の答えを聞いても微動だにせず絶対的な自信があるようだった。私はそもそも彼がどうやってその答えにいきついたかのすら分らなかったのだが、。

午後は病院見学ツアーである。病院内にいくつも博物館があり、それをメンバーとともに見学していった。展示されているものは教科書でしかみたことのないような貴重なものばかりで本当に驚い

た。丸一日見ていると飽きることがないような気持ちで見学していた。

病院内見学が終わるとスポーツアクティビティーである。これもマヒドンの学生が用意してくれたいくつかのゲームを班ごとに回っていくと言うもので、午前のプログラムですっかり怖じ気づいていた私もメンバーたちと打ち解けることができた。

まだまだ SIMPIC のプログラムは続くのだが私たち大阪医科大学チームはこれにて帰国しなければならなかった。これほど多くの医大生がアジア中から集まっているのも驚きであったが、その学生たちは皆母国語ではなく英語で医学を学んでおり、その知識量も私には到底及ばないものだった。帰国したら必死で微生物学を勉強して、また来年リベンジをしに戻ってくることを誓って、私はバンコクを後にした。

SIMPIC に参加して

南川侑介(派遣時 2 年生)

私はもともと ESS や国際交流部にもはいていなかったが友人の岸本君の誘いがある今回 SIMPIC に参加した。最初は無料で留学ができるということで軽い気持ちで参加した。高校時代にカナダへヶ月間留学、大学一年の時イギリスへの一人旅の経験もあって海外の英語に困まれた生活には抵抗はなかった。

金曜日の夜に着いて実質 SIMPIC に参加したのは土曜日の朝からだ。まずチームで登録をすませ、コンペティションの 1st ROUND である筆記試験を受験した。テストはマーク式のマルチプルチョイスと記述のブービー試験にわかれていた。免疫に関しては少しは勉強したが微生物の知識はまだまだ定着していない身だったのでテストはすごく難しく苦痛であった。

テストが終わると昼食をすませ観光にでかけた。観光は三つのコースにわかれていて私たち大医のチームは王宮美術館見学のコースだった。歴史的なものというよりも王宮でつかわれているものを並べているといった感じでとりわけおもしろかったものはあまりなかった。

観光もおわり夕食をすませるとホテルに戻り自由時間となった。まだ時間もはやかだったのでタクシーをひろい繁華街に向かった。タイのタクシーはとてもカラフルでピンクや黄色など様々であり単色のものは会社を介したタクシー、ツートーンのは個人タクシーと聞いたので単色のタクシーに乗るようした。タクシーの内装も日本車ということもありなかなかきれいであるし、渋滞はあるが割とどの車も法定速度を守り安全運転をしているので安心できた。繁華街の歩道にはずらっと露店が並んでおり、食べ物を売っているところもあれば、偽物のブランド品を売っていたりする。何より安いし値切りもきくので長い時間ショッピングを楽しみホテルに戻り次の日に備え就寝した。

日曜日はワークショップから始まった。同じチームのメンバーは

バラバラになり新たなチームが作られた。内容としては SIMPIC というコミュニティの中で感染症のアウトブレイクが起き、様々な手がかりにより病原性微生物を特定するというものだ。大学内の部屋を使って病院、薬屋、工事現場、喫茶店などを設定し、マヒドン大学の生徒が患者や医者役などを演じる。例えば病院では患者の症状、喫茶店では噂話といったように少しずつ情報を集めていく。これらの情報をまとめ、ディスカッションするうちにどんどん原因がぼられていく。微生物の知識もあまりないしなかなか積極的に参加することはできなかったがこのワークショップの仕組みをすごくおもしろいと思ったので、せめて彼らの言っていることを理解しようと努力した。私のチームは惜しくも当てることはできなかったが、このワークショップを通じて微生物学を学ぶということへのモチベーションもあがったし、臨床への興味も湧いた。

ワークショップが終わると昼食をすまし、病院内の博物館を見学し、その後スポーツ大会が行われた。この二つでは同じチームの他国の医学生との交流ができた。スポーツ大会が終わると飛行機の時間もあったので名残惜しくも彼らと別れの挨拶をし大学を去った。

帰り道来年も参加したいねとみんなで話した。今回は四日間のうち二日しか参加することができなかったが、来年は万全の体制でみっちり四日間参加しリベンジしたいと思った。

本当に東南アジアの学生はすごいなと思った。まず英語能力に関して私は完全に劣っていて、勉強に関しても相当努力していることが感じられ同じ二年生であることがすこし恥ずかしくなった。これから同じアジアの医学生として精進していこうと心に誓える海外研修であった。

SIMPIC に参加して

荘子万能(派遣当時 3 年生)

この度、マヒドン大学で行われた SIMPIC2015 に参加させていただきましたので、ご報告させていただきます。

以下では、① SIMPIC の概要について ② SIMPIC2015 の実際について ③ SIMPIC2015 に参加しての感想、に分けて述べたいと思います。

①: SIMPIC とは、正式名称が Siriraj International Medical Microbiology, Parasitology and Immunology で、マヒドン大学シリラート病院とマヒドン大学の医学部生によって運営されている、微生物学・寄生虫学などをはじめとする感染症に関わる知識を競い合うコンペティションです。タイ、マレーシアなどの東南アジア諸国をはじめ、モンゴル、オーストラリアなど多種多様な大学から参加があり、微生物学の知識を競い合うだけではなく、グローバルな意味で交流することができます。実際、SIMPIC の開催概要の中にも、海外の医学生たちが交流するプラットフォームを創るためとあります。

②: SIMPIC2015は、第4回目の開催で、4日間のプログラムでした。コンペは、そのうちの2日間で、2日目と4日目にありました。私たち大阪医大チームは、カリキュラム等の都合により、2日目、3日目のみの参加となりました。コンペは、CBT形式とラボラトリー試験とがあり、択一式だけではなく、写真や画像を見た上での筆記試験もありました。配点は択一式70%、ラボテスト30%でした。

③: 私たちは、残念ながら今回のコンペで良い成績を残すことができませんでした。考えられる理由としては3点挙げられます。まずは、当たり前ですが、英語による試験というのが一つの難しさでした。普段英語で勉強することは少なく、かつ英語で回答することも少ないので、ここに関してはあらかじめ準備が必要と感じました。また、画像による試験の難易度が非常に高かったように思います。本学では、感染症の勉強を、画像ベースあるいは、染色されたスライドを使って診断ベースで行うことが少ないので、こういった試験への対応が難しくありました。最後に、そもそも疾病構造が大きく異なるということです。聞いたことのない感染症、あるいは聞いたことがあっても馴染みのない感染症が問われると非常に難しさを覚えました。また、今回プログラムの一部しか参加できなかったため、他の医学生たちとあまり交流できなかったことが心残りです。来年以降参加される方がいれば、全日参加できるよう、調整していただければと思うばかりです。

最後に、今回も素晴らしい機会を花房先生をはじめとして、中山国際交流センターの各関係者の皆様に与えていただきました。心から感謝申し上げます。今回の経験を今後の糧にしていきたいと思っております。ありがとうございました。

(タイ・マヒドン大学選抜臨床研修受入 学生 4名)

タイ・マヒドン大学より平成 27 年 2 月 23 日から 3 月 20 日まで Jiratchaya Boondeekul (Praye/Pie) さん、Kochaporn Ruamrudeemass (Cheese) さん、Sirikul Tanpon (Proud) さん、Kawita Atipas (Ant) さんの 4 名が交流協定に基づき海外選抜臨床実習の一環として本学を初め三島救命救急センター、国立循環器病センター、大阪大学附属病院及び京都大学附属病院にて研修を行いました。以下に 4 人の研修感想文を掲載しています。

REFLECTION ESSAY

Jiratchaya Boondeekul (Praye/Pie)
4th grade medical student

Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University

This is my first opportunity to go abroad as an exchange student. And I have never regretted for a second that I chose Osaka Medical College for my choice. I learned many things during these four weeks in Japan. All I received from this elective course are not only the new academic experiences, but

also many other aspects in life that widened my attitude and improved my living skill. I gained enormous amount of unforgettable memories there, the invaluable memories that would last for my whole life.

I was very impressed from the first day I reached OMC. Ms. Matsumoto, Nakayama center contact person, was very kind. She picked us up from the bus station and took us to lunch before taking a tour around the college. Our first meal in Japan was 'Kushikatsu', one of local food. This was my first time trying this dish and I really liked it, it was very delicious. About the academic rotation, at OMC the rotation programs were quite different from other elective hospitals. Most elective hospitals let the exchange students chose 1 or 2 departments which they wanted to rotate in. But in OMC, they arranged us to visit almost all of the departments. This kind of rotation program allowed me to see new things in various departments that I could realize overall difference between Japan's and Thailand's health care system.

I like to visit outpatient clinic at OMC so much because I could meet many patients in various kind of health problems. I also had a chance to think about their medical condition sometimes. Moreover, I could observe how the doctors communicated with their patients and kept all good characters I have seen to be my model. I had an opportunity to take part in Urology, Dermatology and Orthopedic surgery outpatient clinic. Doctors, who were assigned to take care of me, were all very kind. They tried to translate and explain as much as they could.

At Urology I closely observed the clinical processes with Dr.Kiyama. He explained me almost all patients' problems and let me see the imaging such as x-ray and CT scan.

At Dermatology department, I saw many cases of skin biopsy. I also joined in the skin pathological conference in the afternoon which the doctors tried to make me understand via opening the English textbook. The most unforgettable situation for me in this department was that sensei gave me plenty of Japanese skincare! I almost couldn't pack it into my luggage. Now I am using it in Thailand and it doesn't seem to use up recently.

At Orthopedic clinic, I was very impressed with the way Dr.Fujiwara communicated with young patients. He was very gentle and the patients seemed to love him so much. He asked them about what was going on in their life and he also drew the children's favorite cartoon characters for them in the drug prescriptions. His drawings were very cute.

Another great point in OMC rotation was that besides rotating in OMC hospital, they also arranged us to observe other specialized medical centers. I got an opportunity to visit Mishima Emergency Critical Care Center and Takatsuki Fire-Defense Headquarters where we learned more about the emergency health care system in Japan. I was so surprised about how fast they reached the patients and how they managed to treat them.

Furthermore, we visited Trauma and Acute Critical Care Center of Osaka University where we learned about Doctor-Helicopter system. I have watched the “Code Blue”-Japanese TV drama before and this is my first time to closely see the real helicopter. I was very excited because the Helicopter and the Doctor-Helicopter system are quite the same as in the drama. OMC also arranged us to visit the special hospital for elderly, the National Center for Geriatrics and Gerontology, even though it was located in another city, Nagoya. Apart from learning about Alzheimer’s disease – the prevention, the supportive system and the management in hospital, I also gained plenty of experience on that day. I was very excited due to my first time taking ‘Shinkansen’. I also had a chance to visit sightseeing places in Nagoya. The scenery when the sunset was so fascinating there.

Other than the academic rotation, OMC also arranged us to participate in many interesting extra-curriculum activities that showed us how gorgeous Japanese culture was. I took part in the Cultural Club in Ibaraki-shi that I had a special opportunity to wear ‘Kimono’! I was very excited and looking forward to that day since I have known about the program. The Kimono was very beautiful and difficult to wear. It was my first time to make Sushi and Onigiri by myself, too. Other special events such as tea ceremony, Kendo club and Karate club were all enjoyable and interesting. I was also very impressed by the Graduation Ceremony that every girl dressed in splendid Kimono, and I was very thankful that OMC invited us to join in such an important and elegant ceremony like this. I really like that there were extra-activities in the elective program because it was a great opportunity for me to learn about Japanese culture in many aspects including sports, food and traditions. It was a special experience that I would never obtained if I came here on my own. That is why there was the difference between joining in the elective course and traveling by myself. Finally, the most impressive thing for me was the warm welcome from all of OMC staffs, students

and doctors. All of them took care of us very well from the first day we arrived until the day we left. OMC provided us everyday lunch which was very delicious. The apartment was very comfortable and convenient. The Nakayama center staffs were very kind and helpful. We could ask them everything, even about the weekend traveling plan. They also provided us many party such as welcome party, pizza party, farewell party, and handed us a lot of meals after the evening activities. The Professors and doctors were very kind and looked after us very well. They all tried to explain the clinical lesson to us in English even sometimes it was very difficult for them. They took care of us not only in classes, but they also handed us special meals sometimes.

The OMC students were so nice, too. They spent their times with us quite often. They joined in almost all activities and made it much more fun and memorable. They sometimes took us to dinners that we always had a good time chatting together. We made a special trip to ‘Koyasan’ together, too. It was very fascinating - not only about the place, but also about the happy time we spent together. There were many other trips such as Kyoto and Osaka which were all unforgettable.

My visit to Japan this time was very impressive and worth remembering. The elective program was completely excellent. I loved almost all aspects of Japan – food, cultures, sightseeing places, weather, transport system and people. Japanese food and desserts are so tasty that I ate too much and gained my weight when I finished the course. Japanese cultures all seemed noble and impressive. The sightseeing places were very beautiful both the manmade – such as temples, shrines, parks – and the natural places one. The weather was very refreshing, even it was a little bit too cold for Thai people sometimes. Japanese people were very nice and helpful. I could ask them every time I got loss and they were always willing to help. And about the transport system, it was much more convenient compared to Thailand’s. I could go everywhere buy trains and buses without any traffic jammed. All these things made Japan a spectacular country, and if I have a chance, I would go to visit Japan again for sure.

<抄訳>

Pie

他の大学の研修プログラムでは1つか2つの診療科を研修中に回るのですが、大阪医科大学ではとにかくなるべくたくさんの診療

科、教室を回ります。そのおかげでタイと日本のヘルスケアの違いについて、より大きな視点で総合的に理解をすることができたと思います。

そして先生方の患者さんへの接し方などを見ていて、お手本にしたいと思いました。

皮膚科ではたくさんの生検を見て、午後には皮膚病理のカンファレンスに参加しました。先生方が英語の本を使ってとにかく出来る限り説明をしてくださりました。整形外科では藤原先生が小児患者に優しく接する姿に感動しました。先生はその子と話しながら処方箋にその子の好きな漫画キャラクターを可愛く描いてあげるのです。子供は先生が大好きな様子でした。

OMCでの研修の素晴らしい点は、附属大学以外の特別医療施設が見れることです。三島救急医療センターと高槻消防署に行った時は、患者さんに到達する速さと、治療の効率のよさに驚きました。

大阪大学附属病院の救急医療センターに行った時はドクターヘリのシステムについて教わりました。「コード・ブルー」という日本のテレビドラマを見ていた私でしたがそもそも本物のヘリをこんなに近くで見たのはこれが初めてで、わくわくしました。ヘリのシステムがドラマと同じところが多かったので話を聞いていてとても面白かったです。

国立長寿医療研究センターは名古屋にあったのですが、一日かけていきました。アルツハイマー病に対する予防やサポート、病院でのマネジメントについてセンターで学習しましたが、初めての新幹線体験や名古屋観光もできて、新体験密度の高い一日でした。研修初日から最終日まであたたかく私達を迎えてくれた OMC の皆さんにとっても感謝しています。たくさんの忘れられない思い出ができました。茶道や武道など日本の文化、食べ物、公園、神社、自然、タイと違ってスムーズに動いている交通機関、私たちには少し冷たく感じるけれど天気、道に迷ったらいつも優しく教えてくれる親切な日本人たち、全部好きになってしまいました。ありがとうございました。

My Elective study in OMC

Kochaporn Ruamrudeemass (Cheese)

4th year student

Faculty of Medicine, Siriraj Hospital

Mahidol University, Thailand

Where will you spend your spring vacation? Some people may take a rest at their home. Some people may go travel. For me, I chose to attend in the abroad elective study and Japan was my destination.

I chose Japan because I was interested in Japan since I was young. At first, I read Manga (Japanese cartoon) like the other kids. However, as much as I read, I realized that I was in love with not only Manga but also "Japan". I started learning about Japan language and tradition that is when I realized how interesting country Japan is. I am also admired Japanese unique tradition and "society". I like how Japanese people focus on their works and improve their abilities for better result. According to my interest in Japan, this elective

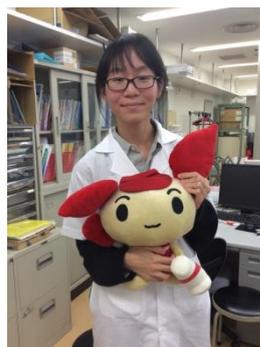
study is my third time in Japan but it is my first time at OMC.

I knew OMC 2 years ago, when my elder sister had a great opportunity to study here in the same program as me for a month. She came back to Thailand with a lot of wonderful stories of OMC. She told me about how interesting and various departments she had been and how warm welcome she got from all medical students, staffs and doctors. Since that day I wished I had such an opportunity like her. I have worked very hard so that 2 years later I am here at OMC, ready for amazing experience that I can't find anywhere else. My first day in OMC started with the hospital and campus tour. OMC is a very famous hospital with a lot of experienced medical staffs and modern technology. In this elective program, we were arranged to different departments in everyday so that we can visit all of the departments in OMC. The first department was Psychology which was very interesting. I had an opportunity to try a new useful



intervention for helping diagnose psychological disease. In the afternoon we are brought to the psychiatric ward that I have never been before, even in Thailand. I was very impressed with the ward because the medical staffs look after the patients very carefully. In the end of the day, I learned so many things not only knowledge but also heart of the psychology. I learned that one of the most important things to become a psychiatrist is to "understand the patient" and to reassure the patients that they are not alone, Thank you all of the staffs for such an inspiring day.

My next day at Pathology was also interesting. I had a chance to observe the pathologist while they were working in the laboratory. At first I do not know how important the pathology is; however, at the laboratory I realized that pathology is a key of medical diagnosis. I saw a lot of interesting procedure like Frozen section, Core needle biopsy, intraoperative specimen etc. My two days at internal medicine department, Gastroenterology and Endocrinology were grateful. I have been to OPD, ward and examination room with modern technology of medical tools. The most exciting thing was at Thyroid clinic, where I had my thyroid ultrasound (by my friend). Lucky! It is normal.



In Cardiovascular surgery department, I had an unforgettable opportunity to observe the cardiac surgery in a young via a monitor while my friend was scrubbing in the operation field. It was amazing to see such a complicated case since size of the heart was very small. After the surgery the patients were moved to the ICU and we went to observe their condition in the next day.

At ICU we learned about the medicines that were important in emergency condition. While we were studying, there was a cardiac arrest case at OPD, so we went to observe the ACLS (Advance Cardiovascular Life Support) It was very impressive to see all of the doctors working together to save the patient's life.

At OMC sometimes, I had an opportunities to visit the departments that I have never been before in Thailand, such as Dentistry, Rehabilitation, Orthopedic surgery etc. I thought these opportunities are valuable and I hope that I could use the knowledge that I got from these departments to apply with my medical study in Thailand.

While rotating to the different department in everyday, I like talking to the doctors at each department about the difference between Japan and Thailand in example, Prevalence of the disease, Management of the disease, Medication, and health



system. The conversation at the blood transfusion department was very inspiring. Even though this is a small department, the blood transfusion department plays an important role to save patient life. I was impressed by an well-organized system, the hard-working staffs and how the doctor improve the hospital's blood transfusion system. I hoped that someday I can use this information to improve the health system in Thailand too.

I also had a chance to go to other medical places to see their system.

At Takatsuki Fire-Defense Headquarters and Mishima Emergency Critical Care Center, I saw how fast the paramedics or doctors can reach the patients who called for help because a well-organized system and 24-hours stand by experienced staffs.



At Trauma & Acute Critical Care Center, Osaka University, I was excited to visit "Doctor-Heli" system. This was an amazing experience I can't find anywhere. Doctor-Heli was an advanced system for saving patient's lives. This system made the doctor reach the patient faster. I thought it's very interesting and I would like to see this system in Thailand someday.

I have been to two National Centers, National Center for Geriatrics and Gerontology and National Cerebral and Cardiovascular Center.

At National Center for Geriatrics and Gerontology, I learned how does Japan deal with an increasing number of elder. There were a lot of well-designed devices for elder and many geriatric researches. The doctors worked so hard not only to treat the disease, but also to improve quality of life of the elder.

At National Cerebral and Cardiovascular Center, which was a special hospital for the patients who have cardiovascular disease, there are many specialists from different departments working together to treat the patient.

In the end of the rotation, I found that I have learned so many things, both knowledge and clinical skills. I was inspired by the doctors and staffs who work so hard as a team. They were enjoyed their work and never stop improving their ability in order to give the patient the best treatment.



In free time, I got a wonderful chance to attend some club activities such as, Kendo, Karate, and Tea ceremony club and the other events such as Graduation Ceremony of the sixth year medical student of OMC and culture day at Ibaraki city. It was my pleasure to

experience Japanese tradition that is very unique and charming. It is my dream to have a chance to participate these activities.

In the weekend, OMC students brought me and my friends to the world heritage, Koyasan. It was an ancient place with peaceful atmosphere. The OMC students were wonderful guides. They taught me some Japanese tradition I have never known before.

After a month, I have to come back to Thailand but I can't forget a wonderful time I had in Japan. I'm back to Thailand with knowledge, incomparable experience, tons of amazing stories and



invaluable friendship. Thank you everyone at OMC for a warm welcome that made a month in Japan being one of the best time I ever had in my life. I enjoyed every second in Japan and I hope we can meet each other again someday.



<抄訳>

日本についてはマンガやアニメを通じて以前から親しみがありました。そのうちに日本語や文化を学ぶうちに、日本は面白い国だと思ふようになりました。日本の人は常に「今より良くなる」事を目指して仕事や勉強に集中するところがいいと思います。

私の姉が2年前に同じ交換留学プログラムで大阪医科大学に行きました。回った診療科で見聞きしたことやどんなに皆さんの歓迎を受けたかという話を聞いた時、私も絶対に行きたいと思いました。その日からずっと元氣張って、こうしてとうとう願いがかないました。

OMCでの初日は学内と病院のツアーから始まりました。先進医療と経験豊富なスタッフで有名なこの病院で、私たちはこれから毎日違う診療科に行くのです。

まず精神科に行きました。診断についての新しい「介入」の方法を試してみる機会がありました。午後からは病室を回りました。タイでも精神科の病室は回ったことがなかったのですが、スタッフの人達がとても丁寧に患者さんの面倒を見ておられるのを見てとても感心しました。その日が終わる頃には知識もさることながら「精神科における精神」を学びました。精神科医にとって一番大事なことは患者さんの気持ちを理解し、孤独ではないと励まし続けること。そんな大切なことを教えて頂きました。

次の日の病理学も面白かったです。先生がラボでしている研究を見学しました。初めは病理の何がそんなに大切なのかわかりませんでした。ふとこれは診断の鍵じゃないか、と思ひ至りました。迅速病理診断やコア生検 術中迅速標本などいろんな作業工程を見ることができました。

内科を回った2日間、消化器内科と内分泌内科がとても良かったです。外来、病室、新しい検査機器がある検査室などを見学しましたが、甲状腺外来では実際に超音波検査を留学生同士でお互いにやらせてもらえて、わくわくしました。幸いなことに私の甲状腺は正常でした！

胸部外科ではモニターで小児心臓手術を見学することができました。心臓がとても小さいのに複雑な手術で驚きました。術後、患者さんはICUに移されたので翌日私たちは様子を見に寄らせてもらったのですが、この経験は忘れられません。

ICU では緊急事態でいかに医療が大事か実感しました。研修

中に外来で心臓発作を起こした患者さんがいて、その二次救命処置の様子を見学しに行きました。患者さんの命を救うために先生方が丸となって動いているところがとても印象に残りました。

自分の学校ではまだ行ったことのない口腔外科、リハビリ、整形などの診療科を研修中に回ることもあり、タイに戻ってからこちらで得た知識を勉強で生かせると思ひました。先生方とタイと日本の違いについてお話するのは楽しかったです。例えば病気の流行について、病気への対処の仕方、どんな薬を処方するか？医療システムの違いは？など。

輸血センターでの河野先生のお話はとても楽しく、センターは小さい部所ではありますが、患者さんの命を救うためにとても重要な役割を果たしていました。よく考えられたシステムと、勤勉なスタッフ、そして先生がどうやったらもっとこのしほみを良くすることが出来るのか常に考えている。全てに感動しました。

外部施設にも行きました。高槻消防署と三島救急医療センターはよく組織された運営システムで経験豊富なスタッフによって24時間体制で回っていました。緊急の連絡があつてからいかに迅速に患者さんのところまで到達できるのか、その早さを目の当たりに見ました。

大阪大学病院の救急センターではドクターヘリを見せてもらうという貴重な経験をしました。患者さんに早く到達できる高度なシステムです。いつかタイにもこういうシステムがあればいいなと思ひました。

国立循環器病研究センターと国立長寿医療研究センター(名古屋にありまふ)という2つの国立の機関にはそれぞれ1日かけて行きました。国立循環器病センターでは違う専門の診療科の先生方が心臓を患う患者さんの治療のために一緒に働いていました。国立長寿医療研究センターでは、どうやって増えつつある老人層の健康を支えるかについてどう取り組んでいるのか知ることができました。よく考えられたデザインの機器や、研究もたくさん行われているそうです。疾病を治療するだけではなく、クオリティ・オブ・ライフをどうやって改善するかについて先生方はご尽力されていました。

研修も終わりに近づくと、臨床の知識だけでなく技術についても多くの事を学習した実感がありました。チームとして働く先生方、スタッフの皆さんは一生懸命働きながらも常にベストの医療を患者さんに提供できるように目指していました。

自由時間には今まで知らなかつた日本の文化について知ることができました。剣道、空手、茶道などのクラブに参加したり、着物を着せてもらつて参加した日本の文化体験デーもありました。週末には世界遺産の高野山にOMCの学生さんが連れて行つてくれました。こういったことは全て夢のようでした。

私はかけがえのない経験と知識、そして大切な友情を持ってタイに帰りました。温かく私を迎えてくださった大阪医科大学の皆様、ほんとうにありがとうございました。

Things end but memories last forever

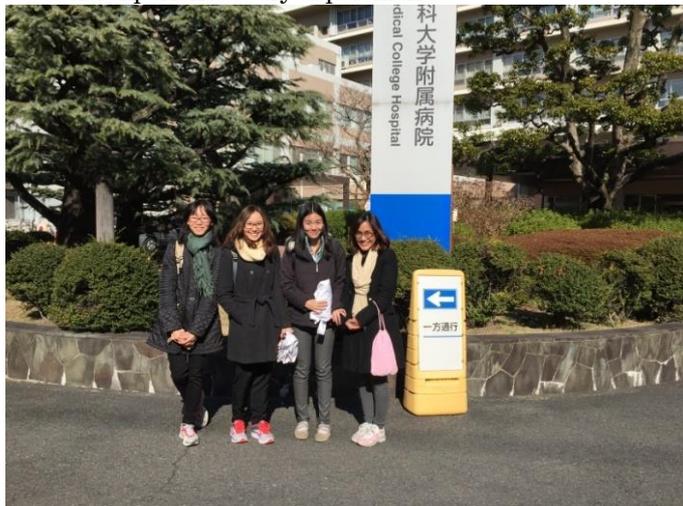
By Sirikul Tanpong (Proud)

4th year medical student,

Faculty of medicine Siriraj Hospital, Mahidol University

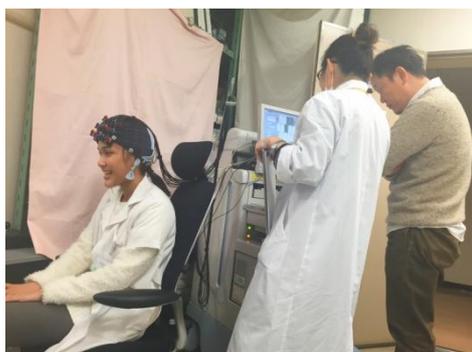
By the time anyone reads this story, I would have already been back to Thailand. One month in Japan passed very fast like a blink. Things end but memories last forever.

I have never thought that I would have a chance to be an exchange student in Osaka Medical College. When I first knew the result of examination, I thought that I was very lucky. But I realized by the time I got to OMC that I was more than lucky, I was blessed! Before we got to Japan, we have already been giving a lot of advices for preparation from Miss Kimiko Matsumoto, our best contact person ever. She devoted a lot of her time arranging very interesting schedule for us. We were arranged to go to new department everyday so that we could experience every departments.



1st week in OMC

We arrived in Osaka on 21st February, 2015. Miss Matsumoto was waiting for us at the train station to take us to our apartment near the college. It was very convenient. The apartment was just 10-minute walk from the college and it had everything there- refrigerator, washing machine, microwave, TV, air-conditioner and so on. I was very impressed by the welcome card that Miss Matsumoto kindly wrote for us and put it on our reading desks. Not only that, she also took us to lunch, our first meal in Japan. It was very

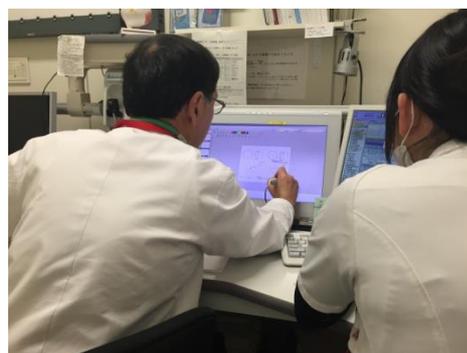


delicious. Then she took us for a little tour around the college and I found that OMC is a very lovely place to study. Before we started first class on Monday, we had a chance to go sightseeing in Osaka on Sunday. We went

to Osaka castle, had lunch at Shinsekai, prayed at Tennoji temple and ended a long day at Dotombori. I love the crab!!

First day at OMC, we got a very warm welcome from Dr.Kuroiwa, director of OMC hospital and a lovely tour around the college by Prof.Hanafusa. He was very kind and friendly. In the evening we had a pizza party with the OMC students and the Korean students from catholic university. It was very fun. I made a lot of new friends. They were all very nice. And on that day, I learned how to make bubbles on Japanese green tea (matcha). It was very difficult but challenging. Our first class in Japan was neuropsychiatry. First thing I noticed was that every psychiatrist in the world is very kind. Dr.Kanazawa took us to the neuropsychiatry department, let us talked to the patient, gave us a lot of knowledge. And we got the chance to take to NIRS test to see if we are bipolar or not. Luckily, I was normal. We went to the dinner hosted by Nakayama center. That was the first time I have ever eaten Fugu's testis! Every dish was very delicious. And Prof.Hanafusa cooked very well.

I got a chance to go to ophthalmology department where I met Prof.Ikeda who was very kind and gentle. He



taught me a lot. I observed the outpatient clinic and was very impressed by how gentle the doctor talked to the patients and also the technology being used in Japan.



Then on Thursday, we went to

gastroenterology department where we observed the endoscope procedures. And on Friday, I went to endocrinology and diabetology department. Prof.Hanafusa let me measured the blood pressure in his outpatient clinic. I was very nervous that time but it went well. The clearest difference I could noticed was that here, in OMC, doctor had more time to talk to patients than in my college resulting in better glucose control in the patients at OMC.

Weekend eventually came. We spend our first Saturday in Japan sightseeing in Kyoto. We went to Kinkakuji temple, Ryoanji temple where we tried to concentrate by looking at the stones, Ninnaji temple and Nishiki market where I ate a lot. The weather was very cold

but I like it. And we accidentally met a lot of Thai people in Kyoto, so much like walking in Thailand. On Monday, since it was raining, we went to Kaiyukan aquarium with our friends that went to Kobe University. All the animals there were adorable. I took hundreds videos of them.



2nd Week in OMC

This second week schedule was very interesting. All departments that we were rotating this week were all new to me. On Monday, we attended the pediatric heart surgery. We observed two cases of operation. I was much honored to have a chance to participate in the second operation- Pulmonary artery band ligation. It could be only one time in my life. It was such a great experience. Funny moment was that I had to wear three layers of operation clothes and I soaked a lot. It was first time I sweated since I came to Japan.

On Tuesday, we went to ICU where we gained so much of knowledge about the drug used in emergency. And while we were studying, a patient got a cardiac arrest. At first we thought professor was telling a joke when he told us to run after him because he looked very calm. But it was real. So, we had good chance to see how they help a cardiac arrest patient. In the afternoon, we went to dentistry and oral surgery department. I was quite surprised to learn that oral candidiasis has not only white lesion but also red lesion. We went to dental round around the hospital. And we went to see kendo in the evening. I had to thank you to Miss Matsumoto so much that arranged this for us. So impressive

On Wednesday, I went to anatomy and cell biology department with one of my friends. We had a very interesting lecture from Prof.Nabil about autophagy. It was very useful



for future. I thought if we could promote mitophagy and lipophagy, we could prevent our livers from becoming alcoholic cirrhosis. After class ended, we had karate lesson. It was my first time doing karate. It was difficult but fun. The OMC students in karate club made a beautiful show also. And we had a wonderful dinner together eating shabu-shabu.

We went to see Takatsuki fire-defense headquarter on Thursday. It was very fun. We realized that Japan has very good preparation for everything. Everything was well organized. It was surprising that the fire engine and ambulance can arrive at the scene within seven minutes. That would not be possible in Thailand. Moreover, we went to Osaka University to see the doctor helicopter system which we had saw in the code blue series. It was amazing. They were just like hero. And we ended our second week by going to graduation ceremony on Friday. I was very impressed by the beautiful kimonos wore by newly grad. I love how Japanese still honor their traditional costumes. I hope in my country, someday, we would wear Thai traditional costume to our graduation ceremony. It would be very beautiful.

On Saturday, I went to Nara with my friends and got bitten by the deer! However, I love Nara. It was small but lovely city. OMC students took us to Koyasan on Sunday. If it not for the OMC students, we wouldn't have so much fun. They were very good guides. They took very good care of us. Koyasan was such a peaceful and beautiful place. We had a chance to eat vegetarian food there. Surprisingly, I found it was very delicious, not plain at all.



3rd week in OMC

Time flew so fast. It was only two weeks left. In this week, we had a very great opportunity to observe



gastroenterology surgery. Prof. Hayashi was very kind and intelligent. He later treated us delicious dinner in Kyoto. We were very thankful of him. On Tuesday, we learned about the murmur. There was a lot of new knowledge being taught to us. Prof. Ito was very kind and patient. In the evening, OMC students hosted Tagoyaki party. Honestly, it might be first time I can cook. We had a great time together. We cooked, sang and danced. It was unforgettable night.

On Wednesday, we went to microbiology and infection control department. In the afternoon, we had a lectured by Dr. Takehiro Kono. We learned so much about blood transfusion system. He was very friendly and devoting himself to the job. I went to neurosurgery on Thursday where I saw many high technology equipments. We also went to tea ceremony in the evening. It was a beautiful tradition. If I didn't come to OMC, I think I wouldn't have chance to attend this memorable ceremony. And finally I could make fine bubbles! Last day of the week, I went to radiology department. I met many kind professors. They were very kind, gentle and smart. They taught me a lot of things. I was very lucky to study here even only for a short time.

What I impressed most on this 3rd week was Saturday. Miss Matsumoto took us to Japanese culture day at Ibaraki. We met a lot of Japanese who speak English very well and also foreigners that came to stay in Japan. We exchanged a lot of ideas and cultures. I had a chance to make nigiri and wear kimono for the first time in my life. I didn't want to take it off. It was very beautiful and complicated. You need expert to help you wear kimono correctly!



4th week in OMC

I was very sad that it came to the last week. I had a very good time in OMC. I enjoyed every second that I was there. On our last Monday, we went to National center for geriatrics and gerontology in Nagoya by shinkansen. We saw a very good managing system for Alzheimer patients. We accidentally met our professor from Thailand who went there to do a research. I went to obstetrics and gynecology department on Tuesday. Cases in Japan and Thailand were quite similar. On Wednesday, we had a great opportunity to go to Mishima Emergency critical care center. We didn't have this kind of center in Thailand, which I thought it was very useful. All the doctors working in the center were very active, intelligent and specialized in emergency medicine. We

realized that they had a very good preparation for disaster and all unexpected events. Visiting the center was very useful.

On Thursday, we went to orthopedic department. We had never passed this department in our college yet, so we were barely able to answer to professor's questions but he was very kind and taught us a lot of things. I was very impressed



how professor talked to the patients. They had a very good relationship. He became my idol. I would try to be as gentle as he is.

On my last day in OMC, we went to national cerebral and cardiovascular center. And again, I was very impressed by how effective the health care system in Japan is. I went to see pediatric ward and learned about cardiology in



pediatrics which was very useful.

And finally, it came to my last dinner in OMC. The Nakayama center held a farewell party for us and Korean students. Everything was very delicious. The video presentation about our four weeks in Japan by the OMC students was very touching. I almost cried. I was so lucky to meet these wonderful people. I had such a great time here. I was thankful for everything everyone had done for me through all this four weeks. Sometimes we didn't realize we were making memories, we just knew we were having fun. My four weeks in OMC didn't give me only medical knowledge but also unforgettable memories and friendship. If I could go back and do it all over again, I would.

At last, I have to thank you to Siriraj hospital and Osaka medical college to give me this great opportunity to be in OMC for a month. I have learned so many things including

medical knowledge and Japanese cultures that can be apply to my career and my life in the future. I appreciated every moment I had spent in OMC. I made a lot of friends from Japan and Korea. And I hope our friendship will last forever. As well as the memories I had made during my stay in OMC, they will stay in my heart forever too.

<抄訳>

OMCでの初日、病院長の黒岩先生に温かい歓迎の言葉を頂いた後、国際センター長の花房教授に学内案内をしていただきました。そのあと OMC の学生の皆さんと同時期に留学に来ていた韓国カソリック大学の留学生とちょっとした交流パーティーがありました。初日にしてたくさん友達ができました。お茶の道具で抹茶を初めて泡たてるという体験をしました。なかなか難しかったです。

さて、私達の最初の研修は精神科から始まりました。私は世界中の精神科医というものは皆優しいのではないかと思います。金沢先生は患者さんと話をさせてくれて、たくさん知識を伝授してくださいました。NIRS テストを自分たちで受けてみました。双極性かどうかをチェックするテストです。幸いなことに私は正常と判断されました。

眼科の池田教授にもたくさん事を教わりました。使われている日本の技術も素晴らしかったですが、外来では先生がとても優しく患者さんに接しているのを見て驚きました。その週は消化器内科や内分泌内科などにもお邪魔しましたが、OMC では患者さんと話す時間が明らかに長いと思いました。

二週目に回った診療科は今までに回ったところのないところばかりでした。月曜日の胸部外科では2つの手術が行われ、私はふたつ目の肺動脈バンド結紮をする手術に参加させていただきました。一生で一回きりのチャンスであったかと思いますがとても貴重な経験でした。3層の手術着を着たせいで汗をたくさんかいてしまい、肌寒い日本に来て初めて汗をかきました。



翌日、ICUを訪れて、救急医療に使用される薬についてたくさん事を学びました。その最中に心臓発作を起こした患者さんが出てたまたまその処置も見学することになったのですが、初め教授があまりにも落ち着いているので「後について走ってきて」と言われた時には何の冗談だろう・・・と思うほどでした。午後には口腔外

科に行きました。そこでカンジダ症には白い所だけでなく赤いところもあると初めて知りました。それから回診を体験しました。

解剖学では、ナビル先生に自食作用についてとても面白い講義を聞きました。これは将来マイトファジーとリポファジーを使えばアルコール摂取による脂肪肝を防げるようになるのではないかと思います。

日本では全てにおいて準備万端なんだなあと高槻消防署に行った時には思いました。全部がとても効率よく考えられているのです。7分以内に救急車と消防車が現場に到着するなどタイでは不可能です。その後大阪大学の救急医療センターにドクターヘリコプターを見学しに行きました。テレビシリーズの「コード・ブルー」で見ましたがまさに救急チームは「ヒーロー」。驚きました。

整形外科におじゃました時は、まだこの科をシリラートで回っていないこともあり、藤原先生に質問されてもほとんど何も答えられませんでした。そんな私達でしたが、先生は優しくたくさん事を教えて下さいました。先生が患者さんに話しかける様子は感動的で、先生はわたしのアイドルになりました。私も先生のような優しい態度で患者さんに接して行こうと思います。

授業外にも空手クラブに行ったりお茶を立てたり、たこ焼きパーティーをしたり、たくさん文化体験をしました。週末は遠出をして、奈良では鹿に噛まれたりしました。卒業式に出席した時は着物が美しく、タイでも伝統衣装で卒業式に出られたら綺麗でいいのと思いました。日本文化体験デーでは着物を着せてもらって握り寿司をつくらしたりとても楽しく、着物をずっと脱ぎたくなかったです。

シリラート病院と大阪医科大学の皆様、私にこんな素敵な留学の機会を与えて頂いてありがとうございました。医学の知識と日本の文化について多くを学ぶ事ができたことは私の将来のキャリアと人生においてきっと役立つと思います。日本にも韓国にも友人ができました。OMCでの一瞬一瞬を私はずっと忘れません。

Clinical Exchange Program at Osaka Medical College

Kawita Atipas (Ant)

4th year medical student

Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University
Time flies so fast. To be honest, I couldn't recall well what I had expected before coming to join this exchange program at OMC. But, certainly, everything I gained here exceeds beyond all my possible expectations.

The first day we arrived at Osaka, we met Miss Matsumoto at the train station. We have been contacting her via emails for months in preparation for the coming rotations but this is the first time we eventually met. She guided us to Takatsuki, showed us our apartment and around the city and treated us to our first Japanese meal at a restaurant. It was an absolutely good start in Japan. Our apartment is also very comfortable. It is close to OMC- just about ten minute walk, clean and has everything we need.

1st week rotations

We started our first day with hospital tour. Professor Hanafusa, the director of Nakayama International Center for Medical Cooperation (NICMC), kindly showed us around the college and hospital and later we also had a wonderful welcome dinner with him. In that evening we had a welcome party where we first met OMC students.

The next day was when our rotation actually started. We began our first department with psychiatry. Our professor was very kind to us. He showed us NIRS, which is a machine that helps diagnose psychiatric diseases and we talked with a schizophrenic patient at the ward.

On the following day, we visited department of pathology. It was my first time to see how pathological procedures are done. So, I was really excited. We observed many frozen sections and pathological samples in that day.

I spent the next two days with internal medicine-gastroenterology and neurology. We had a great opportunity to see patients in the ward. Many of them had diseases that are rare in Thailand. We also observed endoscopic and ultrasound clinics.

2nd week rotations



The first day of this week began with thoracic and cardiovascular surgery. I got a chance to scrub in a VSD repair case. It was my first time to see a cardiac surgery, so it was a new experience for me. I could see inside the heart and observe the operation from a short distance. Moreover, our professor also allowed me to feel the thrill and touch inside the heart. And on the next day, we followed postoperative patients to ICU where the professor taught us about ICU monitoring and medicine. Coincidentally there was a cardiac arrest case during our visit, so we also observed CPR procedure in that day. In that afternoon, we visited dentistry and oral surgery ward where we had a lecture about oral candidiasis and observed patients with oral problems.

Next I went to rehabilitation department. We have never

studied about rehabilitation before, but professors kindly taught us and showed us equipment and tests used in rehabilitation. We also tried orthosis and nerve conduction study.

On the following day, we visited Takatsuki fire defense headquarter and visited Osaka University to learn about doctor helicopter. We learnt a lot about emergency system in Japan which is quite different from the system in Thailand. The system here is very effective. I was amazed that the paramedics can reach patients within 6 minutes and I think doctor helicopters are very useful.

3rd week rotations



In this week I observed many interesting gastroenterological and ENT operations. We also have another internal medicine lesson. This time we studied heart murmur with a simulation and observed cardiac angiography in the afternoon. We also had ward round with infection control team who give advices to complicated infectious cases and studied about blood transfusion at blood transfusion center. On Friday, we visited radiology department to see CT, MRI, and PET scan and observed in radiotherapy OPD.

4th week rotations



This was the last week of our rotations. In this week we had an opportunity to visit many interesting centers which are National center for geriatric and gerontology in Nagoya, Mishima emergency critical care center and National cerebral and cardiovascular center. The first one, National center for

geriatric and gerontology showed me how Japan deals with aging society which is a big problem in Japan nowadays and may become a problem in Thailand too in the future. This center is well equipped to treat geriatric patients and diseases that are commonly found in elderly such as dementia and also conducts researches about geriatric diseases. The second center, Mishima emergency critical care center, gave us a glimpse into emergency care system in Japan. This center deals effectively with critically ill patients. Visiting this center is very interesting for me since we don't have this kind of specific emergency critical care center in Thailand and the one we visited on our last day here is National cerebral and cardiovascular center. At this center, pregnant patients with serious cardiac diseases are taken care of.

In this week I also visited department of physiology to learn about researches and visited department of orthopedic surgery where we saw many interesting pediatric orthopedic cases.



Apart from the lessons, I also had great time with Japanese friends who are medical students at OMC and Korean students who joined an exchange program in the same period as ours. OMC students teach us a lot about Japanese culture and held many activities for us to participate. For example, in the first week we went to Osaka together to have sushi, which was my first time to eat sushi in Japan and my first time for rotating sushi. They tried to explain me about fish in the sushi since we don't have these kinds of fish in Thailand. We also visited a shrine in that day and they taught me how to properly pray. Apart from this trip, we had two more trips together- one day trip at Koyasan, a very beautiful Buddhist place and a half day trip in Kyoto where we went to Gion and Kodaiji temple together. We also had nice parties and dinners together. Besides, we also joined Kendo, Karate and tea ceremony club. The clubs' members helped us a lot in understanding these Japanese sports and ceremony and

there was a day that Ibaraki intercultural club invited us to join a Japanese culture day. There, we learnt to cook simple Japanese dishes and wear Japanese traditional clothes- the kimono. Last but not least, we had a chance to see the graduation ceremony and participated in the graduation party that was held afterward.

A month I spent at OMC is one of the most precious months in my life. I learnt so many things- both medical and cultural, met many good people and made a lot of friends whom I shared wonderful conversations with. No matter how long time will pass, I will always remember the time at OMC. Thank you to OMC and Nakayama center for providing such a great program for us. Thank you very much!

<抄訳>

今となつては留学前に私が何を期待し、考えていたか思い出せません。OMCで体験したことは全て私の予測を越えていました。初日は花房教授(中山国際センター長)の病院案内から始まりました。そして翌日精神科から研修が始まりました。翌日は病理学教室に行きました。初めて病理で行っている検査手順を見ました。たくさん標本も見れてとても面白かったです。その他回診の時に感じたことはタイでは滅多にない病気の患者さんが多いなということでした。

心臓外科ではわたしはスクラブに入らせて貰い、間近で心臓手術を見ることができました。翌日 ICU に患者さんを訪ねてモニタリングについて教えてもらっていると、たまたま心臓発作を起こした患者さんがいて、偶然ですが CPR についても見学することになりました。

リハビリはやったことのない分野でしたが教授がリハビリ器具やリハビリで行う検査の仕方などを丁寧に教えて下さいました。器具も実際に装着体験して、神経伝達について学びました。

最後の週には外部施設をいろいろと見学させてもらいました。自由時間に OMC の学生の皆さんと遊びに行った時、タイでは見ない魚について説明してもらいながら初めて回転寿司を食べたり、神社に行った時はきちんとしたお祈りの仕方を教えてもらったり、とても楽しかったです。その他にも祇園や高野山、京都や大阪行きなど、クラブ活動参加に加えてたくさん日本文化を体験する機会がありました。

この 1 ヶ月は一生の記憶に残るでしょう。このような素敵な研修を組んで頂いて皆様どうもありがとうございました。

③. 台北医学大学

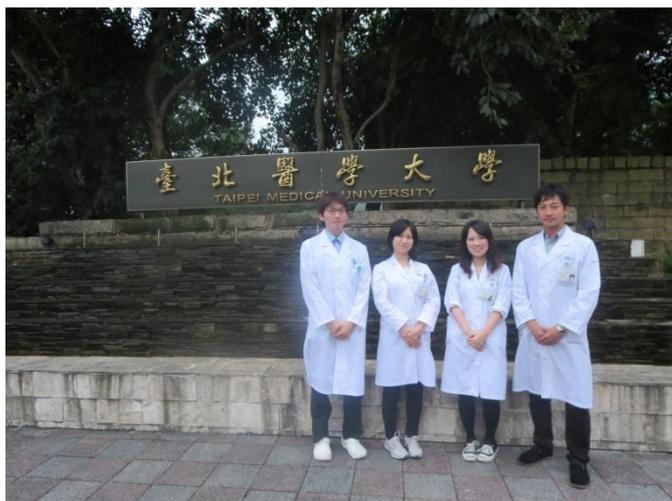
(台北医学大学臨床実習派遣 学生 4 名)

平成 26 年 3 月 31 日から 4 月 25 日まで 4 週間にわたり、台北医学大学との国際交流協定に基づき、新 6 年生の佐久間彩音さん、木村あゆみさん、清水博之君、野間直樹君の 4 名を派遣しました。以下に 4 名の感想文を掲載いたします。

台北医学大学での実習を終えて

派遣時 6年生 佐久間彩音

この度2014年3月31日から4月25日までの4週間、私は台北医学大学で実習させて頂きました。この実習では日本とは異なる人々、文化、医療に触れることで様々なことを学ぶことができました。私にとってこの海外派遣が初めての留学体験です。自分の不十分な英語で海外生活をするのは非常に不安で、緊張を伴うものでしたが、学生の間には海外で一か月もの間実習したことはとても貴重な経験になり、そしてかけがえのない思い出となりました。



最初の一週目は家庭医学を選択しました。主に外来の見学を行いました。まず初めに驚いたのは、先生が台湾語で患者さんと話しながら英語でカルテを書いていたことです。私は日本と同じように母国語でカルテを書くものばかり思っていたので衝撃でした。先生はひとりひとりの患者さんと丁寧に話しをし、患者さんが満足そうな顔をして帰っていくのが非常に印象的でした。基礎疾患を複数持っている患者が多く、じっくり話を聞くことが大切なのだそうです。毎日違う先生の外来を見学させて頂きましたが、范先生は「覚えておきなさい。」とこの言葉を私に教えてくださいました。「上医治国、中医治人、下医治病」国とは環境のことだそうです。これは国こそ違えど共通の認識なのだと感じました。病気だけを治すのではなく、患者さん、ひいては患者さんを取りまく環境をしっかり治すという大切な考えを持ち続けようと思いました。

次の週は形成外科を選択しました。内科だけでなく外科もどのような雰囲気か知りたかったからです。形成外科では、回診・手術の見学だけでなく、英語の論文を読んで要約をプレゼンテーションで発表するという体験もしました。日本ではもちろんそのような発表はしたことがなく、7年生にプレゼンテーションの枠組みを教えてください、OMCの学生二人で分担してなんとか発表することができました。これに対してTMUの5年生のグループは私たちより難しい論文を、すらすらと自分の言葉で説明していました。英語力の違いにとっても驚きました。彼らは「文化の違いだから仕方ないよ」と励ましてくれましたが、やはり経験も能力も全く歯がたたなくて、正直な

ところ少し落ち込みました。台北医科大学では英語のテキストを用いて授業をし、医学の単語は英語、中国語で覚えなければならぬそうです。台湾語に訳されたテキストは現在無いらしく、日本では日本語の教科書を使って日本語で授業をし、カルテも日本語だと教えると驚いていました。日本は恵まれているねと言われましたが、世界共通言語である英語を使いこなしている彼らを私は凄いなと思い、また英語を勉強するモチベーションにもなりました。

三週目、四週目は消化器内科を回りました。ここでは二人の先生が私たちの担当にあたって下さいました。ひとりには日本語が上手な先生、もうひとりにはテキサス仕込みのネイティブのような英語を話す教育熱心な先生です。ここでは主に上部・下部内視鏡、超音波検査の見学をさせていただきました。まず初めに、日本は消化器内科の分野とても優れていると教えて貰いました。超音波検査の機械も日本製で、下部内視鏡における大腸ポリープも日本人が作った分類に沿って治療を行うそうです。先生は国立がん研究センターに内視鏡の研修をしに行ったことがあるそうですが、日本人の手技は非常に丁寧で素晴らしいと仰っていました。日本の医療を台湾からの観点で知ることができるのも海外臨床実習の醍醐味だと感じました。また、台北医学大学では内視鏡検査も超音波検査も、受ける患者さんの数がとても多く、消化器内科は最も忙しい科のひとつで希望する医師が少なくなっているそうです。

ここでは学生が先生に質問したことに対して、他の学生がどのように考えるか議論するという形式の会話(たとえば肝細胞癌の患者に生検は行うべきなのかと学生が先生に質問して、他の学生はどう思う?それはなぜ?と先生が逆に問いかけるといった内容)もありました。ここで感じたのは学生が自分なりの考えをしっかり持っているという事です。そしてそれを英語できちんと表現できるので台北医科大学の英語教育の凄さを実感しました。

実習以外にも、台湾の文化、人々との交流で得られたものは数えきれません。噂には聞いていましたが、日本人に対して非常に優しいと感じることもたくさんありました。とある看護師さんは、私が日本人だと分かった瞬間嬉しそうな顔をしてくれ、私も嬉しくなりました。慣れない生活で困っているときにも学生や先生は優しく助けてくださり、私も日本で同じようなことがあれば進んで力になると強く感じました。

この一か月は何物にも代えがたい貴重な経験となりました。迷っている後輩の皆さんがいれば、海外臨床実習に参加することを強くお勧めします。

最後になりましたが、中山国際医学医療交流センターの皆様、台北医学大学国際部のスタッフの皆様、実習中お世話になった各診療科の先生方、台北医学大学の学生のみなさん、すべての方に深く感謝します。本当にありがとうございました。

台北医学大学附属病院の臨床実習を終えて

木村あゆみ 派遣時6年生

私は2014年4月、台北医学大学で1か月臨床実習をさせていただきました。

台北医学大学は Taipei medical university hospital、Wan-Fang hospital、Shuang-Ho hospital という3つの附属病院を持っています。私たちが臨床実習をさせていただいた TMU hospital と2008年に設立された Shuang-Ho hospital は、それぞれ2011年と2012年に世界での Best teaching hospital という称号を受賞しています。この事からも分かりますように、台北医学大学の病院は教育熱心であり、世界中から多くの留学生を受け入れています。

私は4週間で4つの科をローテートさせていただきました。それぞれの科について、簡単ではありますが、勉強させていただいた内容と感想を述べさせていただきます。

1週目に回らせていただいた産婦人科は、不妊治療に強く、台北医学大学で最も有名な科です。実際に日本も含め、世界各国から患者さんがいらっしゃるそうです。産婦人科では毎日朝7:30からカンファレンスがあり、毎日異なった内容のプレゼンテーションが行われます。私が特に興味を持ったのは不妊治療に関する発表でした。人工授精の際に子宮内に戻す卵の数は、多胎を防ぐため通常2個以上入れてはいけないとされています。しかし妊娠率と流産率の関係性を考慮すると、35~37歳は3つ、40歳以上は可能な限り多くの卵を入れるほうが良いという発表でした。

医学部長をされている Dr. Tzeng の不妊外来も非常に興味深いものでした。人工授精の処置も間近で見させていただき、大変勉強になりました。お昼ごはんも一緒にさせていただいたり、先生の著書にサインまでしていただき、本当に教育熱心な先生でした。また先生方のご厚意により、Dr. Liu による Da Vinci 手術を見学させていただきました。先生の手技の正確さと速さに感銘を受けました。Dr. Liu は独学でロボット手術の技術を習得したそうです。また産婦人科をローテートした際、去年大阪医大に来ていた Vincent が同じ時期に回っていたため、本当によくお世話してくれました。

2週目には救急部(ER)をローテートさせていただきました。台湾での救急体制では、日本のように病院側が患者さんを選ぶということではできません。重症な場合は最寄りの病院に搬送されますが、そうでなければ患者さんの希望を聞いてその病院に運ぶそうです。そのため、日本で起きているような「たらい回し」という問題は起きないものの、1次救急~3次救急のように重症度に特化した病院分けができていないそうです。

台北医学大学附属病院のERでは、walk-in で来た患者さんを1~5の grade に分け、最重症にあたる1~2を優先的に治療していきます。逆に4,5にあたる軽症の患者さん(火傷、軽い外傷など)は intern(7年生)や clerk(5,6年生)が中心となって対応していきます。また救急部にいる患者さんの定期的な心電図モニターは clerk の仕事だそうで、私もほぼ毎日心電図を取りに救急部の病床を動き回って

いました。心電図を取り、所見を自分たちで考えて上の先生に報告し、サインをもらうというのが1つのルーチンとなっています。また簡単な傷の処置も私たち clerk に任せていただけることも多いです。時間がある時は、珍しい症例についてレジデントの先生と議論することもありましたが、基本的には体を動かして仕事をする、といった実習でした。日本では見ているだけの実習だったので、実際に自分が動く分、責任感も増すし、得た知識が定着しやすいと感じました。

3週目には、内分泌内科を回らせていただきました。台北医学大学の内分泌内科は主に糖尿病と甲状腺疾患を扱っています。それ以外の疾患は、近くにある台湾大学附属病院が扱っているそうです。日本では、糖尿病の教育熱心が common ですが、こちらでは教育はあくまで外来で行うもので、しかも特別な資格を持った看護師さんが行うそうです。また実際に糖尿病に罹患していて外来に來られる患者さんに対してだけでなく、病院のロビーなどで待合室に座っているような不特定多数の患者さんに向けても行っていて、日本との差を実感しました。台湾でも日本と同じように、どんどん糖尿病罹患率が増えているので、病院でも積極的に啓蒙活動を行っていくことで国民の意識を変えていきたいということを先生はおっしゃっていました。

甲状腺疾患については、実習のメインは甲状腺エコーです。私の予想以上に甲状腺疾患の患者さんの数は多く、朝9時から12時までめいっぱい患者さんが来られていました。私の印象では慢性甲状腺炎(橋本病)が多いイメージでしたが、術後のフォローで検査されている方から健診で異常を指摘された方まで、いろいろな年齢層の患者さんがおられて、またいくつか穿刺吸引細胞診も見ることができて、とても有意義な実習となりました。

最後の4週目には、消化器内科を回らせていただきました。こちらも実習の主体は、検査の見学でした。EUS(超音波内視鏡)、endoscopy(内視鏡)、sonography(エコー)が3大検査になります。私は主に内視鏡の部屋で勉強させていただくことが多かったです。正直な感想を言わせてもらうと、内視鏡技術は学生の目で見て分かるくらい、日本の方が圧倒的に上だと思います。たとえば、大阪医大で消化器内科への入局がほぼ決定している2年目の研修医と、こちらの中堅のドクターを比較しても、日本の研修医の方が上だと言えると思います。しかし、私を熱心に指導してくださった Dr. Ten は英語も堪能で、また海外で勉強した経験もあることから、内視鏡技術も高く、またそれ以外の疾患の知識などもたくさん教えていただきました。

こちらは後日談になってしまうのですが、帰国した後、個人的な病院見学で京都府にある京都第二赤十字病院の消化器内科を訪れる機会がありました。その時にたまたま、TMU から勉強に来ている消化器内科のドクターとお会いしました。その先生ともお話ししていたのですが、やはり台湾の内視鏡技術はまだまだ日本に及

ばないのでこうやって勉強しにきている、とっておられました。

さて、この実習全体で感じたことを述べさせていただきます。それは、昨年派遣された先輩もおっしゃっていましたが、台湾と日本を比べてみても、医療技術や設備などで大きな差はないということです。ただし一つ言えることは、学生のレベルは圧倒的に台湾の方が上であるということです。こちらの学生は、半ば強制的に英語の参考書を使っていて、自然と医学英語が身につく環境があります。たとえば、学生と先生が中国語でディスカッションをしているところに私が参加した場合、「日本の子が来てくれたから、今からみんな英語で議論しよう」と先生が言え、全員が英語でディスカッションを始めることができます。台北医学大学じたいも台湾の中でかなり上位の大学であるからかもしれませんが、私はこの光景にお尻を叩かれた気分でした。日本の大学で日本語だけで勉強して、実習は見ているだけといったポリクリでは学べることなど限られています。そうではなく、母国語だけでなく英語でも勉強し、積極的に実習をして手技も勉強するといった姿勢が、医師側にも学生側にも求められていると感じました。

そしてこの実習がうまくいったのは、TMUの先生方や学生の温かい手助けがあったからだ実感しています。初日は本当に緊張でいっぱいだった私が、1つの科が終わるたびに寂しい気持ちになったのは、こんなに良くてくださった先生方や学生と別れてしまうのが本当に悲しかったからです。現地の学生に比べれば、はるかに英語も拙い私を、毎日昼ごはんや夜ご飯に誘ってくださったたり、中国語でのカンファレンスの内容を隣でこっそり英語に翻訳してくれたり、そういった皆さんの温かさが、心にしみわたりました。

何より特別な感謝をしたいのは、大阪医大に交換留学で来てくれた Tseng Kuo-Yuang (Roy)、Huang Sheng-Yun (Eddie)、Chang Wen-Chu (Vincent)の3人です。3人とも4月は7年生(intern)で、日本でいうところの研修医という立場にも関わらず、ほぼ毎晩気にかけてご飯に連れて行ってくれました。土日はみんなで旅行に行き、たくさん笑ってたくさん素敵な思い出を作ることができました。私も含め、大阪医大の4人は、間違いなく海外派遣組の中で自分たちが一番幸せな1か月を過ごせたという自信があるくらい、本当に周りの人に恵まれた素敵な交換留学でした。

台湾に行くのは初めてだったのですが、この1か月で間違いなく台湾は私の第二の母国となりました。また次に同じような機会があれば、私はきっとまた台湾を選ぶと思います。台湾に大好きな友達と尊敬できる先生方がたくさんできたことを心から感謝します。そして何より、このような機会を設けてくださった中山センターの皆様、花房教授、米田教授をはじめとする大阪医大の先生方に心から感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

台北医学大学の Clinical clerkship を終えて

6年生 清水博之

この度台北医学大学で病院実習を4週間させていただきました。

台北医学大学との交換留学プログラムは昨年度から始まり、私を含め4人の学生が二期生として派遣されました。台北医学大学は私立医療総合大学でQS世界大学ランキングにも掲載されています。今回私は小児科、家庭医学科(Family Medicine)、救急診療科、神経内科を見学させていただきました。

最初に回った小児科では、主に外来とそれぞれの検査を見学させていただきました。また予防接種と発達度チェックを行う外来も定期的に行い、発達度チェックでは知能発達障害や先天性の難病疾患の小児患者を数症例診させていただきました。ある患者さんは Noonan 症候群という先天性疾患があり、知能発達障害などだけでなく将来成人となっても子どもがつくれるかわからず、出来たとしても50%の確率で子どもに遺伝してしまう可能性があり、そんな患者は子どもを産む選択をするであろうか。そして親は自分を責めてしまうのではないだろうか。小児患者へのアプローチだけでなく両親に対するメンタルケアも考えさせられ、医療を志す者にとって極めて貴重な時間でした。

Family Medicine は日本の専門医認定に含まれていないため非常に興味があり、ここでは主に外来を見学させていただきました。行うことは(1)高血圧、高脂血症などの予防医学(2)昔の注射針の使い回しなどによるHBVキャリアなどが多く、HBVやMMRなどのワクチン接種を行うこと(3)健康チェック(4)上気道感染や尿路感染症など急性疾患にも対応(5)重症疾患の除外です。またここ数年で国から身体所見だけを取る外来を週1回求められ、ここでは午後の3時間くらい身体所見のみの診療を行う日もあります。他にも僻地の診療所を見学させて頂き、僻地での診療所でも年間4000件以上の1次~3次救急患者を受け入れていること、約10人の先生を都市部から雇ってシフト制で診療しに来ていることなど僻地の現状を知りました。

救急診療科は、日勤帯と夜間を見学しました。ここは他の科であればすぐに診てもらえるか分からず入院は何週間後になるか分からないが、救急科ならすぐに対応してもらえる、更には自己負担もさほど変わらないため、台湾の患者さんは救急診療科に非常に沢山来るそうです。私が見学していた時の夜勤帯では約20人の患者さんが処置を受けたり、人手が足りず待機したりしていました。そのため、ドクターのみならずナースも非常に忙しく、ここではナースがトリアージを1~5段階(5が最も緊急性が高い)に分けて行い、ルート確保、採血、ECGなど初期対応は殆どナースが行って行きました。軽症のものから心筋梗塞、脳梗塞、外傷などの重症も受け入れており、学生でも多少の初期対応は一緒にやらせていただけたので良い経験となりました。

神経内科では、外来と回診で様々な神経疾患患者を診させていただきました。Dr.高(Kao)は重症筋無力症における検査でテンシロンテストを考え出す過程に関わった先生で、他にも様々な研究

成果を持っておられ、神経診察所見を取る外来、レクチャーともに大変興味深いものでした。神経内科のトップの先生が学生に神経診察所見のみをひたすら4時間教える、とても内容の濃いレクチャーがあり、自分の所見の取り方を診ていただいたりポイントを説明していただいたりと、大変勉強になりました。

また朝のミーティングや勉強会などでは、学生、先生ともに抵抗なく英語を使いこなしているように見え、大変驚きでした。どの科でも言えたことですが、私が参加するミーティングでは「留学生がいるから英語にしてくれ」と急な変更にも関わらず、大体の先生方は英語でプレゼン、説明を行って下さり、また台湾語の部分でわからないことがあると、隣で学生も英語で説明してくれました。台湾では若い学生のうちから日々英語の医学書を用い医学英語に触れ、インターンや先生になり日々のプレゼンでは、台湾語で喋るもののスライドは英語で記入し、英語を使う環境にあります。一方、日本では和訳された本があり、また日本語の本の方が安価であることは知識の習得の側面では長所ではありますが、自らが英語を求めていかなければいけません。台北医学大学のような英語を使わなければならないような、整った環境に身を置いたからといって必ずしも英語が出来るようになるわけでは無く、勿論彼らの高い意欲があつての高い質だと思います。”環境”に身をおくと共に、そのような環境が整って無くても努力する”向上心”が大事であると再認識できた刺激的な時間でした。

この交換留学プログラムのお陰で先生にも学生にも本当に良くしていただいたことに感謝しております。病院での研修は勿論のこと、実習後、夕飯、観光、時には週末を使ってレンタカーで小旅行なども企画して下さい、彼らとの交流のお陰でこの1ヶ月の実習がより一層充実した思い出深きものへととなりました。この一ヶ月、本当に貴重な経験をさせていただき、改めてこの交換留学に参加させていただいたことに感謝致します。最後になりましたが、花房教授、米田教授、河田教授、中山国際交流センターのスタッフ方、台北医学大学 international office の方々、この場を借りてまず御礼申し上げますと共に、この経験を今後の自分のドクター生活へ糧として活かしていきたいと思っております。本当に有難う御座いました。

台北医学大学での臨床実習を終えて

野間直樹 派遣時 6年生

僕は台北医学大学附属病院において、皮膚科、形成外科、消化器内科、家庭医学科でそれぞれ1週間ずつ実習に参加してきました。国際交流の経験の浅い僕にとって、非常にハードルの高い挑戦だと理解した上で申し込み、無事実習を終えることが出来ました。

最初に回ったのは皮膚科です。台湾では皮膚科は人気の科 Top 3に入るそうです。女医さんが多くとても華やかでフレンドリーでした。最初に回らせていただいて本当に良かったと思っております。台北

医学大学の皮膚科は、通常の皮膚科だけでなく美容皮膚科も兼ねており、病院の上層階には Cosmetic Center がありました。Cosmetic Center では、自費診療でほくろの切除やニキビ跡の治療などを行っており、病院の中というよりは1つのクリニックのような空間でした。美容外科との違いを聞いたところ、美容外科ではオペ室で処置するような処置をするが、ここでは機器を使って侵襲度の低い処置を行っているとのことでした。男性ができるのはざっと見学するのみという感じだったので、女性で興味がある方は希望して見に行ってもいいと思いました。実習内容ですが、レジデントの Kou 先生に1週間の流れを聞き、診察室の見学に入らせて頂きました。僕は中国語が全くできないので、先生と患者の会話の内容はさっぱり分からなかったのですが、患者カルテの入力が英語なので、後ろから必死に英語を読み取り、どういう症状で来院されたのかを知ることができました。生検などの処置が行われるときには席を離れて見に行き、終わるとまた診察室に戻ってくるというような流れでした。面白い症例の際には詳しく説明してくださり、日本ではあまり見ることが出来なかった皮膚疾患を見ることが出来て、とても面白く勉強になりました。

次に回ったのは、形成外科です。台北医学大学の形成外科には、Tsai 先生と Lin 先生の2人のドクターしかいないのですが、その2人で数多くの手術をこなしています。手術室で代わる代わる移動し、処置をこなしていく姿はとても格好良かったです。実習内容ですが、同じ大阪医科の佐久間さんと2人で回りました。最初は朝のカンファ室に呼ばれ、インターンの Su 先生に流れを説明してもらいました。朝のカンファレンスでは入院患者の紹介と Su 先生による論文の抄読会が行われ、その後に病棟に行きました。ここで僕達2人に課題が出されたのですが、その課題の内容が論文のプレゼンを作成し、木曜日の朝に発表するというものでした。英語の論文のプレゼンを作るのも初めてでしたが、それを英語で発表するのも初めてだったので、かなり必死になって作成しました。実習の中でも、1番頑張った週だと思います。右も左も分からない状態の僕達のために、Su 先生はスライド作成の流れを Word で作成して説明して下さい、その上完成したスライドと原稿の手直しまでしてくださいました。本当に感謝でいっぱいです。発表は無事に終えることができ、Tsai 先生が講評してくださいました。プレゼン作成はしんどかったのですが、日本では出来ない体験だったので、非常に勉強になりました。

次に回ったのは、消化器内科です。消化器内科では、Chen 先生にお世話になりました。非常に手技が上手で、東京の国立がんセンターへ ESD の勉強をしに行った経験のある先生でした。お昼ごはんに連れて行ってくださり、日本と台湾の技術の違いなどを教えていただけました。Chen 先生の英語は非常に聞き取りやすく、また説明も非常に分かりやすく勉強になりました。英語で説明してくださっているのに、日本にいる時に日本語で説明してもらった時よ

りも断然分かりやすいという不思議な感覚でした。教育者としても素晴らしい先生だったと思います。消化器内科の分野は日本が進んでいるらしく、台湾には内視鏡で ESD の出来る医者が少ないと仰っておられました。他の先生からも、どうして台湾でわざわざ消化器内科を見に来たの？と言われることが多かったです。実習内容は主に上部下部内視鏡検査と腹部超音波検査を見学でした。台湾では保険の関係などで、内視鏡検査を日本よりも速く行わなくてはならないそうです。しかし、だからと言って病変を見逃していいわけがなく迅速かつ丁寧にしなくてはならないと Chen 先生は仰っておられました。また、月曜から木曜まで朝 7:30 からカンファレンスがあり、非常に朝が辛い週でもありました。しかし、台湾の学生によると朝早いのはしょっちゅうあるらしく、日本では 9 時開始のほうが多いことに驚いていました。

最後に回ったのは、家庭医学科です。日本の病院にはない診療科です。病院では健康診断を行ったり、総合内科のような外来を行っていました。また、企業に赴いての健康診断も行うらしく、産業医としての側面もあるようです。実習内容は、とても記憶に残りました。最初に教授である Su 先生の説明を受け、診察を見ました。3枚の紙を渡され、診察中に気付いたこと、気になったことを書いて提出するよう言われました。また、台北医学大学には血液検査から内視鏡検査や MRI まで様々な検査が自費診療で行える施設があり、先生に案内してもらいながら見学させていただきました。このような施設が大学内にあることに驚きました。水曜日には、家庭医学科を回った大阪医科の3人を食事会に招いていただきました。先生方はみなフレンドリーでひとつの家族のようだと仰っておられました。木曜日には、院外実習として福隆(Fulong)へ行きました。福隆は台北の東の海岸線沿いにある村で、夏にはビーチでロックフェスが行われる場所ですが、無医村であり毎日台北などから先生が診察に行っているそうです。ここで働いている Lin 先生はもともと日本に住んでいらっしゃる先生で、日本語が話せる先生でした。非常に人柄のいい先生で、診療所の中だけでなく周りの観光施設も紹介して下さい、とても楽しかったです。

また、日本語を話せるおばあちゃんの元へ問診に行くのにもついていかせて下さり、おばあちゃんと楽しく会話することが出来ました。

そして、台北での4週間は実習だけではありません。現地の人とコミュニケーションをとり、様々な場所にてかけ、大いに楽しむことが出来ました。日本から来た僕達を毎日のように外へ連れて行ってくれた、台北医学大学学生の Eddie, Roy, Vincent の3人には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に彼らとは親友と呼べる関係になることが出来ました。

最後になりましたが、今回このような貴重な機会をくださった、台北医学大学関係者の方々、花房教授をはじめ中山国際医学医療交流センターの方々、大阪医大で留学生の世話をしてくださっている先生方には感謝してもきれません。後輩たちにもこの素晴らしい体験を伝え、是非参加してもらいたいと思っています。本当にありがとうございました。

(台北医学大学臨床実習受入 学生4名)

平成 26 年 4 月 7 日から 5 月 2 日まで 4 週間にわたり台北医学大学医学部 6 年生 4 名、Ling HSIAN(Ling)さん、Ping Yuan SU(Lisa)さん、Yu-Da CHEN(Derek)君、Te-Yen CHUANG(Sid)君が、相互交流協定に基づいて本学附属病院、三島救命救急センター、国立循環器病研究センターなどで研修を受けました。学生たちはオリエンテーション、学内・病院見学ののち、それぞれの希望に沿って各診療科・教室で研修を受けました。また、課外活動として弓道部・茶道部の見学、週末の京都観光ほか本学学生との交流も積極的に行われ、医療技能シミュレーション室での本学学生指導による研修も研修終了後の時間を利用して参加しました。

<抄訳>

大阪医科大学への交換留学

Ling Hsin(Ling)
6th year student
Taipei Medical University

大阪医科大学に来る前にすでにたくさんの交換留学を体験していた私は、正直あまり多くを期待していませんでした。しかしスタッフや学生さんたちの温かい歓迎と思いやりに接して、大阪医科大学でのこの1ヶ月は他の留学体験とは比較できない忘れがたいものとなりました。

大阪医科大学では若い世代を大切な個人として扱っていて、一人前になるまでの段階においてひとつひとつ手助けをして育てるという印象を受けました。おかげさまで短い期間でしたが、たくさんの事を学ぶことができ感謝しています。

中山国際センターが作成した研修スケジュールは来日前からとてもよく準備されており、初日に大阪大学附属病院のドクターヘリコプ



ターを見学に行きました。阪大病院に行けることがどんなに貴重な体験か以前にも日本で臨床実習を体験した私にはわかっていたので、これは前から楽しみにしていました。私は日本のドラマが大好きです。ドクターヘリコプターを見た時、何年か前に見た日本のドラマ「コード・ブルー」を思い出しました。ヘリコプターはそっくり同じに見えました。

翌日眼科に行きました。眼科は大変興味があり、たくさんの検査機器を見ることが出来てとてもいい勉強になりました。台湾でもアメリカでも眼科で研修したのですが、大阪医科大学の眼科では今まで見たことのない特殊なものがありました。例えば外来の検査でリモコンを使って明るい部屋と暗い部屋を即座に入れ替えているのを見た時に、こんな方法で検査の効率化を計っているのをこれまでアメリカでも見たことがなかったので感心してしまいました。帰国したら台湾で是非報告したいと思います。台湾も日本と同様忙しい国ですから！

大阪医科大学の眼科は有名です。中山国際センターのおかげで二日に渡って午後の手術を見学することが出来ました。いろいろな種類の手術が大阪医科大学では行われており、詳しく手順を説明して頂きました。お世話になった先生方は質問するととても良いリファレンス本を見せて下さり、即座に疑問を解決して下さいました。1人で研修をした眼科でしたが、あたたかく迎えて頂いてとても嬉しかったです。

小児科に行った時には私なりの課題がありました。台湾の先生から日本と台湾の小児科の違いを見て来てくれるように言われていたのです。大阪医科大学で新しい診療科に行く度にいつも新鮮な感覚があったのですが、ここでもすべてのスタッフが病気の子どもたちのために一丸となって働いていました。私は X 線の写真を他の医師の皆さんと見た後で回診について行って下部消化管撮影を見学しました。1 人の子供に対して多くの先生方がついていて、子供が最良の治療を受けられるだけでなく、若い先生方が先輩医師の指導で学ぶことができ、大変素晴らしいと思いました。

皮膚科では外来にお邪魔しました。顕微鏡を使って先生方が診断するのを見学し、帰るときには貴重な勉強資料を頂きました。それだけでなく、私はこの日の素敵な思い出も一緒に持って帰りました。

シミュレーションセンターは記憶に強く残っています。台湾の病院では外科の手技用の最新のシミュレーターを学生が練習で使用できる環境はあまりないのです。大阪医科大学には「花子」と「一郎」という聴診の練習ができる人体モデルや、内視鏡、腹腔鏡検査、縫合を練習するいろいろな機器がありました。多分丸一日いても全く飽きません！

研修が始まって三日目の月曜日、解剖学で2年生と一緒にになりました。解剖した部位についてのちょっとした口頭試験をしていました。解剖用の献体が何体もあって学生はじっくり解剖に取り組むことが出来るようでした。この日私は台湾で受けた何年か前の解剖クラス

を思い出しました。身体の部位を全部英語で覚えたものです。でも日本では学生さんたちが部位を日本語で覚えていたので驚きました。英語で答えをいう人もいて、その人はその分勉強をきつと余分に時間を費やしたのだと思います。

同じ週に大阪三島救命救急センターに行きました。救急に特化した大変珍しい施設なので外来はないようでした。一般の病院とは違って全てのスタッフが救急医療の訓練を受けています。患者さんが搬送されて来てからCTスキャン、MRI、血管造影などの検査がすぐにできるように機器が連続して隣接されていて、滅多にない優れた設計になっていると思いました。危篤状態にあつてここに運ばれてきた患者さんたちはその状況でできる限りの最高の治療をしてもらえらると思います。

大阪医科大学での充実した時間が終わろうとしている時、とても寂しく別れがたい気持ちになりました。この留学経験は私達皆にとって将来とても意味のあるものになると思います。先生方、学生さん達、中山国際センターのみなさんありがとうございました。心は今もまだ大阪医科大学にいるような気持ちです。

<抄訳>

大阪医科大学での選択実習に参加して

SU Ping-Yuan (Lisa)

6th grade student

Taipei Medical University

最初、「大阪医科大学の臨床実習に行くことができる」と聞かされた時、嬉しいという気持ちと同時に日本語はできないし、病院での意思疎通が難しいのではないかと心配がありました。しかし去年このプログラムに参加した先輩から全く心配ない、先生方はみんな英語を話されると聞いて安心し、期待に胸いっぱい来日しました。

研修では先生方から臨床の知識や技術をたくさん教えて頂きましたが、その他ではシミュレーションセンターがやはり印象に残っていて、大阪医科大学の学生さん達に手伝ってもらって研修期間中の火曜日に残って外科の手技練習をしました。初めてシミュレーションセンターへ行った時にはその広さと新しい機器の多さに驚きました。腹腔鏡手術の練習ができるなんて全く今までにない経験でした。

大阪大学附属病院で見たドクターヘリコプターも感動しました。日本のドラマ「コード・ブルー」で見たのと全く同じヘリを見た時には衝撃が走りました。しかも見るだけでなく中に入って座ったりすることも許可が出て、緊急チームの制服を着てヘリコプターと写っている記念写真をウェブに上げると、多くの友人たちからいいなあ、と羨ましがられることしきりでした。

研修中に日本の医学教育のシステムについて話を聞いたり、日本の病院がいかに機能しているかを見る機会が多くありました。日台の医療システムの違いを聞くだけでなく実際に見て比較できたことは本当に貴重な体験でした。台湾では外科や内科、小児科での医

師や看護師の不足により患者はその科の医師1人、看護師1人によって診てもらうのですが、そうだと医師1人で大体20人以上の患者のケアをしなければなりません。日本では医師、看護師、インターンなどから成る15人以上のチームが患者さんを担当します。やはり医療においてチームワークはとても大切だと思います。先生方がチームの一員として仕事に携わっている様子を見ることができて本当に良かったです。留学を通して学ぶことがここにもありました。

留学において新しい友人を作ることも大切なので、お昼の食堂や病院内や ESS クラブなどで大阪医科大学の学生さんたちと交流する機会もたくさんあって良かったです。自由時間があるときに自分たちだけで京都や奈良などに行きましたが、大阪医科大学の皆さんと一緒にいった比叡山はとても楽しく、心を開いて色々な人生経験談を交換することができました。来年台北医学大学に来るかもしれない学生さんもいて、また台湾で再会出来るといいなと思っています。



中山国際センター長の花房教授、お世話くださったスタッフの方々、ありがとうございました。いろいろと考えてプログラムを組んで下さったお陰で実りの多い留学でした。消化器外科の林道廣先生にも手術が終わってから駆けつけて頂いたりして大変お世話になりました。楽しい時間が過ごせました。私にとって今回の留学は初めての日本でもなければ初めての海外臨床実習という訳ではありませんでしたが、大阪医科大学でのこの1ヶ月は間違いなく私の大学生活で一番輝いていた時間でした。最高の留学生活でした。

<抄訳>

大阪医科大学での選択実習に参加して

YU-DA CHEN (Derek)

6th year student

Taipei Medical University

Orientation (オリエンテーション)

研修の初日はオリエンテーションでした。竹中洋学長や黒岩敏彦病院長にご挨拶した後、花房俊昭教授が病院や学内を案内してくだ

さいました。図書館や歴史資料館(昔の医療器具や書類、講義教室などが保存されています)も見学しました。図書館は勉強するのに環境がとてもよく整っていました。大学・病院の見学時に建物同士をつなぐ空中廊下を通ったのですが、移動に便利だし特に雨の日にはありがたいデザインだと思いました。

Clinical Rotations (臨床実習)

毎日違う診療科や基礎医学教室に行って多様な医療現場を見学できるように中山国際センターがプログラムを組んでくれていました。各科で研修する時間は限られていますが、その中で先生方は最大限の知識を伝授してくださいました。熱心な先生方のおかげで予想していたよりもはるかに充実した1ヶ月となりました。

Osaka University- Doctor-Heli(大阪大学医学部附属病院)

数年前に日本のドラマ「コード・ブルー」を見た時、救急医療について考えさせられたものですが、まさか自分が本物の救急ヘリコプターと対面することが出来るとは思っていませんでした。それはまるで自分がドラマの主人公になったような体験で、ヘリコプターのある阪大医学部附属病院に連れて行ってくださった救急医学教室の高須朗教授には大変感謝しています。高度救命救急センターで日本のヘリコプターの救急システムから台湾でのヘリコプター救急の現状にも話題が及ぶなど幅広いお話ができた一日でした。



Takatsuki-city Fire Dept (高槻消防本部)

消防本部訪問は、病院と消防が実は密接な関係にあったと気付かされるものとなりました。見学日に救急搬送依頼の電話を受付の人が目の前で取ると、ERで医師が重症患者を評価するのと同じような素早い対応がなされました。救急車についている器具について説明してもらいましたが、挿管のためのビデオ喉頭鏡もその中にありました。

Pathology (病理学教室)

病理学教室では廣瀬善信教授と里見英俊先生に教えていただきました。先生方は免疫染色のし方を説明しつつ、ステップ・バイ・ステップで実際に僕と一緒に染色を行って指導して下さいました。染色が浸透するのを待っている間、里見先生がどのようにスライドをシステムティックに読んでいくかを教えてくださったのですが、臨床実

習で1対1で先生に何かを教えてもらったのは初めてのことで、質問が何かあれば遠慮無くいつでも聞くことができ、とても分かりやすく教えて頂きました。本当に病理学では貴重な学習体験をしたと思います。

Otolaryngology (耳鼻咽喉科)

台湾にいる時から耳鼻科には興味があったので楽しみにしていました。萩森伸一先生と鈴木倫雄先生が担当してくださいました。河田了教授の回診について回って、傷の手当の仕方などを見せていただきました。鈴木先生は中国語が堪能で、絵や図を描くのが上手だったので説明がとても良くわかりました。河田教授は耳鼻科関連のありとあらゆる疾病がカラーの写真付きで載っているハンドブックを下さいました。自分にとって最高のおみやげになりました。一生大切にしたいと思います。

午後には手術室を見学しました。甲状腺切除のような一般的なものから耳下腺の手術のようなめったに見られない手術を見学することが出来ました。河田教授が神経を正確に素早く見つけて切除する手技がとても素晴らしかったです。耳鼻科で実習することができて、とても嬉しく思っています。

Dentistry and Oral Surgery (口腔外科)

最初、口腔外科で実習を受ける理由がわかりませんでした。口腔外科学は母校では勉強する必要がありません。しかし、実習後、口腔ケアは病院では大切なことなのだと思いに至りました。特に寝たきりの患者さんは口腔内の衛生状態が悪くなりがちで、首の内部に炎症を起こすきっかけとなったりするのです。口腔外科が臨床実習プログラムの中に入っていてよかったです。

Pharmacology (薬理学教室)

研修中には基礎医学教室も回ったのですが、帰国後もよく思い出したのは薬理学の朝日通雄教授の研究室での貴重な体験でした。中川孝俊先生には特定の抗体を細胞内のしくみを知るためにどのように蛍光標識付けするかについて教えていただき、異なった抗体を使って細胞器官の違いをみせてもらいました。先生のととても分かりやすいレクチャーで、短い間に多くを学ぶことができました。

Gastrointestinal Medicine (消化器内科)

台湾で消化器内科を回っている時に日本のこの分野の医療は世界でもよく知られていると聞きました。台湾の医師が更なる研修のために日本に来るのはそのためだそうです。第二内科のラボでは胞状奇胎を見つけるのにほぼ全員の医師が狭帯域光観察を使っていました。インディゴカルミンで色素をつける事も多いようでした。他に目立った違いはというと、たくさん先生方が第二内科の部屋にいて、所見について話し合っている姿でした。台湾では一人しか部屋に医師がいないので、もちろんそんなことはできません。日本では人員の配置が台湾より効率的だと思いました。

午後には津田先生がシミュレーションセンターに連れて行って下さり、腹部エコーのとり方を教わりました。門脈三つ組や脾静脈、脾臓、脾

臓、腎臓などを見つける練習をしました。津田先生が系統だてて検査の仕方を指導してくださったので、エコーの検査の操作がスムーズに出来るようになりました。

Endocrinology and Diabetology (糖尿病代謝・内分泌内科)

糖尿病は大阪医科大学でも突出した素晴らしい分野です。花房俊昭教授は Type 1 DM の亜型(劇症 1 型糖尿病)を発見されています。学術分野にそんな偉大な功績を残しておられる先生から学ぶことが出来、大変光栄でした。2000 年の 2 月号の NEJM に掲載された花房教授の論文のコピーを頂いたのですが、研究方法や糖尿病のメカニズムについてより良く知ることが出来、とても参考になりました。また、先生の謙虚で親切なお人柄に僕もこうありたいと思い、将来先生のように学術にも功績を残し、人格的にも尊敬されるような医師になりたいと思いました。午後には谷本啓爾先生、井畑蘭子先生、酒井聡至先生、忌部歩先生と一緒にエコーの部屋に行き、そこで甲状腺超音波検査の様子を見学。正しい検査方法を先生方が教科書を使いながら教えて下さいました。グレーブス病を診断する際に参考とする上甲状腺動脈の血液の流れをドップラー超音波を使って見る事ができました。

Cardiovascular Surgery (心臓血管外科)

心臓血管外科はとにかくすごいです。心臓を一旦止めて開胸手術をするのですよ！特に先天性の心臓疾患のオペは非常に難しい。僕は術野に入ることが許されていたので前日に開胸手術と先天性心臓病についておさらいをして行きました。その日はダウン症を伴った4ヶ月の赤ちゃんの房室中隔欠損の手術で、根本慎太郎先生は複雑な手術だったにもかかわらず手術の過程の説明もして下さいました。術野に入れていただき大変感謝しています。

Vasculocardiology (循環器内科)

僕にとっては心雑音の鑑別診断は難しく、頭の痛い代物でした。複雑な心音をどう聞いて判断するか、そのメカニズムを伊藤隆英先生に教わってから自信を持って診断が出来るようになりました。先生にまず説明をして頂いてから、実際に様々な心雑音をシミュレーションセンターで聞いたのですが、まず言葉で聞いて実際に行う、これは最良の学習方法だと思いました。

午後になって、カテーテル室に行って、エレクトロアナトミック・マッピングシステムを切除に使うのを初めてみました。僕たちは珍しくていろいろ知りたいので宮村先生や寺本先生にお話を聞きました。冠血管造影についてもたくさん質問し、詳しく教えて頂きました。

Pediatric Orthopedics (小児整形外科)

藤原憲太先生のクリニックでは扁平足や脊柱側弯や発達に問題がある子ども達が診察を受けていましたが、コラーゲン I 型の異常による青式強膜など稀な症例を持つ患者さんもたくさんいました。先生は超音波を使って股関節脱臼グラフ式分類法を教えてくださいました。中には知恵遅れの子もいて叩いたりしてくるのですが、藤原先生は辛抱強く絵を描いて子どもたちにあげていました。医師と患

者さんの繋がりの強さにとても感心しました。

Osaka Mishima Emergency Critical Care Center
(大阪府三島救命救急センター)

三島救命救急センターの見学は研修中でも一番良かったと思うもののひとつです。副所長の小畑仁先生が救急車や救急室にある施設や機器について説明してくださいました。朝のミーティングや回診にご一緒させていただき、回診では小畑先生が詳しく患者さんそれぞれの症例について教えて下さいました。

昼食後、心筋梗塞の患者さんがERIに運ばれました。スタッフにはそれぞれドアトゥパルーンタイムを最短にするための役割分担があり、そのチームワークに感心しました。周りで様子を見ているスタッフもいましたが、40人以上もの医療関係者が1人の患者の処置に当たるというのは初めて見ました。台湾では患者さんの数が多い上に人員不足なのでこんなことは起こりえないのです。三島救命救急センターのコンセプトは素晴らしい。台湾での救急システムの改善のために何かしたいと思いました。

Kyoto University-Geriatric Medicine (京都大学医学部附属病院老年内科)

京大付属病院でも教育熱心な先生方と親切な学生さんたちにお世話になりました。まず老年内科の大学院の学生さんたちが学校生活の面白い話をしながら学内案内してくれました。それから荒井秀典教授が外来の65歳以上の患者さんの診察するところを見学しました。ほとんどがサルコペニア(筋肉減少症)や高血圧、骨粗しょう症、糖尿病といった患者さんで、処方箋を書くことが解決法ではなく、患者さんに生活改善を促す「患者教育」が大切だということ学びました。先生は各患者さんの家族背景をよくご存知なので、何が患者さんの不調の本当の原因なのかをそこから見つけ出していました。最後に健康維持のための正しいエクササイズ方法が書いてある論文のコピーをいただきました。

午後になって、松林公蔵教授が老人医療について素晴らしい講義をしてくださいました。松林教授の高地高齢者についての研究のお話はとても面白く、研究に対する松林教授の情熱にも深く感動しました。京都学派という京大を中心とした哲学ムーブメントにも先生は言及され、京大訪問は京都文化を別の側面から見た、そんな素晴らしい経験となりました。

Blood Transfusion Center (輸血室)

輸血センターを見学したのは初めてで、センター長の河野武弘先生が日本の輸血システムについて特別に説明をしてくださいました。講義内容の素晴らしさもさることながら、例えば自己輸血の際の患者さんの気持ちを考えて、輸血の最中に病気と戦おうという気持ちが湧いてくるように自己輸血室に元気が出るような絵を選んで飾ったり、音楽も選んで流したりすることを考えついたというお話などを聞いて輸血のシステムと輸血環境を整えるために非常な努力をされたんだということが感じられ、どんな困難があっても自分の正し

いと思ったことをやりぬくという先生のお人柄の素晴らしさが印象に残りました。また、医師としてのご自分の経験談を話して下さいました事を思い出すたびに先生の教育熱心なお気持ちに感謝の気持ちが湧いてきます。輸血室の見学で僕は大きな影響を受けました。

Simulation Center (医療技能シミュレーション室)

よく行った場所の一つにシミュレーションセンターがありました。血管縫合を顕微手術用の機器を使って練習したり、心雑音を聞いたり、内視鏡で下部消化管を見たり、その他静脈注射、腹部超音波検査、腹腔鏡検査の練習をしたりなどたくさんの実技実習の練習のための機器があるので、一日いても飽きないと思います。機器を用意して、使い方を教えて下さったりとシミュレーションセンターで僕達を指導して下さいました先生方や学生の皆さんにとっても感謝しています。最後に。

日本でどこの大学にもう一度行きたいか？と訊かれたら大阪医科大学です。と答えるでしょう。花房俊昭教授、お褒めのお言葉をいただき、ありがとうございました。学生の皆さん、みなさんと一緒に過ごす機会がなかったら留学もこんなに想い出深いものにならなかったでしょう。本当にありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。



I am part of Osaka Medical College

Chuang Te-Yen (Sid)

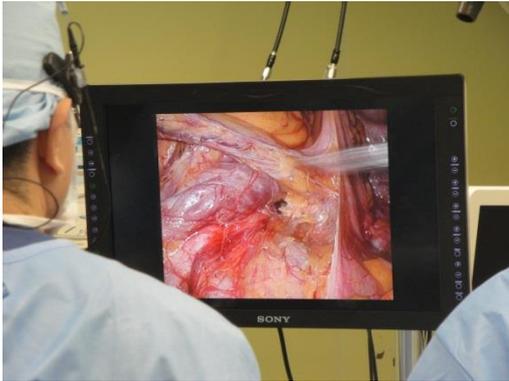
6th year student

Taipei Medical University

It was my first time in Japan. On April 5th in 2014, after 2 hours of flight from Taipei to Kansai, I finally started my first step in Japan. It was chill and rainy that day but the weather did not reduce any of my excitement. Soon, we met Ms. Matsumoto and was lead to our apartment and was ready for the coming challenges.

This time in Japan was my first time studying abroad. Being the representative of Taipei Medical University, I was afraid that I can not do well in the next four weeks, so I told

to myself that I must do my best and bring everything I learn back to Taiwan.



Osaka Medical College is a school with long history more than about 80 years, and I was really happy that I could have the chance studying medicine here in this cherry-blossom season. In the hospital of Osaka Medical College, I visited many different departments and had learned a lot from the doctors. We saw outpatients with doctors. Though I did not speak Japanese, I could still learn how to interact with patients from doctors through my eyes. We joined the ward round and had seen many different kinds of diseases or even the same disease but in different conditions. Doctors told us the history of the patients and the situation which the patients were in. Then, doctors taught us how to care the patients and how they decided the treatments in the future. In Taiwan, we always use nasogastric tube on patient with GI problem, but in Japan, what really impressed me was that doctors chose gastric tube instead of nasogastric tube. I thought that I can share the experience to my classmates and doctors in our hospital. In operation room, I not only saw doctors performed difficult operations but also saw some equipment that I could rarely see in Taiwan such as portable sonography and the 3D laparoscopic surgery.

I liked to go to the simulation center in the hospital. There were some advanced devices which could improve our medical skill. We practiced how to sutured under laparoscopic surgery, performed lumber puncture, used the sonographic machine, and distinguished different kinds of heart murmur with stethoscope.

Except for the course in Osaka Medical College hospital, Nakayama center also provided chance for us to visit other medical systems in Kansai area. After seeing the Japanese drama “Code Blue”, I recognized that the whole rescue system in Japan was connected and formed as a net by fire station, emergency critical care center, and hospital. Each of them plays an important role in the emergency rescue system. In the fire station in Takatsuki, they explained how their system work and how they save people when disasters coming. In Mishima emergency critical care center, I was surprised that the building which could only accept 40 patients was so well-equipped and the most important was that when I saw a patient was sent to Mishima by ambulance, there were about 40 doctors or students

whatever taking care of the patient. I could not imagine that because it would not happened in Taiwan now or even in the future. We also visited Osaka University hospital and saw the amazing “Doctor helicopter” which was only seen on TV. That was my first time saw a real helicopter and I could touch it.

I must said that I really enjoyed the Japanese life and culture and all I studied in these four weeks. But what I like the most was the people here I met in Osaka Medical College. In the first week, we went to the ESS club and made a lot of Japanese friends. We changed our FB address and Line and had dinner together that evening. After that, we made friends with other students in Osaka Medical College in this month and connected to each other with Line usually. In the last week, we went to Hieizan together and experienced the special heavy rain and heavy wind on the mountain but it was also fun.

At last, I wanted to say “thank you” to everyone in Osaka Medical College hospital because I really appreciate your



help. You took care of us from oversea and taught us many things about medicine or not about medicine. Thank you Prof. Hanafusa, Prof. Hayashi, Mr. Ogawa, Ms. Hisada, every friends and doctors in Osaka Medical College and Ms. Matsumoto the most. I was happy to meet all of you in this beautiful country, in this beautiful season, in this beautiful college, under the beautiful cherry-blossom.



<抄訳>

僕にとって今回の研修が初めての海外留学でした。台北医学大学の代表として行くのに大丈夫なのかと不安がありましたが、とにかくベストを尽くして、学んだことは全て母国に持ち帰るんだと自分自身に言い聞かせました。設立 80 年以上もある歴史のある大阪医科大学へ桜の季節に留学できる機会を頂くなって、とて

も幸運な事でした。



附属病院では毎日違う診療科に行かせてもらいました。外来では患者さんへの接し方を先生方を通して学びました。言葉はわからなくても視覚を通してそういったことは学べるものです。回診では様々な疾病の患者さんや、同じ病気にかかった人でも違う状態にある患者さんをたくさん見ました。患者さんの病歴や

状態、そして治療法に加えて、これからの治療計画をどうやって決めたか



など先生方は詳しく説明してくださいました。

台湾では消化器疾患のある患者さんにはいつも経鼻胃管を使うのですが、日本では胃管を使っていることに驚きました。帰国したら学友や先生方に是非伝えようと思いました。台湾ではめったにない難しい手術や3Dの腹腔鏡手術、またポータブルタイプの超音波検査器も見ることができました。

大学内のシミュレーションセンターでは最新機器があり、実技の練習ができたのがとても良かったです。腹腔鏡を使いながらの縫合や腰椎穿刺をしたり、超音波検査を実際に行ったり、聴診器で違う種類の心雑音を聴いたりしました。

中山国際センターは外部の医療機関を見学する機会も用意して下さっていました。高槻消防署に行った時、職員の方が災害時の人命救急のしくみを説明してくれました。三島救急医療センターでは40人しか患者の受け入れが可能でない規模なのに医療機器が非常に充実していたことと、最も重要だと思ったのは40人ほどの医師や医学生が搬送されてきた1人の患者さんについて

た事で、大変驚きました。現在においてはもちろん、将来においても台湾ではありえない光景だと思いました。ドラマの「コード・ブルー」を見ていたので日本の救急システム全体が消防署、救命救急診療、総合病院と網のようにつながっていてそれぞれが非常時救急において大切な役割を負っていることに気が付きました。大阪大学附属病院にも行く機会があって、テレビでしか知らなかった「ドクターヘリコプター」を見ることができました。本物のヘリを見るのがそもそも初めてで、ヘリコプターを触らせてもらいました。

勉強もさることながら、大阪医科大学でたくさんの友人ができたことが一番楽しく、最初の週に行ったESSクラブや、最後の週に行った比叡山(雨風が激しかったのですが)はとても楽しかったです。病院の先生方、中山国際センターのスタッフ、友だちになった大阪医科大学の学生さん達から医学に関することも医学以外のこともたくさん教わりました。美しい国へ美しい季節に訪れることができ、美しい大学の美しい桜の樹の下で皆さんに会ったことをとても幸せに思います。

④. 韓国カソリック大学

(韓国カソリック大学臨床実習派遣 学生4名)

国際交流推進の一環の韓国カソリック大学との交流協定に基づいて行われる臨床実習に、平成26年3月31日から4月26日まで、新6年生の文亜也子さん、上山晋也君、井塚正一郎君、市原慎也君の4名が参加しました。以下に各参加者の研修報告を掲載しています



韓国カソリック大学での臨床実習を終えて

文 亜也子 派遣時6年生

私は自分の英語に自信がないまま留学に突入したのですが、なんとか無事に留学を終えることができ、学ぶこともたくさんあった留学となりました。

日本と韓国は地理的にも近いし、人種的にも似ているので医学の面においてもほとんど一緒なんだろうなと思っていました。しかし、

実際に実習が始まり、臨床の場を見ると OMC では見たことがなかった手術であったり、放射線の読影用のコンピューターが発達すぎて驚いたり、毎日がとても新鮮なものに触れ合う機会に恵まれ、あっという間に4週間が過ぎてしまいました。

選択科は一応2科×2週間がスタンダードですが、私はわがままを聞いて頂いて、3科の見学をしました。実際に経験すると、1週間で1つの科は十分見学できた様に思います。

6年生になると、4月がこの海外研修で終わってしまい、残りの OMC での選択は2~3科しか選択できず、また抽選になるため、本当に興味がある科でも実習できないこともあるので、海外研修の時に本当に興味がある科を見学することをお勧めします。日本では見ることができないような疾患や手術も見学できるので、より興味が湧いたり、将来の進路を決めるのに役に立つ、とても良い機会だと思います。また、病院自体がとても巨大で綺麗で(韓国のドラマの撮影現場になっているらしい)、ドラマに出てきそうな病院で実習できるなんてもう二度とないと思います。

実習以外の日常生活においては、病院がとても良い立地条件にあるため、不便であったことが思い出せないほどです。食事にも困ったことはなかったです。ソウル市内はそんなに広くないのでガイドブックに載っているような観光スポットにも寮から簡単にに行けます。

想像していたよりは、実習が朝早くから始まり、夕方まで続く日が多く、最初の一週間は体が慣れるまで少し疲れてしまいましたが、まだ研修後の進路を決めきれいな私にとっては、興味のある科(将来の進路で迷っている科)を全て見ることができ、また優しい先生方から将来に役立つであろう沢山の知識を伝授していただき、とても有意義な実習となりました。

韓国では若い女性の外科医が多く、一応外科志望の私にとって、とても刺激的でした。放射線科にも沢山の女性医師が在籍していて、各科での女性の先生方の働きぶりを見学させていただきながら、自分の将来を考えてみたりと、日本では何かと慌ただしく余裕がなに日々を送っていたのですが、韓国での4週間は日本での日常から一歩離れ、将来についても考えられる貴重な時間となりました。

私はハングルの読みや簡単な韓国語は身につけていたのですが、韓国語と英語に悪戦苦闘しながらも生涯忘れることのない貴重な実習となりました。韓国で出会った心優しい先生方、友人たちとの再会を待ち望みながら、卒業試験、国試に向けてしっかり勉強したいと思います。5年生は実習や勉強でなにかと英語の勉強時間の確保が難しいかと思うので、この海外研修を視野に入れている下級生は積極的に医学英語を身につけると、より良い実習となるのではないかと思います。

このような素晴らしい経験をさせていただいて、自分なりに少し成長できたのではないかと感じています。ありがとうございました。

韓国カソリック大学での臨床実習を終えて

上山 晋也 派遣時6年生

私は3月31日から4月25日までの4週間、韓国のカソリック大学で病院実習をさせて頂きました。初めの2週間は脳神経外科を、残り2週間を産婦人科で、また夜間のみ ER で3日間実習を行いました。学生に間に留学、それも病院実習という機会は貴重であり多くの事を学びました。

脳神経外科では、カンファレンス、回診をした後、毎日手術を見学させて頂きました。脳疾患をはじめ、馴染みのない脊髄の疾患の手術を清潔の状態に入る事ができ、先生方に間近で教えて頂きました。韓国では一つの科に複数の教授が存在します。複数の教授が存在することで、より専門的な医療に取り組むことが出来ます。脳神経外科でも5人の教授が在籍し、それぞれの分野の手術を見学でき飽きる事は無かったです。また教授自身が多くの手術を執刀する事が多く、素早い手技には目を奪われました。特にカソリック大学には多くの手術室があり、毎日多くの手術を行っています。手術が終盤に差し掛かる頃には次の手術のために準備する様子は医師、看護師共に連携が取れている事も印象的でした。

産婦人科では毎朝の勉強会から始まり、回診、処置、手術と様々な事を体験させて頂きました。印象に残っているのは、産婦人科の実習の間に行われた先生による講義です。用いた教材は学生向けの教科書ではなく、当たり前のように医学英語が使われており、学生も内容を把握していました。学生と先生との口頭試問においても、英語でのコミュニケーションを容易に行っていました。英語を当然のように使いこなせている環境には驚きましたし、すでに世界に目を向けている姿勢には見習うべきものがありました。私自身も不明な点があれば先生に質問していましたが、英語をもっと使いこなせれば多くの情報を得る事ができたのではないかと自分の英語の拙さにもどかしさを感じました。

ERでは主にトリアージの現場や患者さんに対する処置の様子を見学しました。ER では walk-in、救急車と様々な患者さんが来ます。初めにレジデントのドクターがトリアージを行い、患者さんのレベルを 1~5 に分けます。トリアージレベルにより、その後の治療を受ける順番が異なります。印象的だったのは膝の痛みを訴える患者さんに対し、CT や X線を行わずそのまま帰した事です。トリアージレベルが 5(軽傷)とドクターが判断したため、何も行きませんでした。他の患者さんも待機しており、より重症な患者さんを優先させるのがトリアージであると改めて認識させられました。

またER実習においては、夜間にも関わらず学生がERの現場に滞在しており、患者さんの問診を聴取し、上級の医師に伝えていました。そこには学生という枠組みではなく、学生自身が医師としてのマインドを持ち積極的に動いている姿がありました。私自身、昨年度大阪医科大学で1年間病院実習を行いました。学生での実

習の一環という意識がありました。実習で受け持った患者さんに対して、自分が医師ならどのような検査・治療を行うかという視点で実習を行えば、もっと多くの事を学べたのではないかと韓国の学生の実習を見て思いました。

私が4週間を通じて印象的であった言葉を紹介します。「Don't hesitate!! Don't be afraid to ask a question!!」という言葉です。留学した当初、病院の規模の大きさや先生の多忙さ、学生の知識の豊富さに圧倒され、質問するのを躊躇していました。留学した1週目のオペの休憩中にレジデントの先生とお話する機会があり、上記の言葉を頂きました。私自身の迷いを振り切ってくれ、やれるだけの事をやってみようという気持ちになりました。拙い英語ではありますが、疑問に浮かんだ事を積極的に質問しました。また自ら教授に交渉し実習プログラムには無い ER での実習や、産婦人科でのオペ見学や様々な治療を見学する事ができ、病院実習がより一層充実したものになりました。自分から積極的に動く事の重要性や、受け身の姿勢では得られるものも少ないと大いに感じました。

この4週間の留学を通して、今後医師として活躍するには日本のみならず、世界に視野を広げていく必要があると改めて感じました。欧米に限定せずアジアの医療にも目を向け、アジアの各国が互いに交流を深め協力する事でアジアの医療はより進歩していくと思います。

実習終了後や休日には韓国の学生が観光地や食事に連れて行ってくれました。時間が経つにつれ交流が深くなり、最後には学生との別れが惜しかったです。生涯忘れる事のない楽しい思い出をたくさん作る事が出来ました。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を下さった花房教授、米田教授、ご支援して下さいました中山国際センター、PA会の皆様、留学生との交流を大いに深めて下さった林先生、心より御礼申し上げます。また韓国にて支えて下さったカソリック大学の学生、スタッフ、先生方には感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

カトリック大学ソウル聖母病院での臨床研修を終えて

井塚正一郎 (派遣時6年生)

ぼくはこの度、韓国カトリック大学のソウル聖母病院にて4月の4週間臨床実習研修に行かせていただきました。韓国への行くのは2回目でしたが、前回は旅行で4日間滞在しただけだったので、1ヶ月という長期間の韓国滞在は初めての経験でした。韓国に限らず、海外に1ヶ月滞在することが初めてでしたので、希望と不安の混じった心もちでの研修スタートとなりました。

さて、この1ヶ月を振り返ると、実にいろんなことが体験できました。前半の2週間は胸部外科、後半の2週間は成形外科(日本における形成外科)でお世話になりました。初めの胸部外科では主に手術の見学をしました。日本で胸部外科と言うと、心臓血管外

科が主ですが、韓国では呼吸器外科が主で、韓国の先生方とその違いについて話しをしてお互いに驚きました。韓国で初めて見学した手術は漏斗胸の手術でした。大阪医科大学では行われていない手術でしたので大変興味を持ちました。胸部の両側部に小さい穴を開け、胸部に留置する予め適切な形に変形させた幅2cmほどのバーを仰臥位にてU字に入れその後逆U時に翻転させるという手技でした。短時間で驚くほどきれいな胸郭が形成されました。その後は VATS(Video Assisted Thoracic Surgery)、肺血栓摘出術、CABG、弁置換術など毎日様々な手術を見学させていただきました。胸部外科では毎週金曜日に学生が教授の前でプレゼンテーションをするのですが、ぼくは留学生ということで課題はありませんでした。しかし、せっかくなので「ぼくもしよう!」と決意し、2週目の水曜日に「課題をください」とお願いし、『日本の心臓血管外科の今について』という課題をいただきました。金曜の夕方に胸部外科全員が集まるカンファレンスがあるので、それが始まる前に行うことになりました。それから必死に調べ、日本の心臓血管外科の現在についてまとめ、当日に臨みました。韓国語で挨拶をし、そこからは英語で発表しました。多くの教授の先生方の前でしたので非常に緊張しましたが、発表後「질문 있습니까?(質問はございますか?)」と聞くと先生方が笑ってくださったので安心しました。その後拍手もいただき、大変うれしく思いました。

次は成形外科での実習についてです。成形外科では美容整形が主として行われていると思いきや違いました。術後の形成や皮膚移植、先天性奇形の形成も行われておりました。しかし、そちらに関しては大阪医科大学でも行っていることなので韓国ならではの話を書きたいと思います。外来診療室に行ったときに一番驚いたものは、やはり、豊胸手術に使うインプラントです。触っていいですかと許可を取った上で触らせていただきました。驚愕でした。こんなものが入っているのかと思うと恐ろしいです(汗)。残念ながらその手術は見ることはできませんでしたが、そのインプラントを見せていただいただけで十分でした。手術では二重瞼形成を見学させていただきました。手術は局部麻酔で手術終了間際に患者の上体を起こし鏡で確認してもらっていました。術後納得の行かない患者さんが再手術されてることもありました。2週目の金曜日にはプレゼンテーションの課題を発表させていただきました。こちらは朝のカンファレンスでレジデントの先生方が毎日行っておられるのと同じような感じでしたので、胸部外科での発表の経験もあり、なんとかできました。最終日に成形外科の先生方からプレゼントをいただきました。これはなんと偉い先生の証である大学のロゴ入りの襟章なのですが、そうとは知らず成形外科の初日に、先生に「すごく素敵な襟章ですね。どちらで購入できますか?」と聞いたところ、「今度あげるよ」と言われていたものでした。これは宝物です。

このような感じで4週間の病院実習を無事終わりました。しかし、この留学でのぼくの目標は実習をしっかりとこなすことだけ

ではありませんでした。それは韓国の文化をよく学び、そして韓国の人達とたくさんのコミュニケーションをとり、友人、先輩たちと大切なつながりをもつことでした。

実習初日、胸部外科の月に1回の全体の会食があり、早くもそこで韓国でのマナーなどの文化に触れることができました。韓国では盃をともに交わすことは敬意を表します。「잔 드리겠습니다(盃にお酒を注がさせていただきます)」と告げて、自分のショットグラスに入ったソジュ(韓国の焼酎)をさっと飲みます。この時、目上の方じゃない方向を向いて飲むこともマナーです。そして飲んだ後さっと飲み口を拭き取り教授にグラスを渡し、ソジュを注ぎます。それから教授が飲んで下さいます。その後、グラスを返されソジュを注いでいただきます。本来ここでこちらがもう一度飲むのですが、その教授は「大丈夫」とおっしゃって下さいました。こういうやりとりをすることで打ち解け合うことができるそうです。このやりとりを韓国の学生に教えてもらい習得しました。このやりとりを先生にするといろんな先生方はとても喜んで下さいました。お酒の力は素晴らしいですね。日本では主に下の者が飲むだけという印象を受けますが、このやりとりでは上の方も飲むのでいいですね。教授にはいろんな部下の先生方が挨拶をしに来られるので、教授はたくさんの盃をあげてらっしゃいました。すごいいいと思いました。

そして、ぼくは、もともと韓国に行くまえに韓国語を勉強していました。これは、異国の地に行くということは、その国の言語を勉強していくことがぼくなりマナーであると考えているからです。もちろんそれは韓国での生活で役に立ちます。なぜならコミュニケーションには言語が必要だからです。ぼく的にはアジア人同士が英語で会話をするという滑稽な状況が嫌いです。ほとんどの人が学習している共通の言語が英語だからしかたないことではありますが、ぼくはできる限り自分で勉強してきた韓国語を話す努力をしました。時間があれば向こうの学生に韓国語を教えるもらっていました。日本で外国人が日本語を話していると、何かちょっと嬉しくなりますよね。ぼくはそれを日本で実感していました。韓国の人たちも同様にぼくが韓国語をがんばって話していると、すごく嬉しそうにしてくれました。それだけでなく「君が韓国語をしゃべっていると誰も君が日本人であることに気づかないよ」と褒めてくれる人がたくさんいた



ので非常に嬉しく思いました。実際のところ病院においては、医学単語とかはほとんど韓国語では知らなかったのが英語での会話が主体でしたが、いろんな飲み会で先生がたとお話ししていただき「将来ぜひ韓国において、病院を紹介するから」と言っていただけたりしました。

ぼくの医学人生においてこの留学の体験は欠かすことのできないものとなりました。韓国での学生や先生とのつながりは一生の宝物です。留学させていただきまして、本当によかったです。

この臨床実習を無事、実りあるものとして終えることができたのは、この研修に参加するという機会をくださった大阪医科大学および中山国際交流センターのみなさま、奨学金をくださったPA会、留学中も細かい心遣いをしてくださった松本さん、現地でお世話をしてくださったソウル聖母病院の先生方やカトリック大学の学生のみなさん、そして、一緒に研修に参加した大阪医科大学の市原くん、上山くん、文さんのおかげです。この研修に関わっているみなさまには感謝しきれません。

本当にありがとうございました。

서울성모병원 여러분 4 주간 하나부터 열까지
신세를 많이 졌습니다.

또 한국에 가서 의학을 배우고 싶고 있습니다.

훌륭한 외과 의사가 된다고 약속하겠습니다.

만날 날을 기대하고 있습니다.

정말 감사합니다.

大阪医科大学6年 井塚正一郎

오사카의대 6년 이즈카 쇼이치로 (쇼)

韓国カソリック大学で臨床実習を終えて

市原慎也 派遣時6年生

僕は今回、韓国カソリック大学の4週間の臨床実習に参加させていただきました。僕自身、留学は三回目だったのですが、海外で臨床実習をするのはこれが初めてでした。また韓国へ訪れたことも無かったので、出発する前は期待と不安が入り混じっていました。

実習では最初の2週間は Hepatology、後半2週間は Plastic Surgery を見学させていただきました。Hepatology での最初の1週間は韓国の学生が一人もいなく、見学している学生は僕だけだったのですが、Yoon 教授や Bae 教授、Nam 先生をはじめとしたその他の先生方が本当に優しくご指導して下さいました。カンファレンスは、僕一人のために極力英語で行ってくださり、回診中も僕の質問に優しく答えて下さいました。学生が他にいなくて寂しいと思ってくださったのか、お昼ご飯も毎日先生方が一緒に食べて下さいました。

後半の Plastic Surgery ではたくさんの手術を見学させていただき

ました。手術室が 30 室近くあり、働いているスタッフの方々の数も非常に多かったです。そのためか一日にすごい数の手術が行われていて、2 週間で色んな種類の手術を見学することが出来ました。最終週の金曜日には、先生方の前で英語の Case presentation をすることができ、とても達成感のある締めくくりでした。

学生は非常に勤勉で、皆とても流暢に英語を話しました。Hepatology の 2 週目を一緒に回った男子学生は、教授や生徒数人の前で行う課題発表を、僕のために英語で行ってくれました。「今日は留学生の友達がいるので、英語でプレゼンテーションをしたいと思います。」という一言から始まり、発表が終わってから僕に対して「酷いプレゼンでゴメンね。これが僕の人生最初で最後の英語のプレゼンテーションだよ。」と苦笑いする彼の優しさが本当にただただ嬉しかったです。

韓国と日本は距離も近く、ライフスタイルも似ているのにも関わらず、医学の面でいくつか相違点を見つけることが出来ました。一例をあげると、日本では C 型肝炎が肝細胞癌の主な原因なのですが、韓国では B 型肝炎が主な原因です。僕はこの事実を知った時、とても驚きました。また肝細胞癌は非常に画像的診断が重要であり、週に 2 回放射線の先生方との合同カンファレンスがありました。韓国では日本と違って非常に放射線的な診断を重視しているように思えました。見学させていただいた超音波や肝生検、画像読解や手術など、多数の点で日本の医療と韓国の医療を比較することが出来ました。

実習以外の時間は観光に出かけたり外に美味しい物を食べるに行ったりしました。Seoul St. Mary's hospital のある高速ターミナル駅は本当に都会で、その周辺にもたくさんレストランがありますし、少し地下鉄に乗れば江南や明洞にもすぐに行くことが出来ました。韓国カソリック大学には 8 つの関連病院があるそうで、学生たちは Seoul の病院だけでなく仁川や大田といった離れた関連病院へも実習に行かなければなりません。どの週にどの地域の病院で実習かは、ランダムに決まってしまうようです。OMC への Exchange program に参加していた Choi 君、Kang 君、Lee 君、Youme さんの 4 人は、Seoul 以外の病院で実習している時も、実習が終わってから Seoul まで来て僕たちを観光に連れて行ってくれました。

僕たちが韓国に到着した初日も、Kang 君と Lee 君が Gimpo 空港まで迎えに来てくれました。彼らは僕らに T money という日本でいう PiTaPa や ICOCA のようなチャージ型の定期にお金を入れて与えてくれました。T money が無いと本当に不便なのでとても助かりました。Youme さんは自宅に僕らを招いて、家族を紹介してくれました。Youme さんのお母様が韓国の家庭料理をたくさん作って僕らを出迎えて下さいました。作ってくださった料理すべて、とても美味しく本当に嬉しかったです。

サッカー部の部室にお邪魔させてもらってテレビゲームで対戦をしたこと、漢江を眺めながらシートの上に座ってチキンやスンデや

ラッポッキを食べたこと、韓国の伝統的な衣装を着て写真を撮ったこと、Lee 君と食べたジャージャー麺、韓国学生 4 人と教授の先生方とで飲みに行ったこと、Choi 君と Youme さんが Lotte world に連れて行ってくれたこと。その他にも昌徳宮、南山タワー、ソルロンタン、コプチャン、北村韓屋村、4 人と過ごした全てがとてもいい思い出です。

その中でも一番印象に残っているのがフェアウェルパーティーです。4 人が僕らのために、最終週の金曜日にたくさんのクラスメートを誘って盛大なフェアウェルパーティーを開いてくれました。二次会では途中参加してくれた韓国学生からのアイスクーキ、そして Choi 君、Kang 君、Lee 君、Youme さんからアルバムと手紙のサプライズプレゼントまで頂きました。日本人学生 4 人とも感極まって号泣してしまったのは今思い返すと恥ずかしいですが、愛情のたくさん詰まったプレゼントに感激しました。一生の宝物にします。

四週間という短い期間でしたが本当に毎日が新しいことの発見の連続で、気が付いたらあつという間に時間が過ぎてしまっていました。勉強に関しても内面的にもたくさんの事が学べる充実した 4 週間でした。初めての韓国での滞在は、Choi 君、Kang 君、Lee 君、Youme さん、そしてその他の僕が出会った全ての温かい現地の人々のおかげで最高の思い出となりました。彼ら無しではこのような素晴らしい 4 週間は存在しえなかったと思います。心の底から感謝の気持ちでいっぱいです。

韓国で学んだこと、与えて頂いたもの、それは形になっているものも形になっていないものも。それらを自分なりにゆっくり時間をかけて考え、これから、お世話になった韓国の方々、後輩やたくさんの人に何らかの形で還元できたいと思います。

このような機会を与えて下さった花房教授や林先生をはじめとした先生方、中山交流センターのスタッフの皆さんや、留学プログラムに関わって下さっている全ての方々に深くお礼を申し上げたいと思います。本当にどうもありがとうございました。

(韓国カソリック大学臨床研修受入 学生 4 名)

国際交流推進の一環の韓国カソリック大学との相互交流協定に基づいて、平成 27 年 2 月 16 日から 3 月 20 日まで 4 週間にわたり医学部 6 年生 4 名、Choi young min さん、Kim Kyung Ahn 君、Park Joon young 君、Kim Jong Woan 君が、本学附属病院、三島救命救急センター、国立循環器病研究センターなどで研修を受けました。

以下に各参加者の研修報告を掲載しています

< Japan, the country of kind friends >

Choi young-min, 4th grade

School of medicine, Catholic University of Korea, South Korea
Before we came here, I got a mail from OMC which said 'Korean students will take scholarship from Japan.' I was wonder whether

I have qualification for such a favor. And now I know, this was the way they greet a guest. I can feel warm heart from Japanese everyday after I arrived here. I cannot write down how many kind Japanese I met, because all of Japanese so kind to me than I



expected.

The first day, Miss Matsumoto who works for Nakayama International Center of Osaka Medical College came to the limousine bus station to meet and guide to the apartment where we stay for 5 weeks. We, four Korean students, were treated by her with kushikatsu which is traditional Japanese food. And when we arrived our apartment, we found there are hand-written cards and gifts. She put some fruits and beverages in the refrigerator. The words she wrote down on the cards were so touching. This is my first impression of Japan.

I was surprised from the first day of exchange student. Because the professor of Osaka Medical College introduced us to the campus in person. Such a favor is not common in Korea. And OMC students threw us a welcome party. We didn't expect we could meet such lots of Japanese students. We can taste pizza, matcha cookie, rice, curry, mentaiko, cracker and cheese. Ms. Matsumoto prepared all food alone including dried laver which is Korean food. We were surprised by all the delicious food and her effort. All of OMC students who came to the party were so fluent in speaking English and polite to all of us. We exchanged our IDs and LINE app, and they informed us how to go to Kyoto, Arima-onsen, Umeda and so on.

The curriculum of OMC was truly instructive. We can visit every other department everyday. Through the experience in every other department and meeting many professors, we can understand the difference and equivalence of medical systems between two countries. Professors made time for only 4 Korean

students and gave excellent lectures to us everyday. We could practice lumbar puncture with a medical mannequin at the neurology department and talk with a psychiatry patient with a professor's translation. I know how professors are busy. So I was feeling sorry to interrupt their valuable time and appreciate their kindness.



OMC also arranged the visiting program to Mishima emergency care unit, Takatsukishi fire station center, Osaka University hospital, National Center

for Geriatrics and Gerontology (NCGG) and so on. These courses to various medical places allow us to meet many Japanese doctors and have a chance to get detailed information about the Japanese medical system. Surprisingly, every doctor, nurse, therapist, and every other person at every place so kind and willing to explain about their patients. At the Mishima emergency care unit, we can see the passion of doctors not to give up on severe patients. They prepared perfect facilities and manpowers for 24 hours. I was surprised the budget to support treatment of multi-trauma patients came from Takatsuki City and government. I was astonished by the same reason when I see the 'Dr. Heli'. We could feel firm faith of Japan government to go together with elderly people at NCGG.

One of the Japanese professors said to us "Even though there are some troubles between two countries, we can be friends at an individual level, isn't it?" I was so touched by the words, and totally opened my heart to Japan. OMC students teach us karate and kendo, and guide us to Mt. Koya and Tsuyunotenjin Shrine and sushi restaurant. And Professor Hayashi invited us to Kyoto lantern festival. I heard a professor operated emergency surgery and came to us right after the surgery. OMC students and professors treated us as special guests. The conversation with them was extremely enjoyable.

I cannot describe my thankful mind to them. I'm sure this thankful mind is unforgettable, even after I return to Seoul. One of my wishes is to give back my thankful mind to them, after becoming a doctor. I want to say "Arigato-gojzaimas" to Osaka Medical College and the institute which awarded a scholarship.

5 Weeks in Osaka Medical College

Kyungahn Kim

6th year student

The Catholic University of Korea, School of Medicine

When I first arrived in Kansai airport, more than a month ago, I did not know how comfortable I would be here in Osaka Medical College. I was alone in an unfamiliar environment, and most importantly, could not speak any Japanese.

However, my apprehension quickly disappeared in the following days. The attention given to us by Nakayama center and especially Ms. Matsumoto was unbelievable. Not only was each day's schedule arranged a month in advance, but Ms. Matsumoto personally contacted each department at the start of each day to make sure that we did not become "maigo". One distinctive feature of this program would be the fact that we rotated a different department every day. This is not without its demerits – one day is after all very short, and one cannot expect to learn much in an academic sense. However, looking back, I cannot but agree that this arrangement was the best for us. Since we do not know enough Japanese to communicate with the patients or to read the medical records, it would really not matter whether we spent one or seven days in a given department, because we would not be able to participate in the ward rounds or outpatient consultations as we would back home.

So each day we visited a different department, and these diverse experiences permitted us to draw a general picture about the medical system in Japan. Nakayama center also arranged visits outside the hospital – Mishima critical care center, "Doctor Heli" in Osaka University, and the National Center for Geriatrics in Nagoya, to name a few, and these tours were very helpful.

One of the good things we saw in OMC hospital was that the doctors were in general more attentive to the patient's needs than back home in our hospital. The reason for this is probably because OMC hospital and Japanese hospitals in general have more doctors than Korean hospitals, and therefore have only a few patients to attend to. So in OMC the interns and residents did not look overworked, and as a consequence could pay more attention to the patients. As I will be entering internship in the following year, this is one thing I much envy about the Japanese medical system.

Some of the most memorable visits involved visits to the basic medical science departments. In Korea, MDs who do basic research are quite rare, since doctors are very busy with clinical duties, and also because the remuneration is not considered adequate. Owing to this, most Korean medical students are not interested in a career that involves research. So before coming

here, I had never visited a medical school laboratory, although I did have some experience in physics, my major at university.

Here in OMC, in the departments of anatomy, pharmacology, and physiology, we had a chance to experience many different research methods and subjects: animal experiments for ischemic kidney models, florescent microscopy, and knockout zebrafish, to name a few. A typical medical article on the other hand, dealing with some clinical question, is usually a randomized control study – try different treatment methods on two identical groups, and see if there are any differences between the two at the end of treatment. It is useful in determining the most adequate treatment method for the patient, but after all, does not explain why such a response occurs, and is not very interesting. So the experience here was a great experience for me, and even though I will be a practicing doctor, most likely in internal medicine, I feel that I would like to do some basic research myself.

Research in Japan is very strong, as one can see by the example of Dr. Shinya Yamanaka, who won the Nobel prize in physiology by IPS (induced pluripotent stem cells). It was also a nice stimulant to be in the same research environment which made such achievements possible.

Our experiences in Japan were not only restricted to academic pursuits. Ms. Matsumoto arranged many different activities for us, such as visiting the school Kendo and Karate clubs, taking part in a traditional Japanese tea party, and even visiting Koyasan. Through these activities, we could experience many aspects of Japanese culture. In addition, the government scholarship was a great help in our enjoyment of Japanese cuisine and the Osaka culture of "Kui Daore". Almost every day we tried some new restaurant, and in most cases, it was a pleasant experience. One word should be said for the kindness and attention shown to us by everyone we met during the course of five weeks. Every day when we visited a department, one of the staff put down his/her duties for almost the entire day and took us around. We are very grateful and "sumimasen" for this.

Also, the OMC students were very friendly to us and were eager to help us whenever the occasion arose. If it had not been for them, we might have felt lonely in this unfamiliar environment with few people to talk to. They spent a lot of time each week going out with us, and we are very thankful for all the wonderful memories.

And last of all, I would like to thank Nakayama center and Ms. Matsumoto again for taking such great pains to arrange our daily

schedules, and also to make us feel comfortable. We will never forget our gratitude.



Wonderful memories in OMC

Joon Young Park
4th grade student
College of Medicine
Catholic University of Korea

I believe that OMC was the best choice I have ever made. In my college, we have to choose the elective course for 6 weeks when we start the last grade, and OMC is one of the friendship school of our school. But I have no idea not only about the course but also about the school at that time. So I asked to Mr. Kang who is my senior, because he was the exchange student of OMC in last year. He strongly recommended me to go to OMC with some information along with this program. It sounds interesting than any other choice, so I decided. All aspects are interesting but the most is Japanese food.

I had traveled Japan about three times before, including Osaka, because I really love to know about Japanese cultures, foods, and life, etc. I love Japanese foods, especially 'Ra-men'. In Korea, there are also lots of instant Ra-mens but it tastes very different from Japan. So in this time I visited many restaurants in this area to have a Ramen. Also I love the most of Japanese foods & drinks, I have a nice time with OMC students. For example we had Takoyaki party, as known as Tako-Pa in Japanese, we enjoyed to cook Takoyaki and eat together. It was really exciting experience, so maybe I should buy a plate for cooking Takoyaki when I go back to Korea. We also enjoyed lots of restaurants together, such as Fugu (フグ), Syojin Ryori (精進料理). Thanks to the OMC friends, we could went to the old temples, shrines, and museums. They explained us about the history of Japan, and

stories related with. It was very interesting.

Nakayama Center in OMC readily supports us in all aspects, so we don't feel any discomfort during the time in Japan. We are welcomed and provided a comfortable place nearby the hospital. Also during the rotation, we could prepare well because Ms. Matsumoto, who takes charge of the exchange students, she send lots of information about the rotation before we go there, so we could prepare well beforehand. Also we were able to have some good chances to experience Japanese culture closely, such as 'Kimono wearing'.



In the hospital, we rotated every other departments in every other days. So we could experience various of departments of hospital, even includes some local centers like Mishima Critical care center. It was surprising because I have never seen this kind of care system in Korea. There is good cooperation system with the fire station equipped with well-designed-ambulance. So if the patients in severe situation, they can dispatch very quickly and effectively. Also in the center, they have so many doctors with different majors related with critical care of patients, and there is a big room for the critical patient, so they easily apply and treat the patient all in the same time. It was kind of all-in-one team. Maybe it costs a lot, but it should be helpful for acute patients care. And we had a chance to take a doctor helicopter.

Also I have a chance to go to several departments of OMC. What I felt so impressive and influenced was the department of pediatric orthopedics. At that time I went to outpatient clinic, it was different from Korea. Doctor has enough time to see patient, so he explains kindly about patient's condition. And patients are all children, so he draw a character of popular comics to all of his patient. I learn what is a good relationship between doctor and patient from that outpatient clinic.

As time goes fast, now I'm back to normal. But I can't forget this

memory and I believe that this experience could help me in some way in the future. Making a good relationship with OMC people was the most valuable thing to me, so it should be good for my future life as a doctor. I would like to interact in worldwide with my friends who are doctors, it should be grateful. So I hope to have these wonderful memories forever, and hope to see all of OMC friends again. Also I would like to appreciate to all the people those who are related with this program, especially for giving great chance to experience the Japan. Thank you.

5 weeks in Japan as an exchange student.

Kim, Jong-Woan
6th grade student

Catholic university of Korea, School of medicine

I am a 4th grade student in Catholic University of Korea, school of medicine. I entered as a graduate school, so my grade corresponds to the 6th grade of medical school in Japan. In 4th grade, every student can choose anywhere one wants for an elective course, up to 6 weeks. I chose Osaka Medical College (OMC) for several reasons.

First, I wanted to go abroad for international experience. Since Japan is a very close country -geographically, genetically and culturally- many diseases have similar prevalence. I always wanted to "see" what the next door country do to treat patients. In addition, Japan is considered to have an advanced technology in medicine. Some of the guidelines we use is from Japan, and also many precise machines we use in medicine are made in Japan.

Also my preference for Japanese culture, including food, manga, etc.

For these reasons, I thought that this experience would be a great opportunity for myself to be an global-minded doctor. Considering the reasons I chose Japan, the five weeks in OMC was such a great experience. I had a good time learning Japan's medicine and also Japanese culture. OMC prepared a nice curriculum for me and my colleagues. The curriculum included every other department in every other day. I went to various departments from fundamental medicine to clinical medicine. Also inside of the curriculum, I participated in many departments and many facilities beside OMC. I could learn what other doctors are doing. I could experience the advanced medicine in Japan. Outside facilities I visited Mishima critical care center and Central fire station in Takatsuki-shi, National cardiovascular center in Osaka, National center for geriatrics and gerontology in Nagoya.

These were all a great chance for me and I had some inspiration from it. Sometime in the future, these experiences would be a great help to make some changes in the Korean medical society. I had some great experience with OMC students also. They were very kind to me and we went many places in Kansai area, Kyoto, Osaka, and Koyasan. Some of them invited me to their club activities, so I could experience many Japanese culture like Kendo, Sado. Also I participated in a Takoyaki-party, Takopa, which was a distinct culture of Kansai area.

Other than OMC students, many doctors were very kind and friendly. They said they had a very thankful experience in the past from Koreans and they were especially kind to Korean people.

With these two things, I've decided that I would behave very kind, friendly and thankful to Japanese people I meet in the future.

As I look backwards this whole program in Japan, I am very satisfied that I chose Japan and OMC. If I had chance to go back to the past, I'll definitely choose Japan and OMC again.

This 5 week program will last long in my memory.

Thank You OMC,

Thank You Japan.

(韓国カソリック大学臨床実習派遣 学生2名)

国際交流推進の一環の韓国カソリック大学との交流協定に基づいて行われる臨床実習に、平成27年3月22日から3月30日まで5年生の森田英男君、中尾多佳子さんの2名を派遣しました。以下、2名の報告書を掲載しています。



韓国カソリック大学附属病院での臨床実習を終えて

(派遣時5年生) 森田英男

私は、韓国カソリック大学に実習のため1週間ほど滞り、Orthopedics (整形外科) を選択させて頂きました。私の両方の祖父祖母はともに韓国から日本に渡ってき、私自身も国籍は韓国である在日韓国人3世です。昔から韓国の文化や言葉には親しみがあ

り、また親戚が韓国済州島に現在も暮らしている状態で、韓国には関心を持っていました。そんな中、この韓国カソリック大学への国際交流の実習の機会があると知り、興味を持っている整形外科の実習を韓国という地で勉強したいという思いから、今回の実習に参加させて頂きました。

整形外科はまず朝7時の勉強会から始まります。レジデントの先生が日替わりで担当することになっています。先生の話はハンゲルが多かったですが、レジュメは全て医学英語でした。私はハンゲルは読めるのですが、聞き取りは全くついていけなく、せめてレジュメの医学英語にはついて行こうと常に辞書を引き、単語を調べていました。

8時過ぎに教授の回診についていきます。私の担当をしていただいたチオン教授は手と腫瘍部門専門で、それらの患者さんの病棟の部屋まで毎日訪問していました。

午前と午後でそれぞれ診察かオペに行きます。診察は教授の横で立って一緒に患者さんを診ます。先生方は患者さんと話すときは基本ハンゲルですが、疾患名や医療系の用語は完璧に医学英語を用いています。患者さんが去った後に余裕があれば、教授から後で説明していただくこともあります。

その後昼ご飯を食堂でさっさと食べ、次はさっそくオペ室に行きます。オペ室では5日間で25症例も見学させていただきました。Orthopedicsでは肩・膝・足首・手・脊髄・腫瘍など多くの部門があり、肩以外のすべての症例を見学させていただきました。膝や足首などはかなり小さな範囲でのオペであるために遠くから見学するだけでしたが、手・腫瘍・脊髄部門のオペでは手術時手洗い(Surgical Scrub)を行いガウンと手袋を装着して、実際にインターンの先生と同様にオペに参加させて頂きました。日本からの留学生が珍しいようで、特にドクターの方は英語で話しかけてくれました。僕はまだ病院実習を経験したことがなく、初の実習だったわけですが、オペ室は緊張感のある特有の空間であり、先生方のパワーに圧倒されました。オペは1時間の短いものから長いものでは10時間におよぶものまであり、先生方は毎日のようにこなされています。

僕の見た疾患のオペは、ガングリオン(Ganglion)、手根管症候群(GTS)、ばね指(trigger finger disorder)、大腿骨の人工股関節置換術(THRA)、大腿部の血腫除去術(Hematoma removal)、アキレス腱断裂、鎖骨の障害(bony lesion clavicle)、骨軟骨種(Osteochondroma)、ユーイング肉腫(Ewing sarcoma)、脊椎側弯症(Scoliosis)、脊柱管狭窄症(Spinal Stenosis)など、多くの症例を真近で見ることができ、非常に有意義な経験をさせて頂きました。

私は大体19時か20時には実習を終え、部屋に戻りましたが、レジデントの先生は翌朝の5時まで仕事をされており2時間睡眠で7時からの勉強会に参加されていたのにはとても驚きました。チオン教授のオペの日はオペ後に皆さんと食事に行くのが恒例だそうで、私も参加させて頂きました。その日はお酒を軽たしなむ程度で、

ご飯を食べてまた仕事に戻られていました。

本学1~4年で行う医学英語の授業を軽視している人が多いと思いますが、非常に役に立ちます。それらにでてくる単語は常識的に用いられ、さらに応用が必要です。私は診察で何回も聞いた単語や疾患名はその場でメモをとり、部屋に戻った時に全部調べていました。これは外国語の日常用語においても重要だと思います。ただ聞いているだけではなく、分からない単語をピックアップして後から調べないと、ずっと分からないままで上達しない気がします。

今回韓国カソリック大学という海外の病院で実習をさせて頂くことで、日本を外から客観的に見つめることができたのではないかと思います。同じ日本の中には、あらゆる出来事が(悪いこと、良いことも含めて)常識だと錯覚してしまうのではと感じます。私はまだ日本の病院での実習を経験したことはないのですが、医学英語という意味では間違いなく韓国に劣っています。今後さらにグローバル化されていく時代において、医学英語は必須であると考えます。先生方からもっと学生時に英語を勉強していくべきだったという話をよく聞いていたのですが、その意味が少し分かってきたように思いました。これからはその点をさらに意識しながら勉強を進めていきたいと考えています。

今回私にこのような貴重な経験をさせていただいた花房先生、米田先生、松本さんをはじめとして中山国際交流センターの皆様には感謝しております。また韓国カソリック大学で暖かく迎えてくださったチオン教授、シン助教授、Orthopedicsの関係者の皆様、韓国カソリック大学留学生の皆様、一緒に留学に行った同回生の中尾さん、お世話になりました。本当にありがとうございました。

韓国カソリック大学附属病院での臨床実習を終えて

(派遣時4年生) 中尾 多佳子

2015年の春に1週間韓国のカソリック大学の病院実習に参加しました。

今回で3度目の医学留学となったのですが、病院実習に参加したのは初めてでした。1週間という短い期間であったということもあり、形成外科だけを見て回り、当時4回生であったため、見学を主に形成外科学を学ばせて頂きました。

この実習から多くのことを学ぶことができました。朝からカンファレンス、回診、外来での教授の問診、そして手術。これが大まかな1日のスケジュールです。毎日が違い、特に韓国では形成外科での症例数が多いということから、短い間だったにもかかわらず、多くの疾患を診ることができました。美容目的で受診する患者さんや乳癌で切除した乳房の再建など、症例が多彩だったのが印象的でした。まだポリクリ前であったということもあり、日本の病院、形成外科と比較することができなかったことが残念に思われました。これから日本の形成について学び、韓国で見たことと照らし合わせ、

学びを深めていきたいと思えます。

また、コミュニケーションの重要性にも気づかされました。海外の、かつ、ネイティブでない教授や先生方と英語で意思疎通を上手にできるのだろうか。これが実習直前の一番の不安の種でした。練習していったほんの少しの韓国語での自己紹介、そして英語での会話。しかし、どの言語であっても、真摯な気持ちや誠意をもってすれば、必ず気持ちは伝わるのだと実感しました。

さらに、忙しいにもかかわらず、わざわざ時間を割いてもてなしてくれた、Youngminさん、Joonyoung君、Jongwoan君、Kyunghan君、彼らの後輩たち、そして現地であった方々のおかげで濃密ながらも素晴らしい1週間となりました。韓国での思い出は忘れることのできない一生の宝物です。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった、花房教授や先生方、中山交流センターのスタッフの皆様、留学プログラムに関わってくださっているすべての方々に深くお礼を申し上げたいと思えます。本当に有難うございました。

⑤. アムール医科アカデミー

(アムール医科アカデミー学生短期実習派遣 学生3名)

平成26年7月25日から8月9日まで海外交流協定締結先であるロシア・アムール医科アカデミーに5年生の河井淳一君、3年生の金本帝和君、荘子万能君の3名を派遣した。

以下に3名の報告書を掲載します。



ロシア・アムール医科アカデミー研修を終えて

河合 淳一(派遣時5年生)

7月25日から8月9日までの約2週間、ロシアアムールアカデミーにて研修をさせて頂きました。今まで、なかなか足を踏み入れることがない国であり、また初めての海外での医学研修のため行く前は、不安が多々ありましたが、事前にしっかりと準備をし、現地ではアムール医科アカデミーの先生や学生が面倒をみて下さって、とても充実したよい実習を行うことができました。

今回の研修の目的は、日本とロシアの医療の違いを見出し、そ

れぞれの良い点を見つけることでした。まず、とても驚いたことはロシアの教育システムです。ロシアも日本と同じように高校を進学して大学に入学するのですが、2年生や3年生の時期から看護師として授業後に病棟で働くそうです。看護師として働きながら、実臨床での投薬や患者さんに対するメンタルケアなど我々が、5、6回生ないしは研修医で学ぶ知識も前倒しで学んでいるそうです。そのため、26、27歳くらいの若い時期から一人前の外科医として病棟で活躍しているそうです。次に、病室での雰囲気です。ロシアでも日本と同様に1部屋に対して、4人または3人の患者さんが入室しているのですが、患者さん同士のコミュニケーションが活発であると感じました。日本のようにベッドの間がカーテンで仕切られておらず、患者さん同士が顔を合わせて、お互いに病気の相談や不安を分かち合いながら、時に雑談や情報交換をしながら入院されている姿を見かけました。さらに驚いたことは、遠隔地での医療対策についてです。アムール州だけで、ドイツと同じくらいの面積があるそうです。交通機関の発達も乏しく、冬は陸路も凍結するため、日本のように容易く転院などを行うことが困難な状況です。そのため、地方の病院はアムール医科アカデミーのような大きな病院へ患者さんの治療方針などを週に2、3回定期的にテレビ電話にて相談しているそうです。相談しながら、地方の病院も治療計画を学び今後活かしているそうです。



実習を通して、英語の語学力も向上しました。現地では我々の訪問にかなり注目を浴び、4回テレビや雑誌などのインタビューを受ける機会がありました。受け答えはすべて英語で、日本の医療情勢やその詳細など細かく聞かれる場面もあり、その対応をするうちに自分自身の語学力も知らず知らずに向上しました。また、実習では先生方から日本の場合はどうなのか？などの質問がどの科を回っても聞かれることが多く、公衆衛生の知識が必要でした。そこから、日本とロシアの公衆衛生的な面から医療をディスカッションする場面が多々あり、それも私にとって貴重な経験となりました。

休日にはロシアのご家庭にお邪魔して、屋外でロシアの伝統的な家庭料理や、サウナ、ロシアンビリヤードを楽しんだりしました。また、アカデミーの学生とロシアの自然の土地へ行き、川に入った

り、BBQ をしたり、プールやサウナに入ったりして、とてもよい時間を過ごすことができました。ロシアの地で新しくできた友情は一生の宝となりました。帰国後もメッセージのやり取りを行っています。いつか将来、どこか海外の病院で一緒に働けたら、これ以上ない幸せだと思います。

最後になりましたが、このような貴重な経験を下さりました花房先生をはじめ大学の先生方や中山センターの職員の方々に心からお礼申し上げます。また、現地で我々のお世話を頂いた、ポロディン教授をはじめアカデミーの先生方、学生の皆様にも厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

ロシア・アムール医科アカデミーでの臨床実習を終えて

金本帝和(派遣時3年生)

ロシアでの胸躍る日々はあっという間に過ぎてしまいました。

ロシアへ到着するとすぐ、アムール医科アカデミーの学生・卒業生たちが温かく出迎えてくれました。2週間私たちの付添・準備など大変だったと思いますが、本当によくしていただきました。

臨床研修では、先輩方のおっしゃっていたように、身体診察を中心に指導いただきました。内科ではALL・CLLによる肝脾腫の患者さんの触診をさせていただき、また、産科では木製の胎児心音聴診器での聴診も体験させていただきました。身体診察以外には外科でのやけど患者の多さに圧倒されました。ロシアでは全身に及ぶ凍傷患者が多く、腱が剥き出しになっている患者さんもいらっしゃいました。あの、見たくないものから目を背けられない、蛇に睨まれたような、頭の中が痺れる感覚は一生忘れないでしょう。



文化体験では、まず日本文化センターへ行き、ロシアの方から侍や反物・着物などの日本文化を学びました。アムール州立博物館はアムールの天然記念動物の標本や伝統文化・中国との交流の歴史についてなど興味深い展示ばかりでとても楽しく、また、ゼア川での寒中水泳。他にも、見渡す限りの草原や湿地・シベリア鉄道で友人と語り合った夜は私の宝物になりました。

人種こそ違いますが、食事での配慮の仕方・会話中に外す視線

など、ロシア人のしぐさは日本人のそれにとっても近く、その奇妙な違和感と懐かしさに、私は日本でのことを再び考えさせられました。

ロシアでの2週間を思うと、日本に帰った今でも心臓が波うちます。ポロディン教授をはじめとした教授方・アムール医科アカデミーの友人たちとのかけがえのない出会いに感謝します。国際交流関係者の皆様ありがとうございました。この研修が続くことを祈っています。

アムール医科アカデミー派遣感想文

莊子万能(派遣時3年生)

韓国の仁川空港から乗り継ぎでハバロフスク空港に着くと、町並みや行き交う人は普段目にするものではないものですが、道路には見慣れた日本車(中古車)しか走っていないと、何だか変な感じになりながら、もう目的地に着いたと思い込んでいると、何やらシベリア鉄道に乗って片道14時間とことごとく行くのだと言われ、なんのこっちゃ、と思いながら、ロシアはアムール州の州都ブラゴベシチェンスク市にあるアムール医科アカデミーにて、夏休み期間の2週間、研修させていただきました。

とりあえず結論から申しますと、あまりに異世界でただただ「違い」に圧倒されてきました。僕がロシアでどこに行ったの？と聞かれるとき、日本人がロシアで知ってる都市といえば、モスクワとかサンクトペテルブルクくらいですから、そういう大都市ではないけど、県庁がある地方都市、例えば日本でいう松山市みたいなところに行きましたよ、と答えると相手も僕も何となく納得するのですが、結局どういうところだったのか？という質問には依然として首を傾げざるを得ないということが本音です。そんなこんなでこの地は非常にダイープな世界でして、別に京都みたいな観光都市でもありませんから、よそ行きではなく、むしろとても生活感が溢れている都市だと感じました。「違い」といっても自由の女神、凱旋門やナイアガラの滝があるかどうかという類いの「違い」ではなく、生活に根ざした違い、ちょっとした違いなのですが、根が深い分却って大きな隔たりを感じました。ですから、これこれの違い、とかつて総論的にまとめられるものではなく、極めて各論的に違っていたと言わざるを得ません。それでも敢えて一言で言うなら「空気」が違っていました。

例えば、これは違っていたら大変申し訳ないのですが、女性はお茶汲み、コピー取りみたいな考え方が色んな場面で垣間見えました。しかもそれは男性もちろん女性も何だかそれが当たり前、みたいな感覚があるみたいで、そこには文化相対主義的な「文化」があるのだらうと強く感じました。つまり僕が圧倒された「違い」というものは、その場で暮らして「空気」を共有しないと、そもそも議論すらままならない、といった性質のものだったので、共通理解を形成するというよりは、それらを尊重するというように割り切らないといけませんでした。



次に病院内で何を感じたか、ということですが、実際の実習内容は他の派遣学生の感想文にお任せするとして、文化を背景にした、明確な違いがありました。それは、患者さんお一人お一人が、医学生を教育するという事に関して積極的だったということです。彼らは、自分の病変、疾患を僕たちに見せて下さる事に関してはまったく抵抗なく、むしろ進んで協力して下さいました。思うに、資本主義というものは、ある側面、いかに稼ぐか、いかに他の人間との違いを見つけるか、自分の居場所を見つけるか、ということに焦点を置きがちで、これは個人主義にもつながり得る思想です。対して、社会主義の社会では、誰しもにある程度の水準が保証されていて、基本的には周りの人との格差はないのですから、却って他の人の事を慮る余裕が出来るのではないかと僕は考えました。権威主義としての医師に逆らえないだけではないか？立場によるものなのではないか？という疑問もありましたが、驚く事に、日本の場合とは違ってロシアでは医師の社会的地位はそんなに高くないそうです。医学部の教授ですら中流階級に属しているのだと、教授本人が仰っていました。(給料もよくないそうです)。ソ連が崩壊して「素晴らしい」とされてきた資本主義を導入してみたら、いいことばかりではなく、あの旧き良き社会主義に戻りたいとほぼすご年配の方もおられました。飛躍をお許し頂きたいのですが、医療というものは社会の要請によるもので、それを満たす為の医師や医学教育であるはずで、ならば社会を顧みない(社会にとって価値があるかどうかを考えない)ことや、医学教育が社会に開かれないうちが社会自体が医学教育に従事しないということは、おかしいのではないかと僕はこの病院実習での体験を通じて結論づけました。ロシアの学生たちはナイスガイ揃いで、非常に濃やかなおもてなしをして下さいました。上の人を立てる、時間を守る、誰かの家に訪問するときは手みやげを用意する、というように、色んな意味で、日本人と同じ感覚を持っていると感じました。もちろん色んな先生や地域の人たちも僕たちを丁寧に大切に扱って下さって本当に感動しました。

最後になりましたが、今回の留学も中山センター始め様々な方のご協力のもと実現しました。ありがとうございました。大阪医科大学とアムール医科アカデミーの更なる友情の醸成に向けて、これから

も貢献していきたいと思います。

■【看護学部】

①. 台北医学大学

(台北医学大学看護学部生研修受入 学生5名)

平成25年7月1日から7月31日まで海外交流協定締結先である台北医学大学より看護学部学生5名(3年生)、Chien Yuan Yu 君、Hsu Chun-Yuan 君、Chuang Ken-Tai 君、Cheng Li-Kai 君、Wang Yan-Pang 君が本学での研修のため来日しました。看護学部国際交流委員会によって策定されたプログラムのもと、オリエンテーションにはじまり、本学附属病院、学外施設での研修等1週間にわたる研修を全員無事修了しました。このたびの研修に際し、ご指導いただいた竹中学長、林看護学部長、黒岩病院長をはじめ本学教職員各位に改めて御礼申し上げます。

以下に研修に参加した学生の感想文を掲載いたします。



CHIEN, YUAN-YU

Although visit OMC just two weeks, it's a unforgettable and great memory for me. This two weeks in OMC I learn many things about Japan's culture, Japan's law, nursing system, OMC's hospital and care system for elderly. Because Japan's elderly rate increase early than Taiwan's, Japan has more experience to face problem from elderly increasing fast. So this program let me know many methods to solve these problems. Just like long term care insurance, facility for elderly or how to face dead. All things can let me learn and improve myself.

Be the leader of this program group. I am so nervous and restless, because almost every group member include me is first time to go to Japan, Japan is quite strange to us. When we arrive Kansai international airport, even buying a train ticket is difficult to me. It's lucky that train staff help us to buy the ticket to go to hotel and this thing let me feel the warm of Japan. But complicate Japan

Hsu, Chun-Yuan

railway still let us lose our way and let us cost 5 hours to get our hotel. We kept losing at train station. Especially when we take train to 難波 and change to 御堂筋 line. We don't know how to use our ticket, and we are so afraid about if we go out train station and the ticket would be taken and waste our money! Because of losing, I am more nervous to this program. But this night OMC nursing student Yoshiko, Minako and 絵里加 take us to try Japan's food - おこのみやき for welcome us to come to Japan, and it let me relax. These three Japan students become my best friend in Japan. Especially 絵里加 and Minako they take us to sight view at 京都 and teach us so many Japan's culture. They let me feel hospitality of Japan's people. It's a great memory to me.

The most nervous thing in this program is July 11th's presentation. Because we check the schedule about presentation's topic, and the topic is so big, so we prepare more than ten minute to present our report. But at the presentation day I see so many country's student's report is so different to us. Almost all report is talking about their life in OMC or other school's experience. Their report let me more nervous and so afraid that our report is too long and does not comply with OMC's request. In the time we present, I feel so nervous that if I don't have my notes I can't say anything. Although after presentation OMC's teachers give us good feedback to our report, but I think we can do better. This thing let me learn a good experience that must to do double check to teacher about topic and report's time, and it will let the presentation better.

The most attractive thing in this program is facility for elderly. The facility is different from Taiwan's. Its atmosphere is like they stay at their home. It's warm and comfortable. It has a special rule is every time they eat must to go to dining room, except people they feel uncomfortable. I think this rule make this facility more like home. Surprise me that its elderly and care keeper's rate is 2:1. At Taiwan it's a impossible thing! So I think its care quality is better than Taiwan's.

I appreciate my school TMU, nursing college and school of gerontology health management to give me the chance to visit OMC. Without their careful planning, I can't have the chance to learn so many things. Most appreciate to Osaka Medical College. They welcome us warmly and give us so many help to let us complete this program. Especially nursing department's teacher, Nakayama international center's teachers and all OMC's students always give us help and take us to learn so many things. I think I will miss Japan and Takatsuki city and treasure this great memory.

This is the second time that I come to Japan. From the last time I came to Japan about one year ago. The impression of Japan is still impressive. Orderly streets, well-behaved traffic and courteous people is different from Taiwan. But the biggest difference with time to Japan is that we were taking by tour bus, and this time we have to go by train. From airport to school with unfamiliar route and heavy luggage is a big challenge to us, first day's journey took about five hours before reaching the school.

In Japan, the proportion of the elderly population in the world is really top, and the proportion of the elderly population in Taiwan is also constantly growing up. Therefore, government gives special attention in the elderly in Japan. The curriculum at this time among us who introduced the OMC and Japan and hospital care system, in particular OMC demonstration room and in the hospital demonstration room. Understand the difference between Taiwan and Japan. And have a chance to exchange and learn with OMC students. In addition, also visited some specially designed assistive devices for the elderly; also saw Japan's design is indeed very creative and humane. Care institutions are also quite thoughtful planning. The most impressive is a case to house visits; nurses help families about the difficulty on caring, affirmative and specific comments for families and also assess case's health condition. And the families are also very grateful and welcome our arrival.

Although the case can only visited by two students is a little unfortunately, but I was lucky to be able to in the cases of home, is indeed a very different experience. And the Japanese government for elderly care insurance system is quite perfect can indeed reduce the considerable burden on families.

We also had a lot of different places to experience different Japanese culture during the holidays, very lucky also met Gion Festival, one of Japan's three major festivals, somewhat similar to the giant Taiwanese night market. The same is the way people everywhere, very lively. Kyoto also visited many shrines also to Osaka Aquarium, Universal Studios Japan and other places to play. Especially thank to Minako, Erika, Nao and Yoshiko during the holidays they are willing to accompany us out to play, and being our tour guide. It's really happy to have such a wonderful journey trip in Japan.

Finally, we also very appreciative to OMC teachers, OMC hospital staffs and OMC classmates for our assistance and help in Japan period. Especially thanks to Nakayama International center for medical cooperation and teacher Xiaodong. But also very grateful to have such exchanges between schools, allowing students to

have more different experience and feelings. we hopes future students can have this opportunity. Thanks again to give us assistance.

Chuang, Ken-Tai's Exchange Report

Glad to have such a chance to get this program from Osaka Medical College. In this program, I had great harvest in past two weeks because of Osaka Medical College's wonderful arrangements.

After introduction about the elder support system of Takatsuki city and local elderly nursing home's visiting, I can understand Japan's policies and system about aging society. Japan faces the problem earlier than Taiwan, so Japan has more experience, and this is also Japan's superiority. Long-Term Care Insurance is what Taiwan wants to imitate. I got some information from this program, for example, the elder who are disabilities can get allowance on buying or renting assistive devices. Government will pay ninety percent and user only has to pay ten percent, in other words, the price will cut a zero, and it can make some useful but expensive assistive devices being able to be used. Besides, levels in Long-Term Care Insurance are being subdivided into several grades, it can let government give resources more effective. This is important that I can have a chance to know about Long-Term Care Insurance in the program, and I hope these information can help me to get a well view to face to aging society in Taiwan.

At visiting local elderly nursing home, I saw a way that near ideal to take care of the elder. Their staff are adequate, and they can do well at making schedule for the elder. They also do well at not allowing the elder to let on the bed without doing anything, and it also won't happen on wheelchairs. The most important is that Japan don't use foreign carriers, so there are no derivative problems about them. Besides, they will open some area to let community people use. I think, it is a good way to not only feedback to society but also reduce the possibility that the elder in nursing home being separated from society.

In Nursing Department, I feel so amazed by their practice rooms, specifically the room to let students practice about taking care with the elder who are disabilities in their home. Students can practice in that room conveniently.

At last, I want to say thank you to Osaka Medical College's everyone. Thanks to Nakayama International Center and Nursing Department for prepare this program. Thanks to Osaka Medical College Hospital for guiding nursing environment in Japan. Without

your help, this program won't be so successfully. Besides, thanks to all Nursing Department's students for bring us to travel in Osaka and Kyoto and guiding us to know Japan's culture and tasty food. Thanks again, and I wish we can keep exchange in the future.

CHENG, LI-KAI

This is my first visit to Japan, I am very glade to work with OMC teachers and students to exchange in Osaka Medical College. OMC teachers are so friendly, and OMC students are very enthusiastic.

The first day, after arriving Kansai Airport, we went to our hotel in Takatsuki City, after twists and turns and getting lost, against all the odds, we arrived at the hotel we stay in the afternoon. Then OMC classmates Erika, Minako and Yoshiko Urata, came to the hotel to visit us, very happy to meet with them in the first day, they also took us to a local restaurant to eat famous okonomiyaki, they are really very heartwarming and hospitable, making us feel at home.

This two-week course, we visited the OMC and hospitals, and local hospice system, we can see the way they care their elders and the facility they use. Many designs show the Japanese respect and thoughtfulness toward the elders. In the hospital, the most impressive is teacher Nakayama who is so kind and friendly, she introduced Japan's nursing structure and environment for us, also very patiently explained to illustrate. And specifically she helps us to find cheap nearby supermarket, even printed a map! teacher is so NICE!. At school, teacher RUMI and teacher Xiaodong always concerned about our learning situation. While Xiaodong teacher explaining in Chinese, really make me feel special friendly in this foreign country, she helped us to resolve many obstacles on the Japanese language to communicate, also constantly exhort us little Japanese rules, so that we can adapt quickly to the Japanese environment!

The teachers took us to visit a local Takatsuki keyaki no go (a facility for the elderly), let us insight into the Japanese care for the elderly in Japan, also learned that the Japanese medical insurance system. And to the local aids center, with a variety of wheelchair and home aids, we also try to experience, very rich harvest. There is also the simulation center, allow students can simulate to draw off blood, auscultate heart sounds and breath sounds. We visited the room for the elders in the school, simulated ward. Enter the hospital to visit, see the layout and structure of the ward, which make people feel a sense of

warmth and feel like in home, and also led us to visit the presidential ward, is really an eye-opener, luxury and elegant environment, huge French windows, a good landscape and advanced services there, how lucky to see such a special ward. After visiting the hospital, we understood more of Japan's medical environment.

I am thankful for what OMC student has done for us: being our tour guide, taking us to Kyoto, visiting many temples, constantly explain and explain and share their lives with us all the way..... thank them for their help!

With their help, we do not have to look up the map, do not worry about getting lost. I really appreciate their help. Thank you!

WANG, YAO-PANG

I am very glad to have a chance to visit OMC in Osaka this summer. From apply the practicum to have an interview with teachers. All things that I just want to have a chance to go to Japan. Seeing, feeling and studying in there. Find out the difference between us. Most of all, I had a special experience in Japan, including nursing system, long-term care system, home care system and so on. All this department is very important for me, for our team.

We just have only two weeks in OMC. NICMC (Nakayama international center for medical cooperation) and nursing school had arranged plentiful lessons in OMC and some kind of practicum in the hospital. It is a wonderful 14 days in OMC. I have many kinds of acquisition in there. Especially in culture we are similar but a little different. Though when we talk about our unique custom and others will say: yes we also do this. It is really a funny thing, and we always give one who talk to us a warm smile. We also have many types of lessons in hospital. I like home care the most. Because I think it is a big trend in the future in Taiwan even though in the world. Bring the medical and nursing into the community or the elder's home directly. It must be a main tactic in Taiwan's healthy policy in the future. When I hear about this, I thought that must be a good model in Taiwan.

The most impressive day in Osaka is we have a class in nursing house. We went to the elder's house with a nurse. When we arrived at the house, the elder's son had already wait for us in front of the door. It's first time I went to the house in Japan. There is so cool in there. Too novel to calm down. The technical in the Japan is a little kind of different, though I have a good experience in nursing. The tools is also a strange thing for me. I have never seen it

before in Taiwan.

We have a visit in outpatient of cancer, which the place is totally different between Taiwan and Japan. In Taiwan there must be inpatient for therapy, and patient must stay in hospital for few days. In Japan they just come and have a treatment then they go back. This model is more effective than inpatient.

I would like to say in the two weeks, the most enjoyable thing in schedule is exchanging our culture to the 3rd grade students in OMC. It's really a awesome arrangement in the schedule.

Because all of us don't have an experience to chat with Japanese students, and we don't familiar with Japanese culture. We can through the sharing our country to each other to realize the funny things in Japan. They will understand Taiwan too.

Overall, I have a wonderful trip in Osaka medical college in this two weeks. I made many new friends in here. The most important is that I have a rich harvest in this time. I wish that I can go to Japan again soon. I am glad to have this chance to come to OMC.

(台北医学大学への看護学部派遣 学生5名)

国際交流協定を締結した台北医学大学(TMU)に、本学看護学部2年生の学生5名、上杉美月さん、加藤佑紀さん、兼田菜青さん、川崎智子さん、横山晴菜さんを3月9日～20日の2週間派遣しました。

渡航前に英語の猛特訓や、プレゼン資料の準備を行った結果、大きな成果と共に帰国できたようです。以下にTMUへの研修レポート(英語)と研修内容に関するアンケート回答を紹介します。



台北医科大学研修感想文

看護学部二回 上杉美月

3/9～3/20の11日間、台湾の台北医科大学への研修へ行かせていただきました。

研修では、クリニカルオブザベーションで付属病院へ行かせていただいたり、漢方医学やマタニティアフターケアのレクチャーを受講しました。クリニカルオブザベーションでは現地の学生と、

病院実習を一緒にさせていただいて、本当に書ききれないくらいたくさんのお話を学ばせていただきました。一番印象的だったのは、学生が基本的に単独でバイタルサインを測りに行き、血糖値測定をし、吸引も行い、注射、さらには port A まで行うのにはとても驚きました。これは、台湾の看護師不足を補うため、少しでも早く現場に出て適応し、働けるように、学生のうちから何でもできるようになっておく必要があるという考え方からだと思います。なので、台湾の新人看護師は就職して一ヶ月で単独で患者さんのケアを行うようで、それにもまた、びっくりしました。また、台湾での病棟の雰囲気も日本とはとても違って、とてもアットホームで看護師と学生がとても仲がよく、先輩のように親しく慕っていました。なので、学生もなんでもわからないことはすぐに聞いて、教育の場としてはとても良いと思いました。

さらに、台湾の学校では病名や薬など基本的にほとんどの単語を英語で覚えていて、カルテもほとんど英語でした。なので、日本ではほぼ日本語で習っていることに、焦りを感じました。これからの国際社会に適していくには、医療英語ができないことには始まらない、と強く思いました。

学校が終わってからの時間や、休日には現地の学生にたくさんのお話を聞いてもらい、たくさん素敵な思い出ができました。本当にウェルカムな感じでおもてなしをしてくれて、とても幸せでした。また、日本に来てくれた時には必ず同じように、おもてなしをしたいと思います。

この研修を通して、看護における考え方の違いや、患者が求める看護の違いなども2カ国でもかなり違いがあることを知り、日本だけでは学べないことをたくさん学ばせていただきました。本当に良い経験をさせていただきました。これからの学習において、日本語での病名だけを覚えるのではなく、英語でも覚えるようにしたり、日本でのケアと海外でのケアの違いを調べたり、日本にいても広い視野を持つことができるように、努力していきたいと思っています。また、実習において看護学生がわからないことをすぐに看護師や医師に質問したり、自分の意見を言っている姿が印象的でした。学ぼうとする姿勢を大切に、私も実習時には積極的に自分の意見を言って、わからないことは自分で調べた上で質問していきたいと思っています。

最後になりますが、中山センターの皆様をはじめカルデナス先生、佐々木先生にはこの研修で本当にお世話になりました。皆様の支えのおかげで本当に充実した、一生忘れられないような経験をして帰って来ることができました。本当にありがとうございました。

TMU 研修の感想

看護学部 2回 加藤佑紀

TMU 研修のために、夏休み明けから英会話と抄読会に参加し、日常会話の練習だけでなく、医療英語や制度の名称などいまま

ほとんどやったことのない内容を勉強してきました。この勉強がなかったら、先生の言っていることはここまで理解できていなかったと思うので、本当に参加してよかったと思っています。また、英語でプレゼンをすることも初めての経験で、内容も難しくかなり準備に時間がかかりました。しかし、時間をかけて勉強し、添削して頂き、発表練習したこともあって、プレゼンで扱った内容については、自信を持って英語で質問できたり、質問に応えることができたりと自分のものになりました。

プログラムの内容は、かなりハードスケジュールでしたが、一つ一つが新しく、興味深いもので TMU 側のいっぱい経験してほしいという思いも伝わりましたし、私はとても満足しています。土日を除いて10日間のプログラムのうち4日間は臨床実習でした。私よりもっと驚いたのは、どの病棟も学生と看護師の関係がフレンドリーだということです。学生と看護師間だけでなく、看護師さんがとても楽しそうに仕事をされていました。ナースステーションは笑顔が溢れ、朝のミーティングもヘッドナースを中心に座りながら、わたしを輪に入れておこなってくれました。英語をしゃべれない看護師さんもいたのですが、おおくの看護師さんが英語を話すことができ、私にいろいろ教えてくれました。昼ご飯は看護師さんや事務の方みんなで部屋に集まっておしゃべりしながら食べます。ある病棟では、看護師さんだけでなくドクターも一緒に食べました。日本の看護師さんは常に緊張感があり、正直学生にとっては怖い存在です。そのため何をしても、学生は緊張してしまいます。しかし、TMU ホスピタルは学生が看護師に質問しやすい状況があり、とても勉強しやすい環境であると感じました。実習にいけないと感じ取れない雰囲気だったとおもいます。

また、TMU の学生は日本では一人ではできないことを、一人でおこなっており、看護師と同じように見えました。最初、学生のことを看護師ではないかと思っていたほどです。台湾では看護と介護は分かれていて、看護師は洗髪や体位変換、シーツ交換など介護は行わず、家族がそれらを行わないといけません。なので、患者さんのベッドの隣には家族用のベッドが必ずあります。家族が介護できない場合は介護する人を雇わないと行けません。台湾の看護師は患者の治療中心、日本の看護師は患者の安全安楽が中心だと感じました。このような違いがあるため、看護師さんの患者さんとの接し方や、大学で学ぶことも違ってきているのだと思いました。

その他にも、産後ケアの講義で、母子保健について日本と台湾の違いをたくさん発見することができました。台湾は日本より少子化の問題が深刻であり、合計特殊出生率は1に至っていません。TMU の学生に聞いても、回答は結婚したくない、子供は欲しくない、仕事がしたいという意見がほとんどでした。台湾では産後は一ヶ月安静にしなければならない、これは食べてはいけない、してはいけないなどたくさんの伝統的なまじりがあります。若い世代は、伝統をあまり意識しなくなっているのと最新の台湾事情も聞きまし

た。産後ケアセンターという、産後のお母さんが入所する施設も普及していますが、高額で経済的に負担であり、外との交流を断つので産後うつを招きやすいのではという疑問に思いましたが、これが文化の違いなのだなと思いました。

少子化という日本と同じ問題を抱えながら、異なった政策、方針で少子化を解決しようとしていて、母子保健は文化の差が大きくでる分野でありおもしろいなと感じました。以前より興味はあったのですがこの研修を通して、他の国の母子保健、産後ケアについても知りたい、勉強したいと強く思いました。

TMU の学生は、英語が上手な人が多く、留学経験もたくさんあります。授業も配布資料は英語であり、解剖や病名は英語で習います。日本のカルテは日本語でし、授業でも英語はほとんど扱いません。TMU に行かなければ、このままの自分で満足していたと思います。しかし、同じ看護学生が英語で授業をうけ、英語のカルテから情報収集しているのを目の当たりにして、焦るきもちになりました。また、もっと英語が話せたら、もっといろいろ質問でき、もっと多くのことを学ぶことができた悔しい気持ちが残っています。一方、いまの私の英語の能力でも英語で楽しくコミュニケーションができるんだと自信にもつながりました。恋話や冗談をかわすことができ、初めて海外に仲のいい友達ことができました。本当にこの TMU 研修に参加して多くのことが学べましたし、なにより楽しかったです。是非来年も継続して OMC の看護学部から行ってほしいと思います。これからも、英語を勉強し続けてまた、私も留学にいきたいです。

『TMU 研修を終えて』

看護学部 2 回生 兼田菜青

一番の大きな感想は、もっと勉強しなくてはならないということです。

TMU の学生が日本の学生よりも勉強しているということを実感しました。

例えば、実習の中で看護師と医師と学生は、同じチーム医療の仲間として対等に話し合います。昼食も出前を取って一緒に食べたりしました。そうした雰囲気は、学生が医師や看護師に質問や意見をしやすい環境づくりであった気がして私達、日本の学生には新鮮な光景でした。その環境が、学生の学習意欲を支えているように思えました。また、学生の頃から採血や皮下注射、薬物投与などを患者さんに実施することが許されており、緊張感の中、学生がプロ同様に受け持ちの患者さんに責任を持ち、ほぼ一人で情報把握からアセスメント、治療を実施する姿を目の当たりにしました。患者さんの家族も学生に沢山質問し、学生は、的確に答えていたので、患者さんの家族と学生の間にも信頼関係があることも実感しました。また、看護学生にもリアルな人形を使用し、臨床を見据えたオスキ

ーという難しい実技試験があるということも聞きました。

私は、まだ本格的な実習を経験していませんが日本ではここまで自立した実習は行われていないのではないかと思います。『日本の教育は患者さんの安全重視であり、台湾は学生の成長が重視されている』という言葉をよく聞きました。どちらがよい、悪いとはありませんが、ここまで専門性の高い知識と技術を持つ学生が将来は私達と同じ職種として働くことを考えると、凄く刺激を受けました。

英語の必要性も実感しました。TMU の学生は日本の学生と比べるとほぼ全員英語で話しかけてくれましたし、授業内でも疾患名や治療名は英語で学習していました。使う資料も英語です。日本でも英語で学習するべきだと思いました。

プログラムについては、実習が少し多かったのですが、将来国際的に働きたい私にとっては英語で現地の病院で実習が出来たこと自体が、少しの自信となり更なる学習意欲への刺激になりました。また、助産学に興味があったので、台湾の産後ケアについての講義も興味深かったです。

私は、このプログラムに参加し、今まで以上に貪欲に学習し、英語を勉強し、将来海外で働く準備を進めていきたいと強く思いました。この経験は、私の将来の夢を確かな物にしてくれました。

TMU 研修感想文

看護学部 2 回 川崎智子

・学習成果について

毎週の英会話のおかげで、英語でコミュニケーションをとることに抵抗なく、現地の学生にも積極的に話しかけることができました。とても仲いい子もでき、英語で関係が築けたと思います。Clinical observation では英会話で医療英語についても勉強していたので、一緒に実習していた他大学の日本学生より理解できている自分がいて学習の成果が大変感じることができました。病名などの英単語も個人的にキクタンメディカルで日ごろ勉強していたので、その場で調べなくてもわかることがたくさんありました。(簡単なものですが)また、医療略語がカルテなどに記載されているのを見たときに日本での授業で習っているものが多かったのも、ちゃんと授業を理解していないとわからないので日ごろから授業をしっかり受けていて本当によかったです。今回で、看護の知識については今までの積み重ねがかなり重要だと思いました。

・台北で経験したことについて

台北ではバイタルサインの測定に PC をもっていわずに PC に情報が直接送られる血圧器を持っていくのでいちいち手で打ち込まなくてよい。体温は 2~3 秒で測ることができる。また、測る前にナースと患者のバーコードをかざすことで、だれが測ったのか、だれのデータかも同時にわかる。

* ナースの仕事で、日常生活援助をすると介護金がとられるので

基本患者には家族がずっと付いている。

* 病棟は広く、処置室(薬品や物品が置いている)は ID カードがないと入れず、セキュリティが強い

* 4回生になると病棟で、先輩看護師とともに働く。そうすることで就職後もスムーズに仕事ができるため。

* 輸液交換やバイアル、アンプルをひとりで扱える。

* 指先での血糖検査も生徒だけで行える

* 内服薬の管理も行える

* カルテの記入はひとりで記入した後、指導者のチェックを受ける

* 台湾の産後ケアは厳しく、それが子を産みたいと思えない若者の増加につながっている

* OSCE, GOSCE 制度がある。病院に OSCE センターがある

* 台湾独自の医師のかわりにカルテの記入、指示が出せる NP というナースがいる。なるには経験と筆記試験の合格が必要

* 台湾の大学病院は誰でも気軽に診察を受けに行けるなどを知ることができました。

・プログラムの内容について

Clinical observation は4日間ありかなりハードでした、、、5時起きで、一日中実習で正直しんどいことが多かったです。しかし NICU など MICU など忙しいところも見学させていただいて、貴重な体験ができました。まだ2回生なので日本の ICU も行ったことが

ありませんが今後実習で、台湾で見たことも生かして考察したいと思います。

また、授業に参加したり、授業を受けたりして、2週間だけですが台湾の医療について、教育についてたくさん知ることができました。

印象としては、2週間つめつめで盛りだくさんだったなと思います。体力も必要だとすごく感じました。

・今後の自分の進路への影響について

海外で看護師として働くにはまだまだ英語力が乏しいのでそんな夢をもつまでにいたっていません。しかし英語の勉強をもっとして、医療英語もたくさん学び、また海外の病院にいく機会があればいきたいという意欲は大変あります。自分はもともと救急に携わりたいので ICU を見学できて本当にうれしかったです。まずは日本の病院で救急に携わってスキルを磨くことがまず始めの目標です。英語から離れず、これからも勉強し続け、いつか海外でも活躍できる看護師になることが夢と、言えるようになるまで英語ができるようになることが夢です！救急にしか興味がなかったのですが、この研修を通して、海外にも目を向けたいと初めて思いました。

台北医学大学看護学部派遣感想文

横山 晴菜

このプログラムは、病院見学、病院実習、台湾特有の内容の講義

(漢方、台湾の現状を踏まえた上での母子保健について)、病院以外の施設見学、実際に生徒が受けている授業に参加したりと様々な視点から考えられた内容で構成されていたのでたくさんの方を学ぶことが出来ました。病院実習では日本の病院との違いを学びました。一番驚いたことは、日本では注射や点滴、投薬など危険の伴う行為は資格がなければ行うことは出来ませんが台湾では学生でもこれらのことが出来るので、4年生になるとほぼ看護師さんと変わらないくらいになるということでした。知識も技術も日本の学生より上だということを実感させられました。

台北に行って、台湾料理を食べたり、夜市に行ったり、観光したりと日本では経験出来ないことをたくさん経験しました。特に学生の優しさには感謝してもしきれません。学生は毎日のように「今日予定ある？なかったらどこか連れて行ってあげるよ！」と言ってくれました。学生も授業があつて忙しいはずなのにそのようなことは一切言わずに夜遅くまで付き合ってくれました。学生たちの助けがなかったら、このような体験はきっと出来なかったと思います。学校の方々も私たちのことを迎え入れて下さったので不自由なく過ごすことが出来ました。台湾の学生が日本に来た時には同じことをしてあげたいなと強く思っています。

台北に行く前に、準備として抄読会に参加したり、毎週英会話をやっていました。抄読会では医療英単語を勉強することができ、かなり役立ちました。ただ、病名の単語をもう少し覚えておくとよかったかなと思いました。英会話においても練習しておくことで構えずに話せることができたのでやってよかったと思っています。しかし、リスニングの対策が甘かったということを痛感しました。医療英単語を聞き取ることに苦戦したので対策をしておくべきだったと思いました。

このプログラムに参加して何より自分の視野が広がったと感じています。今まで海外で働くということを考えたことはありましたがそこまで思いは強くありませんでした。しかしこのプログラムを通してその気持ちは強くなったと思います。今後、もっと具体的に考えてみようと思っています。このプログラムに参加できて本当に良かったです。この交流が今後も続くように祈っています。

5. 第14回国際交流シンポジウム

2014年7月11日(金)に、大阪医科大学臨床第Ⅱ講堂において、「第14回国際交流シンポジウム」が開催されました。

米田神経精神医学教室教授の司会で、花房 NICMC センター長の挨拶でシンポジウムが開会しました。

プレゼンテーションはライブと録画の混成で、本学の学生の他に5大学の学生が発表をしました。発表順から列挙すると、中国医科大学(録画)、中国医科大学 OMC 派遣(ライブ)、韓国カソリック大学(録画)、韓国カソリック大学 OMC 派遣(ライブ)、ハワイ大学(ラ

イブ)、ハワイ大学 OMC 派遣(ライブ)、マヒドン大学(録画)、マヒドン大学 OMC 派遣(ライブ)、マヒドン大学 SIMPIC OMC

派遣(ライブ)、台北医学大学看護学部(ライブ)、台北医学大学 OMC 派遣(ライブ)、台北医学大学(録画)、台北医学大学派遣(ライブ)の順で発表され、どれも素晴らしい内容で、会場からは惜しめない拍手が送られました。シンポジウム終了後、場所を本館地下食堂に移して、更なる国際交流を深めるために、食事をしながらの意見交換会が開催されました。発表もそうですが、地下食堂での懇談も白熱して多少時間がタイトになりましたが、有意義な 1 日として、参加者全員の心に深い感動が残ったと思います。後掲はシンポジウムのポスターです。

Nishiyama International Center for Medical Cooperation
14th International Symposium on Medical Education
Life's hours about the medical education, the school life, and the culture abroad

大阪医科大学 中山国際医学医療交流センター
第14回 国際交流シンポジウム
各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう

2014年 7月11日(金) 16:00~18:30
大阪医科大学 臨床第二講堂 ※その後地下食堂にて食事をしながら意見交換会
教職員・学生の皆様、ご自由にご参加ください。

Opening remarks by Professor Toshiaki Hanafusa, Director of NICMC, Osaka Medical College

Presentation

China China Medical University
YU, Hai / CHEN, Yan (CMU)
Yuko GOTO (OMC)

Korea The Catholic University of Korea
KIM, Youme / CHOI, jihun / KANG, Younghoon / LEE, Seungyeob (CUK)
Ayako BUN / Shinya UEYAMA / Shoichiro IZUKA / Shinya ICHIHARA (OMC)

The U.S.A. University of Hawaii (John A. Burns School of Medicine)
Diane CHEN / Diana LU / Hisami OBA / Elyse TOM (JABSOM)
Shinya ICHIHARA / Yuya KAWAMOTO / Yu NISHIHARA / Tsubasa KOMAI /
Yuhel TSUJI / Yumi TAKEHISA / Yu SUEKATA / Kotaro MAEDA (OMC)

Thailand Mahidol University (Faculty of Medicine, Siriraj Hospital)
Jingswat SIRIKUNCHOAT / Thanita LIMSRIE /
Witsarut NANTHASI / Pubet WEERANAWIN (MU)
Natsuko OZEKI / Shunsuke IWAJ / Yasuhiko UEDA / Yu NISHIHARA (OMC)
Kazuaki AOKI / Hayata UESAKO / Akiyuki ASANO / Yasuyuki KAMEOKA (OMC)

Taiwan Taipei Medical University (College of Nursing)
CHEN, Yuan-Yu / HSU, Chun-Yuan / CHUANG, Ken-Tai
CHENG, Li-Kai / WANG, Yao-Ping (TMU)
Erika INOUE / Yoshiko URATA / Minako HATA (OMC)
Taipei Medical University (College of Medicine)
HSIN, Ling / CHEN, Yu-Da / CHUANG, Te-Yen / SU, Ping-Yuan (TMU)
Ayane SAKUMA / Ayumi KIMURA / Hiroyuki SHIMIZU / Naoki NOMA (OMC)

Chairman Hiroshi Yoneda Professor, Faculty of Medicine, Osaka Medical College
Commentator Rumi Tsukinoki Junior Associate Professor, Faculty of Nursing, Osaka Medical College

主催:中山国際医学医療交流センター(NICMC)

6. 社会貢献(地域との交流)

2015年3月14日に茨木市国際親善都市協会のボランティア活動団体である姉妹都市活動室(ⅢN)の日本文化体験ワークショップに、韓国カソリック大学、タイ・マヒドン大学それぞれの医学部学生4名が参加しました。ワークショップでは着物の着付け、手巻さずしを作って食べる等、日本文化の体験が初めての外国人にも楽しめるように工夫されていました。このように地域の人達に温かく接してもらいながら日本の文化を楽しく体験することが出来たことよって、日本に対する理解が深まり日本への見方も変わったという参

加学生からの感想がありました。

7. 交流協定締結校以外との交流

交流協定締結校との学生の交流については、NICMCにおいてすべて把握しているが、締結校以外との交流については把握し切れてはいない。しかしながら、今年度は下記の2大学について学生自身からの報告で把握することが出来た。

- ① Medical Exchange & Discovery (MED) Program (スタンフォード大学において)2名

今後は出来る限り交流の全体像が把握できるように努力する必要があると考える。

8. センター長の医学英語勉強塾

当センターでは、学生の留学をサポートする一環として、学生の臨床英語力の向上を目的に、毎週月曜日の早朝(午前7時15分~8時15分)、希望者に対してセンター長が個人的に英語の勉強会を開催しています。2012年12月にスタートし、毎回、学年を問わず10名前後の学生が集まって一緒に勉強しています。題材は主として New England Journal of Medicine の Clinical Problem-Solving のコーナーから選んでいます。このコーナーでは、臨床症例を題材に、臨床現場での患者の状況や診断過程が述べられる合間に、専門医が数々の suggestion を現場に与え、徐々に正しい診断・治療に結びついていくスタイルで記載されています。本学の学生は、第3~4学年の PBL において症例のシナリオをもとに鑑別診断を進め、その疾患および周辺疾患について知識を得るという学習を行っていますが、それをより深く、また英語で行うことにより、臨床医学英語に親んでもらい、留学先での臨床実習に役立ててもらおうという趣旨です。私がとくに留意していることは、臨床でよく使われる英語の表現に親んでもらうことと、症例の主訴、現病歴、身体所見について内科の専門医の立場から解説し、臨床データの読み方、鑑別診断の進め方等において、様々な症状や検査データの異常を来す基本的な病態を考えることの大切さを伝えることです。参加は自由で、学業が忙しいときに欠席するのも自由です。学生のレベルはまちまちですが、皆高いモチベーションを持って参加してくれています。留学先で英語の必要性を痛感し、もっと勉強したいと思い立ち、留学前とは見違えるようにしっかり予習してくるようになった学生もいて、教える側もやりがいがあります。私自身も学生達の向上心に刺激され、楽しみながら毎週一緒に勉強しています。この英語塾で学生の皆さんが楽しみながら臨床医学英語に親しみ、留学先での実習や将来の医師としての診療に役立ててもらえればと希っています。

センター長 花房俊昭

年度	開催回数
2012年	7回
2013年	30回
2014年	31回

9. 留学奨学金

本学のNICMCにおける「海外交流支援制度」は、2002年4月1日に取扱要領が作成され、それ以降実施されてきた。最も直近では、2008年7月1日に要領が改訂され、現在までの運用に至っている。過去に支援制度を利用した人数は、派遣が10名で、受入が4名となっている。2013年度も1名を派遣し、2014年度についても複数名の派遣を予定していたが、申請者が無かった。

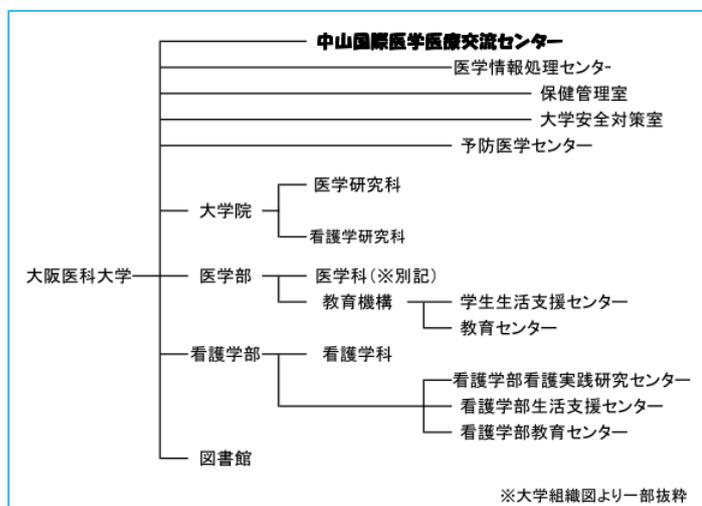
この支援制度の目的は、学部学生、大学院生、研修医、ポスドク、非常勤教員、特別研究員を対象として、研修及び研究を目的とした海外留学、海外からの留学生を積極的にサポートするために設けられた。

支援する内容としては、6か月以上の一般留学並びに受入留学とした。

支援金は、支援を希望する該当者に対し、NICMCの予算枠の範囲内で決定するが、応募の状況により弾力的に対応するものとしている。

支援金を受給した留学生は帰国後1ヶ月以内に留学成果報告書を委員会宛に提出することが義務付けられており、また同様に、受入留学生に対しても、帰国までに留学報告書を委員会宛に提出することが義務付けられている。

10. 資料(組織図、交流センター関連委員会他)



の組織であり、学長の指導の下、センター長を中心として、運営委員会での議論を経て、運用が図られている。また、毎年綿々で行われている国際交流活動に対し、附属病院の各診療科の教員から、多くの積極的な協力を受けている。勿論、国際交流活動は単なる一部署で行えるものではなく、全学で取り組んでいるから行えると言えるであろう。

11. 2015年度 年間交流計画(予定)

大学名	派・受	日程	人数
タイ・マヒドン大学	派遣	4/6~5/1	3
台北医学大学	派遣	4/6~5/1	3
スタンフォード大学	受入	4/24~5/12	2
ロンドン大学	受入	4/27~5/22	1
ハワイ JABSOM	派遣	5/4~5/29	1
シンガポール大学	受入	5/25~6/19	2
アムール医科アカデミー	受入	7/21~7/31	2
ハワイ大学	受入	7/21~7/31	4
第15回国際シンポジウム		7/31	
ハワイ大学夏期 W.S.	派遣	8/2~8/7	6
台北医学大学	受入	11/2~11/27	4
韓国カソリック大学(予定)	受入	2/22~3/25	4
ハワイ大学春期 W.S.	派遣	3/6~3/11	6
台北医学大学看護学部(予定)	派遣	3/6~3/11	1
タイ・マヒドン大学(予定)	受入	3/14~4/8	2
韓国カソリック大学(予定)	派遣	3/17~3/30	1
マヒドン大学 SIMPIC(予定)	派遣	3/18~3/21	10

中山国際医学医療交流センター(NICMC)は、大阪医科大学直結

12. その他

※NICMC の各種統計実績(2005～2014)

年度 内容	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0
	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5
協定校からの学生受入人数	23	29	20	11	11	12	5	10	3	8
協定校への学生派遣人数	40	31	23	30	24	14	13	3	11	5
協定校外からの学生受入人数	0	0	0	0	2	1	6	8	0	0
協定校外への学生独自参加人数	2	-	13	4	-	2	-	-	-	-
海外から来訪者	5	12	14	5	64	40	28	24	-	-
JICA 受入研修員数	0	0	15	22	0	0	0	0	0	0
協定校における国際カンファレンスへの DVD 参加学生数		1	3	2	4	3	5	4	0	0
国際テレビカンファレンス開催回数	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
年度における新規協定校締結数	1	1	1	0	1	1	2	1	0	0
国際シンポジウム開催回数	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1
国際シンポジウム後援数	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
ハワイ大学 PBL ワークショップ開催数		1	0	0	1	2	0	0	0	0
抄読会開催数	31	30	7	/	/	/	/	/	/	/

(-)は確認出来ない

※大学別受入・派遣人数(2012～2014)

年	2012		2013		2014	
	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣
Amur State Medical Academy					Russia	
	0	3	3	0	0	3
University of Hawaii					USA	
	4	16	4	9	4	14
Mahidol University					Thailand	
	3	0	4	7	6(2) ^{注2}	8
China Medical University					China	
	5	0	2	2	0	0
Catholic University of Korea					Korea	
	4	4	4	3	4	6
Taipei Medical University					Taiwan	
	4	0	3(9) ^{注1}	4(6) ^{注1}	9(5) ^{注1}	9(5) ^{注1}
合計	20	23	29	31	23	40

※注1:カッコ内は看護学生
注2:カッコ内は学生 検査技師専攻

2014年10月吉日